女鑑

第十六年

第拾壱號

女鑑　第十六年 第十一號　目次

日露戰爭 日本赤十字社救護寫眞帖

第貳篇

●印刷鮮麗●紙質精良●裝釘優雅●紙幅菊倍判●紙數五十葉
●寫眞百拾餘個●定價金七拾錢郵稅金拾錢

博愛慈善の人道に基き報國恤兵の大義に據りて彼我の別なく傷病兵を救護し以て我幾十萬の將士に温き情味を感ぜしむると共に又幾萬の敵をして我が慈愛に泣かしめ環視列國の驚歎と賞讃とを博したるものは實に今回の戰役に於ける我日本赤十字社の行動にあらずや本寫眞帖は即ちその行動の狀况を不朽に傳へんが爲に特に日本赤十字社に請ふて編成せるもの又別に大本營及諸官衙の許可を得て救護に關聯せる寫眞を掲載せるもの尠からず今や第二篇新に成り玆に本寫眞帖の完結を告ぐ外に勇烈無双の武あると共に内に博愛慈仁の淚ある我國民の眞面目を知らんと欲せば來て本帖の紙面に輝く崇高偉大の光明を看よ

發賣所

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

日本赤十字發行所

電話新橋特八八…二六九三

菊の花



西園寺侯の家庭



侯爵 西園寺公望君

世嗣 八郎君

世嗣夫人 新子君

寺島伯の家庭



伯爵　寺島誠一郎君

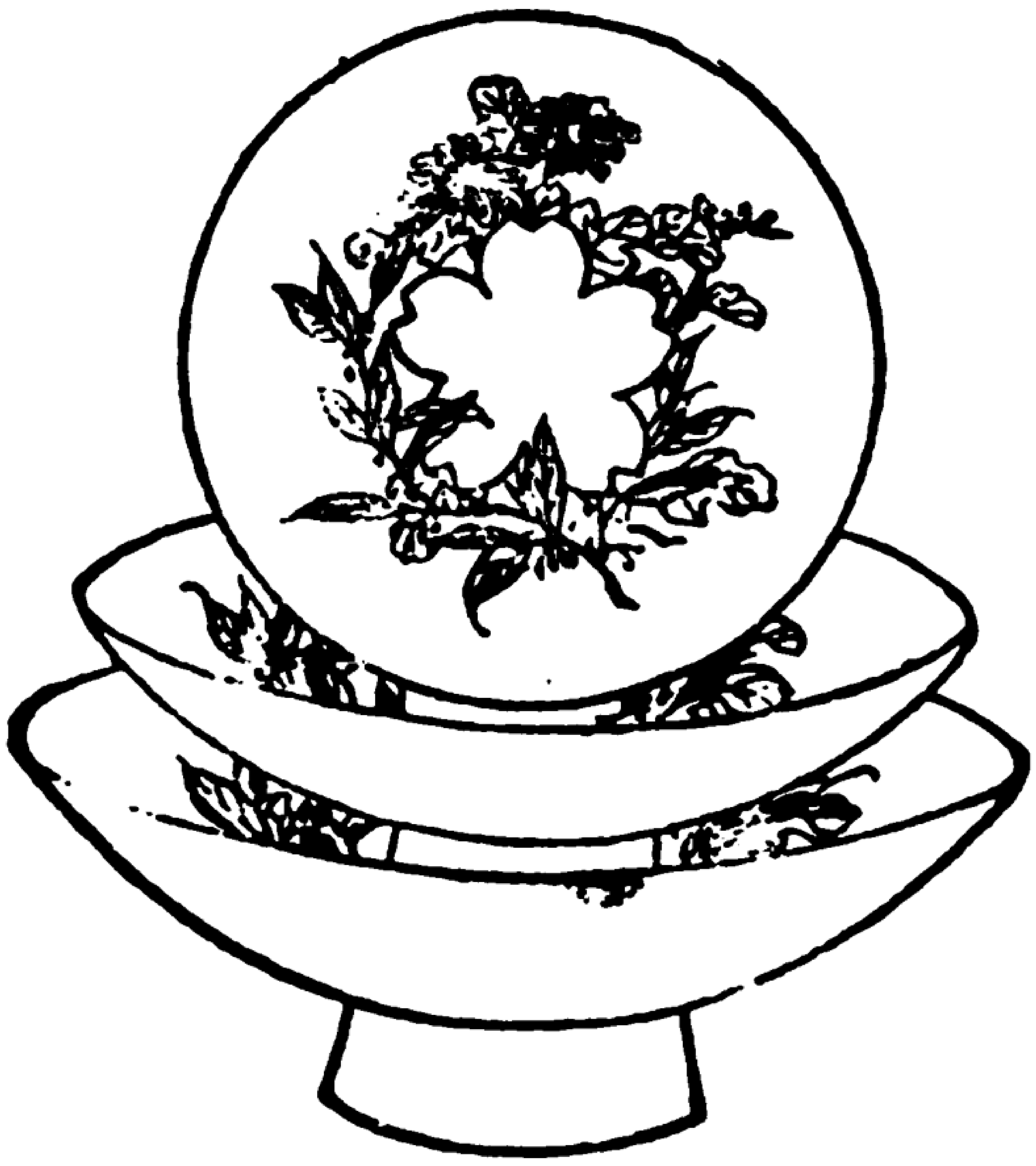
同令夫人　京子君

本野公使の家庭



本野一郎君　令夫人久子君　令嗣盛一君

金銀盃類



尙又各種紀念徽章類嶄新なる意匠を用ひ何程多數の御注文にても迅速に特別廉價を以て調進仕候

東京市下谷池の端仲町

宮內省御用達 玉寶堂

電話下谷 特 九六五番 一二四四番

麝香とスミレとばらの香料を含む　色白くきめこまかになる

登録商標

小判石鹼

小一個十二錢　一箱六個入　大一個二十錢　一箱三個入

東京伊勢町藥種問屋平澤重助製　特電本一一三四　東京本町三寶堂發賣

社交界の名花

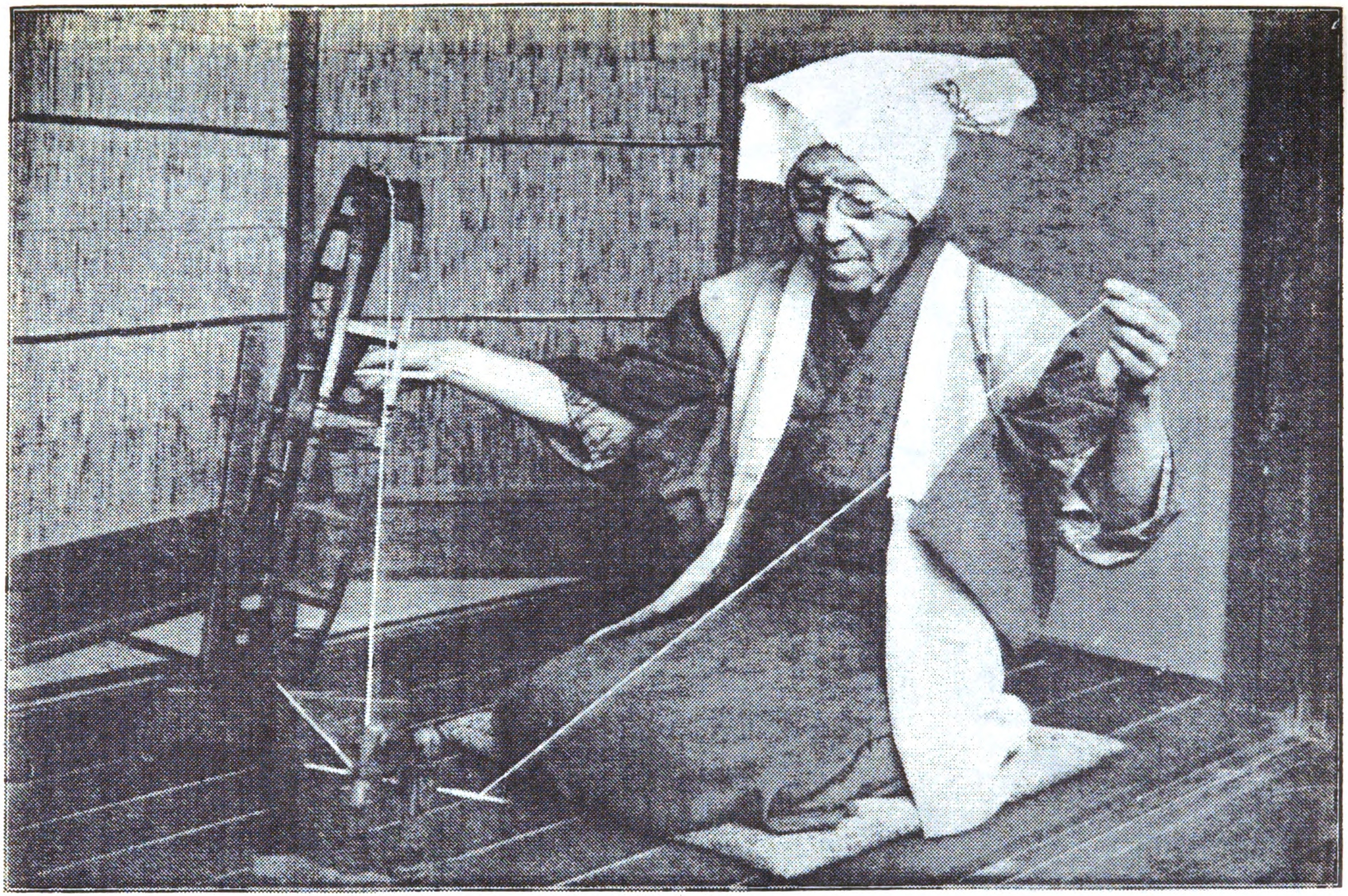


右より　清浦男夫人錬子君　大山侯夫人捨松君　東郷大將夫人鐵子君

小櫛のはこび

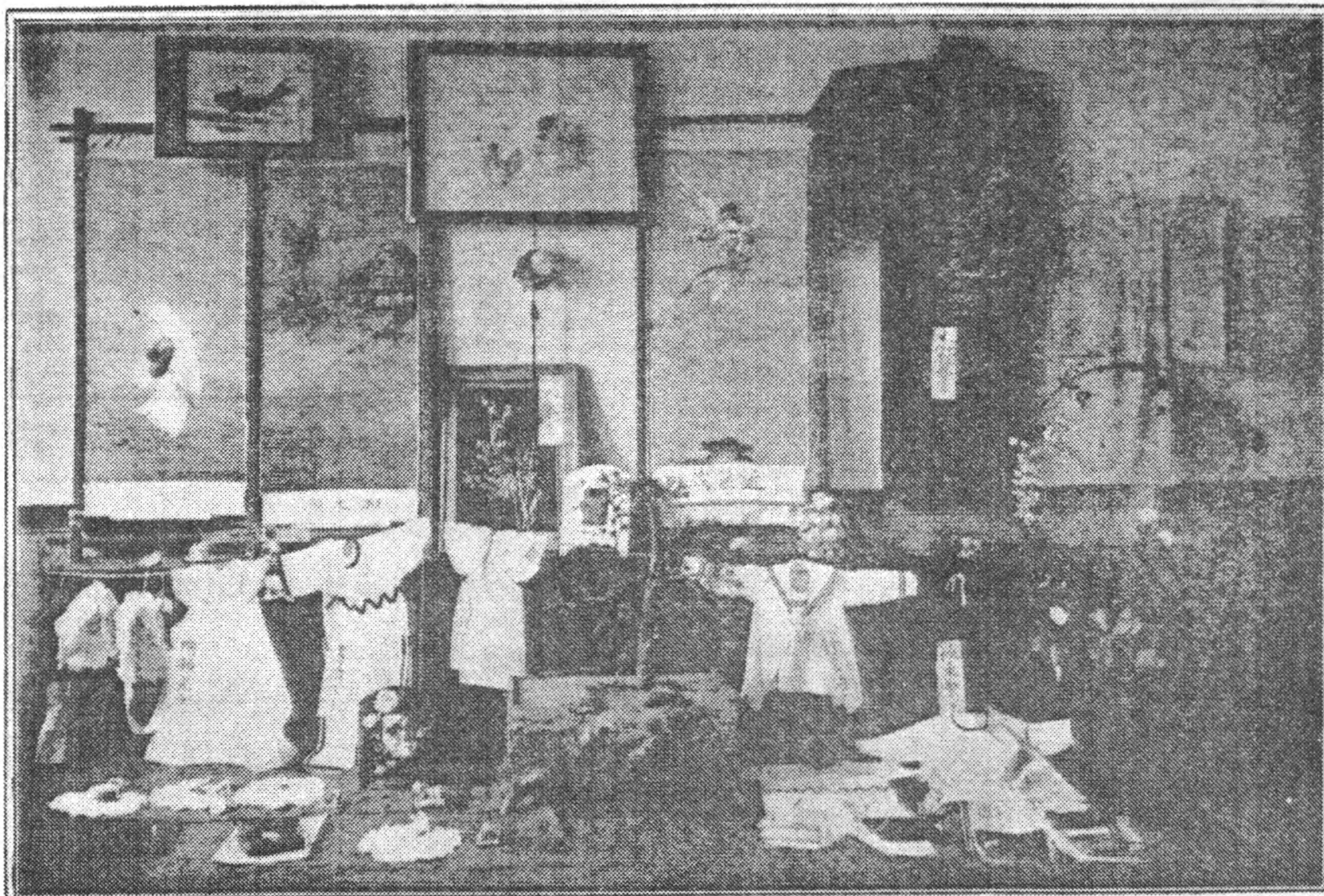


糸ぐるま



子爵SH君撮影

女學生の手藝



東洋女藝學校成績品

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

登錄商標
壽美禮おしろい

五二會品評會功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい



◉ 壽美禮 おしろい ◉

ねり製 定價（大壜 二十錢 小壜 十二錢）
水製 定價（大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢）

ヴワイオレツト水製



錫栓附乳白硝子壜入

すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成績液體等を以て配劑しあるを以て肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌へを清々しく天然の色白きに至るべし菫『おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨んで衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京橫濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◉ 西洋洗滌劑 壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶番ひ　大袋入二錢
罐詰六錢五厘　袋入一錢

◉弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊舖新製の原料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を用ひ給へば能くあかを落し御肌を美くしくなす

◉常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半えりハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

◉使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標
西洋色白くなるあらひ粉
SUMIRE
Washing Powder

壽美禮あらひ粉



製造本舖
東京東兩國
元町兩國橋際
壽美禮堂謹製

販賣所は全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ





實用的教育

婦人は如何に教育すべきやといふは刻下の大問題にして容易に解決すべきものにあらざるが如し、されば吾人は實用的智識を得せしめたきを以て、其目的を達したるものといふに躊躇せざるなり、所謂實用的智識とは、徒らに文字の上にのみ走らざる實際の生活上に有用なる知識にして、空理空論の弊を脱したるものを謂ふ、されば眞實に婦人を教育せんと欲するものは、常に程度及標準を實用の點より遠からざるやう勉めざる可らず、婦人を教育するに徒らに程度を高くし學者となることを標準とするは決して得策にあらず、故に婦人は萬巻の書を讀まざるも可なり、千里の道を行かざるも可也、博覧強記は婦人の名譽とするに足らざる也、要は虛飾を排して實用を主とし、名譽を後にして、實行を先にし、以て將來實際の生活に處する時の用意をなし、特に思想を高くし、感情を優にし、想像を美にし、且是非善惡を判斷する力を養ひ、至艱至難なる人生の行路を誤まらざるを期すべし

論說

女子と職業

文學士　三輪田元道

學者須く時を知るべしと、古人の曰はれたるは旨あるかな、されど、動もすれば、人は在來の慣習に盲從するにあらざれば、先例を模倣するに止まる傾きあり、玆に於て、有史以來幾千年を經にける人類社會もなほ、今日の進歩を見るに過ぎざるなり、

今日の女子教育は、數量の形式に於ては、甚だ盛なりといへども、熟々其内容を考ふれば其性情に屬する心理的研究の乏しきのみならず、其職業に屬する經濟研究も亦精しからざるなり、されば、女子教育に關係するものは勿論世の學者及識者は共に、これを研究することは急務なからんか、

吾人は聊か輕疎の恐れあるも、この日露大戰後の女子教育としては、女子に或る部分の工業的智識を授くるを以て必要と信せり、

家庭と教育

庭訓の弛廢

子女の心性は家庭に於て其大部分を鑄冶せらる、故に教育の最大効力は庭訓の上に存在す、今や即ち社會の標準たるべき紳士の家庭概ね規律と秩序とを喪失す、庭訓の委靡不振推して知るべし、則ち家庭の紊亂は孝道衰微の一原因として之を論ずべきのみならず、教育界に於ける一大病根として講究せざるべからざるなり、

學生性行の不良は當今教育界の一大病弊として、目下官民を通じ熱心に論究する所なり、之を事實に

徵するに青年性行の不良は比較的に所謂紳士の子弟に多きことは敎育家の認むる所にして、唯々其現れて人の注目に上り又墮落して刑辟に觸れざるものは、上流社會の弊事は暗中に葬るの便宜多く又甚しき墮落を牽制するの道あるに依るのみ、斯の如くにして子弟の性行の不良に流るゝは畢竟庭訓の弛廢せる結果にして、庭訓の弛廢は則ち家庭の紊亂に原因す、學生問題の起由する所、其實學校に在り敎師に在り四周の事情に在り、又當局者も一部を分擔すべしと雖も庭訓の振はざるは豈其最も重大なる原因たるにあらざらんや、而して庭訓振肅の道は家庭を整ふるに在り、家庭を整ふるの法は所謂紳士なる者の亂行を誡むること、必ず其第一位に居らずんばあらざるなり(東京日々)

抑も、わが國一般の經濟界は、農業を以て、天下の大本とするに止まらず、工業時代に入るものと言はざるべからず、而して、古來養蠶事業の如きは、女子の重なる業務なると同時に、これより生ずる絹糸は、悉く女子の手を勞して織られけるに、今日は機械の進歩につれて、女子の手を省くこと少々にあらず、從ひて、女子の手を逸するに至るは明なり、果して然らば、更に女子の手をして、餘力を他に及ばさしむるは、時代の要求ならんか、

特に、戰後の政策上、最も必要なるは、日本帝國の生産力を增加せしむるに若くはなし、されば女子をして、其性情と體格とに適當する限りは、不生産的にして、單に虛榮心を滿足せしむる如き、方面に走らしめんよりも、生産的方面に趣かしむることこそ急務なれ、從ひて、實用的手藝なり、美術的工藝なり、將た商業なりは、大に奬勵せざるべからず、

固より、わが國の女子は、旣に、裁縫、造花、刺繡等につきて、其成功を奏しつゝあるも、更によし、積極的工業に向ひては、秋毫も志なきのみならず未だ、斯る智能を授くる機關だになきは、遺憾ならずや、

これを以て、吾人は、女子をして化粧品の製造を初め色染事務、陶器漆器類事務等、總て女子に相當否、寧ろ、女子の天性上長所と見るべき工業に從事せしめば、如何と思ふなり、但し工業と稱するも、土木、建築等の如く、女子には如何と認めらるゝものは省くを以て、決して、男子と分業上の衝突

教育の目的

教育の目的は完全圓滿なる人物を養成するに在りとは、古來學者の主張することにして、教育者及び一般世人の殆ど疑をはさまざる所なるが、此は一種の空想にして啻に實現しがたきのみならず、之がために人の子を賊し、社會を害すること少からず、抑も吾人は、才能にも壽命にも天與の際限あり到底完全圓滿なる人物となり得べきものにあらず、勿論此理想に多少接近せむことは不可能のことにあらざるべきも、其の結果は決して喜ぶべきものにあらずして、社會はどん栗の丈比べとなり、類似の人物のみより組織せられて、原始時代の狀態に退化せざるを得ざるべく、恰も單純なる細胞より成れる下等動物の如くなるに至るべし、只如何なる社會にも先づ強固を見るが如き恐れはなかるべしと信ず、由來、わが國には、無爲寄食の恥づべきを知らず、反りて上品なりとするなり、從ひて、女子の工業は、一朝一夕に普及すること難からんも、今日一創見を立てゝ、女子と工業の關係を結ぶは、後世のため頗る幸福ならん、いづれの國とて、略、同樣のことならんも、社會の活動的元氣となるものは生産的業務を執る中等社會にして、無爲の上流社會と、寄食の下流社會の與る所にあらず、故に、社會政策上最も必要なることは、生産的工業を歡ばしむる工風を作るにあり、嗚呼工業は文明の源泉なり、一日も忽にすべけんや、

女子教育の活用

文學士　小川銀次郎

私より二年ばかり後に大學を出た文學士で、永い間教育に關係して居りまして、此人の薫陶を受けた人も隨分多く御座いますし、文學の或方面には名の聞えた人で、昨年結婚し收入百圓內外の友人があります、其友人が突然、私を訪ねました、處が挨拶が濟みますと私に對ひ、僕は君と議論をする爲に來たのだと申すので、私は呆氣に取られました、其人の申しますには、僕

なる結合あるを要し。結合の第一要件は言語を共にし、道德を等うくし、法律を同じくするにあるを以て、國語の教授、道德の訓練、遵法心の修養等は、成るべく完全にして圓滿ならむことこそ望ましけれども、其の他の學術技藝に至りては、決して然らず、少年の大多數は、卒業の後、或一種の職業に從事して、身を立て家を興さむとするものなれば一藝一科に長ずるを得策とし、社會も亦分職の益々進歩して、專門の愈々發達するを利益とし博學多藝の人を歡迎せずして、一藝一科に長ずる者を優遇するは、文明各國の實状なることは、人々の熟知する所なり、然るに今日中小學の實際を見れば、圖畫、音樂に拔群の天才あるものも、物理算數の智識に乏しとて落第せしめられ、理化博物に非凡の興味を有せるものも、習字音樂體

は現今の女子教育と云ふものに付いて、大なる議論を持つて居る、君は女子教育に關係して居るから、此議論を聞かせてやる。君若し此に對する辯解があるなら、充分に述べて、僕の疑惑を解いて呉れ給へと。なか／＼の氣焰でありますので、私は左樣な事なら聞きませう、一體如何云ふ御議論でありますかと云ひますと、友人は君も承知の如く、僕は昨年六月に結婚した、妻は某學校の卒業生であるから充分家政のことなど心得て居るべき筈である、また僕の主義として男は外に働く、女は内を治める、各其分を犯してはならぬことゝしてあるから、結婚の後家事のことは一切妻に任せて、俸給は其まゝ妻に渡し、小使だけを貰ふ樣にして居た、所が妻の遣口が隨分と妙だ、安物買ひの錢失ひと云ふ諺言を固く奉じて、何でも安いものは買はぬ、一寸火鉢も洋燈も机も何れも高いものを求める、其學校で教はつた衛生學の應用であらふ、火鉢にあたるのは炭酸瓦斯を呼吸して有毒であると云ふので、寒くなつてから火鉢を廢して暖爐を供へつけた、洋燈も普通のは光線が直接に眼に向つて來るから眼の毒だと云ふので、反射鏡のある天井から吊す所の大なる洋燈とした、かうして居ても疊の目が讀める位に明るい。そして襯衣などは三日位に洗濯する、少しでも汚があるのは衛生にわるいと云つて、一寸着ると洗濯屋に遣るから、直ぐと襯衣がきれ損じてしまふ、斯ふ云ふ工合の家政衛生家應用である。しかし僕はすこしも嘴を入れない、妻が若し過失があつた

操等に不得手なりとて、鈍才若しくば白痴者と同一視せらるゝの例あるは如何、たとひ天才あるものにても、之を自識することは、一定の教育を受け、一定の年齢に達したる後にあらざれば、能しがたきことなれば、再度落第せしめられ、教師にも父母にも劣等生として扱はるゝときは、遂に自暴自棄に陥り、あたら天賦の能力を發揮するの機會を失ひて、凡化し、萎縮し、堕落するに至るは當然のことにして、誠に惜むべきの至りなりとす、思ふに彼の教育者に至りては、廣く各種の學藝を修めざるべからず、少年が有する各種の傾向特質を鑑別して適當に之れを、教訓せざるべからず、かゝる職業の特質より、成るべく圓滿なる發達が要する事情あり、從つて廣く各種の方面に於て平均調和せる學修をなし、品行の如きも中庸を失

ならば後に覺るであらう。自分の經驗からでなければ自分の德とならぬと思ふて、其爲すがまゝにして置いた。で暖爐はどん／＼たいて暖かで、洋燈は赫々として明るいが、さて月末になると何時も餘裕がなくなる、或は足らなくなる、しかし兎に角やつて來たのであるが、十二月に至つて、妻は如何にしても大晦日を越すことが六ケしいことを知つた、それで僕に相談をかけた炭油代が、いくら／＼で米代何代が斯く／＼で、どうしても三十圓不足をしますから、何とかして頂きたいと云ふ。僕は併し之を機會として懲してやりたいから、少しも取り合はない、内の事は一切お前にまかせてある、今になつて經濟がたいへんと云ふたとて爲方がない。また年末でもあるから他から借る所もないと斷つて居ると苦くなつたものと見えて、急に家政の方法を變へた、暖爐は廢められ火鉢となつた、先きに寒くもないのに、どん／＼石炭を焚いて、十二月の寒むいのに、ちつぽけの手あぶりに手をかざして居らねばならぬ、三日とおかず洗濯屋へやつた襯衣は今度三週間も着せられると云ふ仕末。それでもなか／＼三十圓は浮いて出ない、遂には泣きつく様に云ふので、それでは僕の衣裳を二枚だけだすから、あとはお前の衣裳を三十圓になる位まで出して質屋より金を借りるより外はない、と云つて其事に決めたがさて質は如何しておくものかは僕も知らない、妻も知らない、智惠を絞つたあと、態々車を質屋にやつて其家の番頭を呼ぶことにした、番頭が來た、こ

せざるを貴しとする者なれども、普通の人間に至りては、大に其の趣を異にする者あり、教育者はよく此の區別を理解して、妄りに自己の模型を以て、一般の少年を鑄造せんとすべからず（報知）

女子の服装

現時女子の服装は變遷の時代にあり、如何に變遷して遂に如何の成型に落着くやを豫言し易からざるも、到底現狀に安んぜざるは疑ふべからず、然れども學生の服装と一般女子の服装とは相關係する所少からざるも同一問題にはあらず而して學生の服装に就て、吾人は少くとも昨今に於て文部省が彼是干渉するの必要あるべしと思はれず、若教育方面何等かの干渉を要するとせば當該學校即然るべし吾人の見る所を以てすれば日本の

れ丈の衣裳で、三十圓位借りたいと、顔を火にして頼むと、番頭はなか〱これだけの衣裳では承知しない、歳暮で逼迫であるからとか何とか申して、其外の衣裳を山の樣に積ませて三十圓を借ることにした、三十圓が手に這入つたので、其中一圓を態々來て呉れた番頭へ禮に呉れた、かう云ふ按排で其金で漸く晦日は過した、晦日は過されたが新年の準備がないと云ふ始末、それから經濟の調子が狂うて、不自由の事が多く、寧ろ下女任せの方がよい位である、爰に僕の疑ふ所は斯うである、現今の女子教育は、單に學理を敎へて應用を敎へない學理は必要であらう。而し其應用を知らぬ女子教育は、女子をして女子たらしめぬので、全く無效であるのみならず、却て有害である教師は時間だけ出て、本を講ずる、生徒は時間だけそれを聞き流す、それで女子教育で候と云れて濟されては、情けない次第だと思ふ、勿論僕の妻一人を以て凡てを推すのは早計ではあらうが、僕の妻の如きもの一校毎年幾人づゝ出しつゝあるものととても、大變に困ることゝなるではないか、さうなら僕はむしろ女學校全廢論を稱へる、一體女子は男子と競爭して、活動世界に働くものではない、左樣云ふ女學校があるなら、さう主義の教育家があるなら、そしてさう云ふ主義で教育せられた生徒が續いて來られては、外國は知らず、我が日本では大變のことになる、今やつて居る教育の方を擲つても女學校撲滅運動をせなければならない、どうだと膝を打つて私に論じかけまし

衣服は寧ろ退化したるが如し、實用の方面、此儘たるべからず、修飾の方面とても亦然り、現に學校にありて起居動作の實用上より筒袖袴が奬勵するが如き以て見るべし然れども服裝問題は他の風俗と同しく誠に面倒なるものなり、實用一方に偏すべからず、修飾をも併せ考へざるべからず、而して實用も修飾も既往の習慣に檢束せらるゝ所もあれば、經濟關係より概論し難き所以もなきにあらず習慣に拘泥するの不可なるは論なきも、未熟なる新理論の實行の後に於て發見せられざりし缺點を發見するもあり、殊に經濟上少からざる關係あれば、理論と實際との外、土地の實情をも斟酌せざるべからず、吾人は此等の觀察を總合して學校用の服裝は各學校に於て夫々制定するを適當なりとす(日出)

たのであります。其所で私が君の論は至極尤もだ、一面の理がある、また君が妻君に對して執り來つた方法も至極よい、しかし君が恐るゝ所は左程のものではないと思ふ、學理を矢鱈に教へ込むので其應用を說かず、爲に女子をして其職分たる家庭の整理に全く無知識ならしむると云ふ君が恐は、甚だ極端に走つたものと思ふ、特に私の世話して居る女學校に於ては、尤も女らしい女を造ると云ふ點に心を注ぎ、修身講話の時には勿論、機會のある每に、家に於ける生ける學問を忘れてはなりませんと云ひ聞して居る、と云ひますと、友人はまた、それは僕の妻の出た學校だとて、學理ばかり敎へた學校ではないだらう　應用を學ばせぬと云ふ主義でもないだらう、其所の校長も職員も女らしい女を作る覺悟でもあらう、而し其結果に現はれる所が、其と反對な僕の妻の如きものでは困るではないか、と云ひました。其時私は其友人に對して、斷然たる答案を與へたのです、其は斯うで御座います、他の學校は知らず、私の世話をして居る、高等女學校の生徒は一人も、君の所謂女らしからぬ女子は出さぬ、皆立派に家政をなし行くことが出來ることを斷言する、言ひかへると學校ばかりを學問所とはして居らぬ、家庭と云ふ生きた學問所をおろそかにさせる樣には敎育せぬ、若し一人にても其資格に不合格な卒業生を出した時は切腹をする、と此の樣に云ふてしまつたのであります、

私はこれを言質として常に敎場に臨み、生徒は良く家政整理者たる資格を供へて、學校を出したいと覺悟して居ります。



家庭と道徳

伯爵　蕉葉軒主人

子女の結婚と家長

子女の結婚に就ては其父母、特に家長たる者は大に注意を拂はねばならぬ、蓋し結婚は男女の配偶であるから、其配偶者の賢愚によつて夫妻の何れもが大に影響を受けるのである、特に婦人は内助の天職を有して居るものゆゑに、婦人の賢愚によつて其良人の價値を上下するほどの勢力が潜んで居るのであるそこで少しく家長として其女子を他に配せしむるに就て、配慮を要する點を分類して見るならば(第一)は賢良なる男子に賢良なる女子を配偶せしむれば無論良家庭を作り、世に其地位名望を高めることも出來るが(第二)若し普通一般なる男子に賢良なる女子を配偶せしむれば、其家庭も先づ、圓滿で、世に其地位名譽を羞かしめるやうな事はなからう、然し此女子が賢明の爲に其男子即ち良人に對するといふ如き場合は、家庭に衝突を起し、又往々にして地位名聲を耻がしめるやうな事もあらうが、これは例外で此の如きは決して賢良なる婦人といふ事は出來ないのである、(第三)には凡庸なる男子に賢良なる女子を配偶せしむる場合に於て、若し其婦人にして眞に賢明順良であるならば、其良人をして甚だしく地位名譽を損せしめざるばかりでなく、往々にして之を高めしむる事が出來るであらう、然しながら其婦人にて若し賢明を鼻にかけて、其良人を尻に敷くといふ如き場合には、家庭内に波瀾を生じ、又良人をして益々暗愚なる如く世に紹介せしめ、其地位を羞かしむるのみならず、往々にして醜聞をその家庭より流さしむるのである、然し之は固より賢良なる婦

人の所爲ではないのである。

かく自分の女子を賢良なる者と假定してからが、之を配偶せしむるに就て、以上の三大別を生ずるのである、若し其女子が更に普通一般であるか、或は又凡庸であるならば、尙ほ多くの類別を生ずるのであらう、されば苟くも家長として、子女を敎育するにもよく其賢愚を見定め、又之を配偶せしむるに就て其適所を得せしめることを最初より配慮せねばならぬのみならず、若し又緣あつて適所ならざる所へ配偶せしめることゝもならば、大に其女子を戒飭して其本分を適切に盡して、良人をして其地位名譽を損せしめぬやうにせしめねばならぬ、人に親たる者はかくの如く其子女の結婚に就ては、大に注意せねばならぬのであつて、かく注意して幼時より其子女の稟性才能に應じて之を適當に敎育し、長じて之を婚嫁せしむるにも相當の注意を拂ひ配慮を怠らなかつたならば、始めて、其子女を誤まらしめず、又父母たるの責任を完うするに庶からうと思はるゝのである、これは主人主婦たる者の決して輕々に看過すべきことではない。

公衆衞生と個人衞生

衞生といふは自己一人に關する事には相違ないが、自己の衞生が公衆に影響することが多いから、今日にては衞生も之を個人と公衆との二に大別せられて居る、所で或人の如きは公衆衞生の必要を認めて、流行病の傳播せぬやう、種々の點に配慮する故に自分は衞生の心得に就て申分ない樣に言つて居るが、然し日常自己の衣食住に就てアマリに儉素に失する結果、覺えず自己の身體を軟弱ならしめ、又家族をも菜色ならしめて、一族は衞生上大に不幸を訴へて居る、これでは矢張り公衆衞生を重んぜないと同一である、而して自分も國家社會の爲に働くべき一人であるのを、其儉約の爲に不心得にも軟弱身に堪へない體質となつて居るのであるゆゑ、これは個人衞生と共に公衆衞生を重んぜないものに當つて居る深く戒むべきである。

家庭に於ける新舊思想

一家の平和を保ち家庭の圓滿和樂ならんことを欲する第一の要點は、夫婦間の親愛、夫婦と小姑との親睦などにあるが、それよりも一層必要なのは嫁と舅姑若くは大舅姑(即ち其家の祖父母との關係であるこの關係がシッカリ行かない時には、一家の平和といふことは、どうも保てないのであつて、家庭に風波を生ずるといふのは、多くは此邊に胚胎して居るのである。

然れば如何なる點が衝突の原因であるかといへば、これは一概に斷言することは出來ぬけれども、先づ新舊思想の衝突といつてよからうと思ふのである、嫁が惡いか舅姑が惡いか、必ずしもどちらにとも團扇を上げることは出來ないどちらも善い點もあり、また惡い點もある、

それで此衝突を避けしめんとするには、大に注意を要することであるが、第一には嫁として舅姑に從順なるべきこと、これは古來の訓誨も多きことゆゑそれを服膺して身の鑑とするがよい、而して今日に

秋七題



《其の一》 菊の花

於て如何に舊思想の舅姑を遇したならばよいかと云ふ事を考へ、すべて一家の尊屬親に　十分に敬意を表して之に事へねばならぬといふ事を先づ心に銘記すべきである、之と同時に舅姑の方でも、時勢の變遷に鑑みて今日の嫁に對する道を考へて、餘りに頑強ならぬことである、然し嫁と舅姑の兩者のみが、かく讓歩するのみではいけない、夫たる者が兩者の間に在つて調和の勞を執らねばならぬ、即ち新舊思想の折衷を試みて、圓滿に双方を和解せしめ、以て一家の平和安寧を所期せねばならのである、齊家の事は重大問題ゆゑに、この以上細論はしない兎に角過渡時代の今日には新舊思想の調和といふことが最も大切である。

青年男女と讀書

青年男女は必ず讀書すべきである、これによつて心神の修養に資せねばならぬからである、然し近時の如き雜誌著書等の濫出する時に於ては、大に注意を要するものがある、賣行さへよくて、發行部數さへ多ければ、吾事終れりといふ商略上より、風敎を害すること抔はとんと構なく、堂々たる書肆にして羊頭を掲げて狗肉を賣るやうな傾向ある今日には、青年男女よりもその父兄の檢査よりも當局者が一層檢閲を周密にして風敎上害ある内容を有するものは、ビシ／＼之が發行を差止めるがよい、單に表面の外題にのみによつて内容の如何を顧みないなどの落度があつてはならぬ。然しかゝる惡傾向を長ぜしめたといふも畢竟は愛讀者があるからである、而してかゝる如何はしき書の愛讀者多しといふは、ツマリ家庭の監督が嚴でない證據で、其罪先づ家庭にあるといはねばなるまい、そこで吾人は一家の主人公に向て今後一層子女の讀むべき書籍雜誌の内容を吟味せられんことを希望するのである。

思ふこと今はなきかな撫子の
花咲くばかりなりぬと思へば

小兒の躾方

學習院教授 女學部長 下田歌子

子供に自立の精神を養はしむるは、幼少より其母なる人がしむけによりてしかる事多し、心すべし、西洋の小供の育てかたは、此點に於て最も心を用ふること周到なり、勿論わが東洋にも、獅の子をためすなど言へる話は即ち皆此注意を促したものならめど今は却りて、そが深意をたどり知る人少なく成りぬるぞ口惜しき、西洋の或婦人が其子を取扱ふに、深く此點に心を盡しつゝ在るさまを見たりき、先づ其を一二を云へば、

或日婦人は、小供等を伴ひて、ある公園に遊べり、年齡八つばかりなる男子の靴の紐の解けたるを結べりしに、わが同胞や、友達の先に進み行くに心とられて、結び方を急ぎけるまゝに、さらでも小供の事なれば、大人の如く上手に結ばるゝ筈も無し、大概にしては、先の群に走りつくこと兩三度、拙く結べる靴の紐は、しば〳〵解けて、地に引かれたり、母なる婦人は、之を熟視して、小供の結び了るを待ちつゝありき、遂に小供は泣きぬべき顔して、母の顔をまもり、手つだひを請ひ求むるが如くなりし時、母はしづかに教へて云ふやう『御身は、近ごろ、靴の紐を結ぶことは上手になりて、弟のをさへ能く結びて給はりしに、今日に限りて左樣に拙きは、御身の心が他に奪はるゝ故ぞ、能く心を沈めて、いつものやうに結び給へ、母はいつまでも御身を此處に待ちつゝあるべし』と云へりき、其自ら助くるの精神を啓發助長せんと勉むること斯くの如し、

又母親の小供に對する態度は、極めて鄭重に、最も親切であらねばならず斯く云はゞ、誰れもわが生の子を、不親切にする者あるべきか、又幼けなき兒を鄭重にするとは、わが生の子を、お主の子のやうにするのかとの疑ひもあらんなれども、決して左にはあらず、鄭重にせよとは、疎そかならず取扱ふべしと云ふなり、小供の幼きが故にとて、露ばかりも侮

りがましきことなあらせそ、わが子なりとて、澤山さうに輕々に附するやうなことあるべからず、小供が一言一行にも、常に能く心をとゞめて、其健康、其腦力、及び其れに伴ふ智識發達の有樣等まで、決して露ばかりも看過すべからず、小供は、正直にして無邪氣なる者なれども、存外に智惠早きものなれば、曲める癖のつきたるを知らずに置く時は、つひに惡性の人となるに至ることあり、能く注意すべきことなり、ある所に、九つと七つとの二人の小供ありけるが、この小供等何時も〳〵、母が客と對話なとしつゝ、心忙たゞしき折にのみ、物せがむを常としき、母親、始めの程は心もつかでありけるが、わが子等は、さて〳〵横着者よ、いつもせわしき時にいろ〳〵の請求すと氣つきぬ、扨また例の來客中にしか〳〵の物、何所に在り、貰ひてもよきかと云ふ母よき樣に答へ置きて、さて後に「御身等は、何故に客などありて、事繁き折にのみ、さま〳〵の請求はするぞ、まことに思ひやりなき者どもかな」と云ひたるに、二人の小供は、口を揃へて、されど阿母は、お客と夢中になりて、話しをしておいでの時に何かを請求れは、必ずアイ〳〵と云はるゝ故に、これは、物請ふには何でも、客の對話中がよしと、二人にて話しあひたるなり」と答へき、母はあきれてさて〳〵わが子は何時の間に、かゝる猾智はつきたるぞと歎じたりとは、近頃親しく聞きたることなり斯くのごとく小供は能く大人の氣を見るものなれば幼しとて、侮り輕んずることあるべからず、

幼き兒を敎へ育つるには、己れ先つ、其程の年齡の人となりおほせて、いくつ位の兒ならば、これにれの事は解るべく、何々の話は面白かるべし、斯う〳〵の事は怖ろしく感ずるものと、すべて能く、そが腦力體力の進み方をも考へざれば、忽ち其敎育が無理になりて、折角の骨折も冗になるのみならず不思議の弊をさへに釀すことあり、能く注心すべしさりながら、前述の如く、己れ先つ小供になりて、其同感同情を以てするは極めてよし、然れども、決

して、小供なりとして、侮りがましき取扱ひはなすべからず、これはやう〳〵物の心知る程になりたる小供の、不快を感ずるのみならず、未だ口能く云ふこと能はざる程の小兒にさへ、輕蔑がましき取扱ひは、甚だ不快に感ずるものなり、されば、戒しむべきことありて、小供に教訓する時、制せねばならぬことありて、それを制止する時の如きは、いか程幼少の兒に對しても、母は先づ形を正し、詞を愼みて嚴かに懇切に、其小供に解る丈の程度に於て、淳々と說き聞かしむべし、決して口穢なくなど叱るべからず、況んや母が喜怒をうつして其快き時には、さも無き事をも褒めそやし、又は憤ほらしき時には些細の事をも叱り懲らしなどすれば、小供の心かたましくねぢけて、忌はしき性を形作るに至るものなれば、母親たる人の、子供に對する注意、極めて懇篤周到なるべきなり、

四つの緒のしらべに添へし松風は
　聞きしにあらぬにやありけむ

夫婦の關係

麻布中學校長　江原素六

予は嘗てブライアン氏の演說を聞いた、其際米國公使グリスカム氏が、ブライアン氏を紹介するに當りブライアン氏の夫人が、法律家で辯護士で、ブ氏の演說は固より政治上の運動をも助けて居らるゝと賞賛した所、ブ氏は莞爾と笑うて、如何にも其の通り、予は平生細君の世話に爲つて居る、一日とて細君の世話にならぬ日は無いと云ひ、隨つて往つた先々で、細君を褒めらるゝことを非常に喜ぶと言つて喝采を博せられた、續いてそんなに人に褒めらるゝ細君を擇んだ予もえらからうと言つて大喝采を博せられた日本にも女房がわるいと六十年の饑饉と謂ふ諺があり、孔子も君子の道は端を夫婦に成すと云はれた通り、夫婦といふは、大切なる、またむつかしい問題である、

日本の風俗も動もすれば此結婚の事を首めに考へる

が、佛國には民法の上に定義を下して、結婚とは基督の教會に於て結ばれたる、生涯の幸福と苦酸とを共にする男女の撰擇したる結合なりと有ります、それで其關係は、互に相撰擇する時より始まる、それに就ては極めて嚴肅に又高尚に考へて決せねばならぬ、決して苟に考へては可けぬ、

西洋には自由結婚があるとて、西洋の事は極めて簡易放埒で有る樣に思ふ人も有るけれど、それは間違で、西洋の所謂自由結婚は、皆父母長上の助言を待つて行はるゝ、女子に於て殊に然り、總て年弱き女と男兒と交際するには、必ず父母長上の同意を要し、決して當人同志の勝手自由に任せはしない、只日本に異る點は、日本には父母と媒妁人との話さへ濟めば、當人の意向は問はないで、當人の得心するもせぬも厭應なしに厭制して押着けるのに西洋はさうはしないで、必ず當人意志の自由を保たする一點である、其理由は父母は本人よりも善く本人を知つて居る、小供の時から煦み育てたゞけに、此子は數學者に適して居るとか、工學者にしたら可からうとか法律家にしようとか、又元氣活潑だから軍人にしようとか、其性質爲人を善く知つて居る、殊に無限の愛心もて、其生長發達に注意したのだから、其鑑定には大なる間違がない、若し青年の人が自分で自由の撰擇をするとすれば、其人生無經驗なるどんな輕躁な選び方をするかも知れん、それは父母長上の監督と助言と同意とを必要とするのである、

之を始めに愼まねば、之を終りに悔ゆるも及ぶべからず、細君を撰ぶに、第一の基礎は道徳にあり、もし肉體の醜とか美とか、もしくは其他の方便、例へて言へば何の某の令孃を貰へば早く立身が出來る、例へば高等官になれるとか、會社の役員になれるとか、又は資本を得られるとか、持參金を得られるとか卑しい事を考へて、方便の婚姻をすれば生涯の痛苦である、必ず其年齡も性質も才徳も相投じた者を撰んで結婚せねばならぬ、殊に人間の一生は七轉び八起きと云うて、浮沈變化測り難い、苦しき内より、

また其他の方便より出た夫婦で有るならばそれこそ眞の累ひで、飛んだ重荷を脊負つた感じをする、此に至つて天を恨み人を咎むるも及ばない、此の場合の第一の力は妻の慰めである、普通には男子は女子を養育し得る場合に至つて、始めて結婚をする、若しも其除裕がなければ、生活の困難が幸福どころの話ではない、女は此場合は父母に任することが必要である、それから男子は妻を愛するよりも妻の摸範となることが必要である、女の權力を以て妻を服從させる事は抑も末で、高尚なる道德理性の働きを以て妻の摸範となり妻をして仰いで則らしむることが、則ち男子の德である、夫と妻との間には、只顏付と頭が違ふだけで、其の心は合して一と爲り、妻をして全く夫のもの、夫と同化せしむるには夫の德次第である、

夫婦間の義務は、第一相互共通の義務で、それは妻の外に女を持たぬ、夫の外に男を持たぬ、といふ一夫一婦の道で、第二は夫の妻を保護すること、第三は妻がよく夫に服從し、且つ其子女を善く教育することである、

この故に夫婦は互に品行を重んじ、養生を愼んで身體を健全にし、家族に迷惑をかけぬやう注意すべきである、維新前は蕩樂をする息子には妻を與へなど謂つた、妻を與ふれば、家族に對する自然の社會教育の結果で蕩樂をやめた、それが今日に於ては妻を與へて止まないで、依然無駄費ひ蕩樂をする風がある、之は家族に對する責任の教育が亡びる故であらう、

支那には女に五つの娶らざる場合がある、逆家の子は娶らず、亂家の子は娶らず、世々刑人ある家の子は娶らず、世々惡疾ある家の子は娶らず、父を失へる長子は娶らず、この父を失へるといふは、父を失つた子を放隨氣儘で規律がないから娶らないのであるが、今日に於ては母を失へる長子は娶らずと改めた方よいやうである、

ソクラテスの弟子が其細君に問うて、何故に兩親が汝を此家に嫁入らせたか、其理由を聞きたい、今日

以後此家の財産は御互ひの共通だから、取扱ひに注意して貰ひたいと曰ふたら、細君は兩親の意向は知らないが、只貴下に依り賴み、精出して内を治めろと父も母も申しました、其外に妾の一つの願ひは、此家にある古き財産に新らしき財産を加へたいことであると答へた、續いて夫がお前の氣に入らない事を云うて置くが、内の下女がもし病氣にかゝつた場合は、花嫁さんが其藥の世話もし、臺所の世話もしなければならぬと申したら、それは意外な仰せをうけたまはるものかな、其女を介抱して善く癒して與へたら、其女が此家の御恩を感じて、いよ〳〵忠實に勤むるでしよう、それは私の苦とする所でないと答へた、夫がもし强情我慢手に合はぬ女が來たらばと申したら、出來る限り敎へ導いて其女により此家の德を建つる樣に骨を折るつもりと答へた、夫は殆んど感服して最後に御互に年老いて共に白髮の生へた時、お前の勢力が全家内に及ぶやうになつたら、我家の幸である、さすれば自分もお前の智惠と德とに甘んじて支配を受けるし、お前は死ぬる迄の美人として其威嚴を保つことが出來ると言つたそうな、なんと夫婦の手本ではあるまいか、何うか知識ばかりでもいけない、智惠に照らされし愛情もて、此等の婦人を撰ぶるやうに心がけられたい、又選ばれるやうな婦人になつて貰いたい、

魚の料理

子ツチー、メヒー孃

妾の母も親しい友達六人へ向けて、今日は魚の料理をするからとて、招待狀を出した、献立表を書き終つた後で、食堂の飾付は下の樣にした、

食卓の上には眞白なリンチルに海藻を散らした卓布を掛けて、其中程に金魚の鉢を置いたが、配合が頗る美術的で面白ろい、而して室内の壁は、魚網以て一面に蔽ひ之に釣竿、餌ふご、浮標なんどを吊しかけた、次に席次札は種々な魚の形にして、各自に違つて居る、而して別に一枚宛の枝折を配つて、其表には一句宛魚に付ての謎が書いて有る、此枝折を持つて各自席次札に着くと、其カードの裏には謎の答が書いて有るが、其答が果して自分の枝折に丁度合つて居るかどうか分らぬ、そこで答が誰のカードに有るか、右と交換し左と取交はし、それは〳〵非常な賑はひで、食事を終る迄無邪氣な話の絶える間なしであつた、



體質の人種的相異と知識との關係

理學博士　坪井正五郎

此度は體質の人種的相異と知識の關係の事を述べ様と思ひますが、最初に頭の毛のことを申します、日本人が考へると、頭の毛と云ふものは總て黒く、さうして眞つ直ぐなものである、中には縮れたのもありますけれども、先づさう云ふやうに思ふのであります、併しながら世界諸地方を見ると決してさうばかりでなく、色々ある、日本人の如きは眞つ直ぐな方である、其切口を肉眼では能く見えませぬけれども顯微鏡で見ると眞圓である、世界中の樣々の人の中で、行儀の善い眞圓の毛を持つて居るのは、日本人とか西藏人抔であります、頭の毛の切口を顯微鏡で見るのには、蠟の類を溶かして蠟ごと切つて見ると丁度お菓子の金玉糖の中に、餡を入れたのがあるがアレと同じやうなものにして、之を切つて硝子に載せて、顯微鏡で見ると分る、外の物に譬へて見れば蠟燭を切つて中の心を見ると同じことであります、其顯微鏡で見た所を言ひますと、日本人の毛は實に行儀善く眞圓である、隣國の支那朝鮮邊りの人の毛も矢張り眞つ直ぐの方に屬する、所が歐羅巴諸國に行つて見ると、毛の眞つ直ぐな人は無い、日本に來て居る人の毛を見ても分るが、皆何れもうねつて居る、日本人のやうな眞つ直ぐの毛のことを直毛と言ひ、歐羅巴人のやうに波を打つたやうな毛のことを波狀毛と云ふ、波狀毛を今申した樣に蠟に詰めて切つて見ると、其小口と云ふものは楕圓形になつて居る、又亞非利加の方に行つて見ると、頭の毛が無茶苦茶に縮れて居る、縮れて居つて隣りの毛と搦り合

つて居る、之を切つて見ますと、丁度そらまめのやうな形をして居る、斯樣な毛を縮毛或は捲毛と言ひます、是れも前篇に申した脊の高さの話と同じやうに、離れ離れの事實を見ると、日本人の毛は眞ッ直ぐである、黑奴の毛は縮れて居ると云ふのでありますけれども、世界中の人間の毛を見渡すと、境は無くなッて仕舞ふ、何處の者はどう云ふ毛であると云ふことは言へますけれども、毛を一本拔いて斯う云ふ毛であるならば、何處の人種と云ふことを言ふことが出來ない、重に亞細亞の大部分に住んで居る者の毛は眞ッ直ぐなのが多い、歐羅巴の大部分に住んで居る者の毛は波打つたのが多い、亞非利加の南に住んで居る人間の毛は縮れたのが多い、そこで亞米利加の土人はどうかと云ふと、是は二た通りある、或る者は眞ッ直ぐな毛であるし、或者は波打ッた毛である、同じ地方に居る者、又同じ兩親の間に出來た子供であつても、或る人の毛は眞ッ直ぐであるし或る人のはうねッて居ると云ふ有樣である、亞米利加土人の毛は、或はうねり或は眞ッ直ぐと云ふ此二つある、

それから毛の色に就て言つて見ますると、日本人のは黑いけれども、歐羅巴人のは褒めて言へば金色と云ふのですが、惡口を言へばたうもろこしとか棕梠箒とか云ふのでありますが、茶色に光つて居る、それから亞非利加の黑奴の毛は、鼠色或はもう少し濃い色をして居る、歐羅巴人の中には、啻に茶色であると言ふ計りでなく、茶色の中で色の濃いのと薄いのと、赤味を帶びたのと黃色を帶びたのとある、兄弟の中でも幾らも違ッた毛の色がある、

次に身體の毛のことに就て言ッて見ますると、多くの人の考へでは人間の身體には毛の少いものである獸と較べて直ぐ分るのは、一方は毛ものとさへ言ッて毛が多い、人間の方は毛が少い、斯う云ふやうに思ふけれども、是は併し日本人抔が自分の身體を見て考へる話であつて、世界諸地方を見るとさうでは無い、吾々と雖も、遠方から見れば毛は無いやうだ

けれども、手杯には薄い毛が澤山生えて居る、若し毛が無いのならば、顔を剃る必要もないけれども、剃らずに置くと毛が長くなる、地方によると、それが著しく見える處がある、北海道のアイヌの如きは、是は世界に名高い毛の多いのでありまして、或る者になると、頭から脊中の方迄ズッと續いて毛の生えて居る者もある、私が北海道を旅行して、段々見た中に面白いのがありました、アイヌの毛は、鈎狀毛と云ふので、先か鈎の樣に曲ッて居る、歐羅巴人のはうねつて居るけれども、アイヌのはうねつて居る上に反返へるやうになツて居る、私の面白い例と申すのは、頭の毛が肩の所迄繋がつて生えて居た事です、肩から下は少いけれども、內地人よりは餘程多い、他の者は是れ程ではありませぬけれども、太甚しきに至ッては斯う云ふ者もある、日本の內地人の中では、隨分脛に毛のある人も見えるやうですけれども、アイヌはもッと酷ひ、もう一つは印度の地方に、トーダと云ふ種族が居りますが、是も亦毛の多い所のものである、それであるからして、頭の毛の性質が樣々ある許りでなく、身體の毛と云ふものも人種々々に依て違ふのであります、

秋七題



紅葉（其二）

次に皮膚の色でありますが、日本人の色が黄いと云ひますと、何か惡口を言つたやうに思ひ、決してさうでは無いと言ひ張る人がある、日本の學者の中にも、日本人は黄色いのでは無い、白いと云ふことを言つて居る人がありますけれども、それは日本に許り居つて始終見て居ると分らない、けれども各々が歐羅巴人を見て何と思ふか、自分の色と同じとは思はない、歐羅巴人は白いと思ふ、其白いと云ふのは詰り自分等は餘り白くないから、それで白いと思ふ歐羅巴人を見て白いと言ふならば、自分は歐羅巴人ほど白くない、私の實驗談と云ふのも餘りやかまし過ぎますけれども、先つ實驗談の一つですが、自分でも餘り白くないと思つたのは、歐羅巴に居つて散髮屋に行つた所が、姿見があつて、それで自分の顏が映つた、さうして其處に映つて居る散髮屋の職人の顏と對照して、自分の色が如何に黄いかゝ分つた黄色いのは惡いと思ひませぬけれども、幅が利かないやうに思うた、往來で向ふから黄色い人が來ると思ふと同國人である、日本に居つては氣付かない、けれども歐羅巴に行つて見ると分る、日本人全體ノ皮膚の色を考へて見たならば、どうして黄色味を帶びて居ると言はなければならぬ、固より黄色と言つても、鷄卵の黄色いのや、或は山吹の花の黄色いのと同じと云ふのではありませぬ、白いのもさうです雪のやうに白くも無いけれども、割合に白いから白いと言つて置いてやる、何も黄色いのが惡いと云ふのでは無い、黄色くても宜い、日本人が種々の點に於て發達して來さへすれば、遂には歐羅巴人は黄色い方を羨むやうになつて來るかも知れぬ、何せ黄色く生まれなかつたかと嘆息する者が出來て來るかも知れぬ、黄色いのを善くするのは、銘々の腕次第である、日本人は黄色く無いと言つて威張る人は、白い方が宜いと思つて居るからである、けれども白の方が宜いと云ふ理由は少しもない、世界諸地方を見るに白と黄色とばかりでなく、茶色の者もあるし、栗色の者もある、又鳶色の者、海老茶色の者、種々

なのがある、或る地方に行くと、本統の黒がある、日本ではチョッと海水浴抔に行つて、日に燒けると黒くなつたと言ふけれども、あれは黒くなるとは云ふものゝ、茶色になつたのである、廣く世界諸地方を見ると、本統に黒い人が居る、日本ではまだ餘り見ませぬけれども、歐羅巴では亞非利加の黒奴が三味線見たいなものを彈いて、物貰ひに來る、それらの顏を見ると、實に氣味の惡い程黒い、船に乘つて見ると熱さの苦みに堪へると云ふので、火を焚く者や何かに黒奴を使つて居りますが、其黒奴は唇が眞つ赤で、齒が皎くて、目がぎよろ〳〵して居るので實に氣味が惡い、一方は白い、一方は黒いと言ふ極端のはあるけれども、世界諸地方の人種を見渡すと中間の色も澤山あるのであるから、是も矢張り脊の高さや頭の毛と同じやうに、何處を境ともなく連續して仕舞ふのであります、それで何處の人種にはどう云ふ色の者が多いと云ふとは慥かに言ふことは出來る、それから何れの人種に於ても男子と女子と較べれば、女子の方が色が薄い、それから歐羅巴人と日本人と直ちに較べて見ると、實際に於て日本人の方が色が着いて居るやうに思はれる、と云ふ譯は、歐羅巴から日本に來る人は、多くは多少位置のある人である、中等以上の生活をして居る者が多い、日本で見て居るのは勞働者百姓も引きくるめである、此樣な比較では公平な判斷は出來ない、歐羅巴に行つて見ると矢張り身分の宜い人は皮膚白く身分の卑い者は幾分か色が着て居る、男女を引つ括めて、歐羅巴人は白いと云ふことは爭ふべからざることであるが、併し歐羅巴に於て最も色の白い者は、最も開けて居るかと云ふと決してさうで無い、一番白いのは歐羅巴の北の方の諾威瑞典丁抹あたりの者である其處の人間が一番白い、獨逸佛蘭西英吉利等の人間はそれに較べて見ると、稍赤味を帶びて居る、之を以て見ても歐羅巴の中でも一番白いのが一番宜いと云ふ譯は無い、見た所では奇麗でありますけれども白いと言つて安心する事は出來ぬ、色の白い人が勉

強して値打のある者になれば結構であるけれども、白色の者は天然自然に優等人種であると言つて威張つて居ると云ふ譯もない、又色の黒い人も天然自然に劣等であるから、齷齪しても仕方が無いと言ふてブラ／＼して居る可きではない、色の違ふのは、知識には何の關係もない、總て體格上人種的相違と云ふものは必しも開化や智識に關係するものでは無いのであります。

豫備病院の半日

中川愛氷

ことし九月五日、收容患者の狀况を見るべく、東京豫備病院澁谷分院を訪問した、

この日は收容患者を慰むべく、日本癈兵慰問會より演藝を寄附したので、同會の一員たることを兼ねて出張したのである、

先づ刺を通じて院長保利博士に面會を求めた、直に院長室に導かれ、談忽ち院内に收容せる癈兵の事に及んだ、

院長は卓上の寫眞を示され、この通り兩手はもがれ兩眼は盲い、兩足は形はあれども砲傷にて物の役に立たず、實に大悲慘の狀態で、斯の如きものが、過般の戰爭によつて、全國に幾百千人を算するかも知れぬ、と云ひながら、更にまた一葉の寫眞を取出しこれはこの癈兵の爲に、乃木大將の考案せられたもので、我々の考へねばならぬことに先鞭を着けられたのである、それは義手とも云ふべきもので、不充分ながら煙草位は吸へる裝置になつて居る、それから乃木大將談に移つたが、同大將は朝夕この病院に患者を見舞はれ、旅行より歸京の場合には、自邸より先づ同院に立寄り、土產の物品はこゝにて披露するが例になつて居る、であるから大將よりの寄贈品は少くない、とて大將の德を稱へられ、二十分ばかり對話のうちに、午後一時、例の寄附演藝が始まるので、娛樂堂に行つた、

娯樂堂は岩崎氏より寄附せられたるもので、建築技師は安岡工學士であるとの事なるが、われ等素人の目にも申分のなき建築の如く思はる、演壇の上には乃木大將の『上藥娯神』と題せる扁額が掛つて居るが其雅健なる筆致、故副島伯の文字に酷似して居る、これに對して、山縣侯の筆で『和氣回春』といふ扁額が掛つて、この娯樂堂を潤飾して居る、

頓て演藝は始まる、藝は文樂座竹本七五三太夫以下七人が、山根正次氏の癈兵悲慘談を聴き、藝人の眼にも涙、それ等の人々を自分等の藝に依つて慰めたしと同氏にまで願出でたので、同氏はその篤志を感じ更に連署を以て同院に願出で、この日の催となつたのであるから、其藝の妙も、銅臭を離れて、一層聴客の耳を樂ましめたやうである、

而して其間は美音妙曲、山縣侯の扁額に題する如く和氣回春ともいふべきであるが見渡せば手のなき人足のなき人、目の見えぬ人、腮の落ちた人、身體の利かぬ人、いづれも健全なるはないのであるが、我身の不自由をも知らぬ顔に、喜びあへるを見ては一しほ袖を絞らせるのである、

かゝる狀態にある人を、もし路傍に於て見るも、一顧せでは過ぎ難ぬるが人情である、ましてこれ等の人々は、忠勇拔群、國家の犧牲となられたのであるから、この人々に對して大に同情を寄せねばならぬ然るに戰時中は引きも切らぬ慰問者のあつたにも拘らず、戰後の今日には、この病院に慰問する人が、僅々指を屈するほどである、と聞くに至つては、驚くの外はないのである、

演藝後菊池一等軍醫に案内せられて、各病室を巡見した、醫師の手を經べきものは經、手術の施すべきは施し盡したれば、豫想せし如き悲慘の光景は呈せねど、一見何等故障のなき如き顔も、説明せられて落ちたる腮を縫ひ合せたる中は、ニッケルに骨の折れたるを繼ぎ、その上にゴムの齒齦を取附けたるなど、いづれも一通りならぬ手術を受けたる患者のみなるを知り、その當時の如何ばかり悲慘なりしかを

想像せられるのである、同時に保利院長の如何ばかり今日あるに苦心せられたかを知るべく、其の溫和に、而も快活なる相貌によつて、如何に患者が慰撫せられつゝあるかを知るに足るのである。

されど蟹の甲を見る如く、兩足を胴の部分より絕はれたる人も、手術を經て、一定の期間を經れば、その家族に引渡さるゝので、家族の生計豐かなるはまだしも、貧困者に至つては、實に目も當てられぬのである、そこでこれ等廢兵の餘生を、出來得る限り樂しく送らしむべきは、われ等國民の義務である、山根正次氏は玆に見る所があつて、先年政府に廢兵院設立に就て建議し、遂にことし九月一日廢兵院の設立を見るに至り、川崎陸軍中佐が、その院長に任命せらるゝ事になり、山根氏はかねて橋本忠次郎、林田龜太郎等の同志と、日本廢兵慰問會を起し、廢兵の爲に盡さるゝことになつた、

川崎廢兵院長が記者に向つて語られたるは、私は親子にて戰場に向ひたるが、常に心は我子の上に馳せて、いかなる働きをなせるか、もしも卑怯な振舞はあるまいか、今の砲聲に葬られたであらうか、抔と思浮んだのであるが、それにつけても、わが號令の下に進軍して、死傷したる士卒を見たる時は、實に胸も塞がるばかりで、今わが身の無事なるを思はゞ今回の辭令を幸に、身を獻げて、一生を廢兵の慰藉に送りたいものである、とのことであつたが實に有難い心掛で、今後續々廢兵院に收容さるゝ人々は、せめてもの幸福である、尙當日廢兵院幹事又森少尉同事務員我鍋少佐にも面會したが、又森少尉は八ケ所の大傷を負ひ、我鍋少佐は片足を敵彈に奪はれたのである、されば廢兵に對しての心入も一しほであらうと思ふ、

記者はこの日、保利澁谷分院長、山根日本廢兵慰問會長、川崎廢兵院長と席を同うし、廢兵を目擊して、廢兵の不幸に同情を寄すると同時に、以上の人々によつて慰藉さるゝ幸福をも思合すのである、同情の心に富める讀者諸孃よ、願くはこの廢兵の爲に一掬の淚を濺がれん事を、

五二共進會の大原女風俗

村田菊次郎氏談

五二共進會の京都三獎會賣店に、京都名物の大原女を使つて、吳服物を販賣せしめます事は、先達ての總會で議決しましたことで、東京は宮城の在る處丈けに、古典に通じた人も多いから、面白からうと謂ふ樣な、極く單純な考へから、大原女中大原女たる八瀨村から撰拔して、五名伴れて參つて、其に正式の衣服を着けさせて出ました所、意外の好評で、總久會長の如きは皆に盃を下すつた樣な次第で、誠に私共も滿足して居る次第で御座ます、單に京都の大原女と申しました所で、八瀨、梅ケ畑、高尾、白河等村々に依て、自ら風俗も異りまするので、此度五二會に出しましたのは、大原女中の本場とも謂はれる八瀨の風を採りましたので皆八瀨村の相當の家の者許りで御座います、八瀨に參りますれば、幾何も雇ふ女は御座いますが、東京へ伴れて參つて東京の方に物を賣りますに「おん前買うとくれ吳服入らんかへ」などゝ方言を振り回されては、東京の方々に愛憎を盡されますので、前に申した樣な相當な家の女を無理に連れて參りましたので、其すら二ケ月も前から物の言ひ樣を敎へたので御座います、御存じかも知りませんが、大原女の起原は壬申の亂に、文武帝が大友の爲に追はれ給ひ、山城に逃れましました時、征箭を負ひ給ひて、今の八瀨に御留りになりました事が御座いましたが、當時隨行の官女等が、此里の女が頭上に物を載せて運ぶ姿を見まして、其に倣つて同じ風を裝ひ都を落ちましたが、官女の事で御座いますから、脚絆の着け樣さへ知らぬと謂ふ樣な有樣で、前後を間違へて着けましたのが、今日も其儘殘つて大原女は、凡て脚絆を前後反對に着けて居ります、八瀨と申しまするのは、矢脊の轉化したので。是亦文武帝が矢を負ひ給ひたる所より出たので御座います

今回五二共進會に出しました八瀨の大原女の風俗は、祭禮其他の公なる時の風で、今日京都邊に物を賣りに出まする平常の風俗とは少しく異つて居りまするが、充分研究の上で御座いますから、先づ古典に相違しては居ない積りです、先づ頭に頂きまする紺の手拭は、丈二尺一寸に百人首を縫ひ取り、襷は友禪の片地無、着物は突丈の袖丈二寸五分、縞飛白の襟を此に縫して、手甲は染紺、帶は九尺の木綿幅四つ折、下帶は友禪の三寸幅二つ折、白湯卷に白脚絆、髮は島田の一種で物を戴せるに都合好く結ばれて居ります、先づ私共の心盡しが東京の人に知られて吳れば、甚だ喜ばしい事と思ひます、

樺太の料理（上）

福原雨六

△航海中に盡きる惣菜　今でこそ舊名の樺太と呼ぶに至つたが、日露戰爭の開始されぬ前年迄は、御承知の通り露西亞の領分、即ち露領サガレン島と云つて、年々日本から出稼ぎに行く漁師は、少なからざる税金を納めて、而して春は鰊、夏は鱒と鮭の漁業に出かけたものである。

春の鰊漁時分は、まだ四月の寒い……時によると、雪が降つて來る、無論海には氷塊が漂流つて居る頃ですから危險云ふばかりもなく、自分は、ツイ其の鰊漁を見ませんけれども、夏の鰊と鮭時分には、恰度叔父が東海岸に漁場の借區があつて、數十年來年々出かけるを幸ひ、行つて見るのが面白く、三四年出かけました、ソレで、得た料理の學問ではないが知らず〳〵の間に研究した材料を云つて見ると、中々面白い。

夏の漁場は、五月の末、六月の上旬に函館と云ふ所を出て、六月の末、もしくは七月の上旬に目的の漁場へ着くのです、たゞ斯う云ふと、一と月以上の航海で殆ど太平洋を行く洋行式で、餘り航海の日數が長すぎる樣ですが、實は火輪船で走るのでなく、漁師は各自の持舟、雇ひ入れた帆走船でノタ〳〵と行く爲、自然此の長い日數になりますが、船員を始め、漁場へ出稼ぎに行く人夫、又我々もその長い日數を承知で、充分に航海中の食物、所謂飯の惣菜を準備して行くが、何ぼ帆走船でも順風と云ふ追手ならば格別、さもないと、十日のものが二十日、廿日のものが卅日と、朝に乘り越した向の山も、夕方に風が止んで、潮流が惡いと、船はグン〳〵逆戻りをして、夫で準備の惣菜も、甚だしきは煙草もなくつて、大弱りをする事があるのです。

△船を走らして魚を釣る、尤も、函館を出て小樽と云ふ港に寄せる場合もあり、遲くも十日か十二三日で、例の日本軍が去年の七月第一に占領したコルサ

コフと云ふ、日本の領事館も設けられてあつた、差詰漁師のこゝに立寄り、漁業の税金を納めて免状を得べき關門……即ち要港で、一日二日の滯在をせねばならず、序に飲料水も汲み取る爲、交々上陸をして食物の準備、煙草の補ひをするが、二三の日本商店あるの外、他は露人の商店ばかりで、從つて安いとのはなし、我々の口に適したものはない、先づ案外安いもので在るものは、鷄に玉子、鹽漬の牛肉位で、鷄は一羽四五十錢内外で買はれ、牛肉の鹽漬は二十錢出さずに一斤買へるのでございます

僅か一週間か十日の航海で、ソンナに弱る理由もないが、一同始めての海の上、シカも帆走船のノタノタと來て居るからたまらない、漸くこゝで陸上を踏み、露西亞人の鬻ぐモロコ『牛乳』チヤーイ『茶』パンなどで舌を打ち、サア明日は又錨を拔いて、更に十數日の航海をせねばならぬとの準備で、各自申合せて鷄に玉子、牛肉の鹽漬などを買つて船に乘るが、陸に居ると違ひ、船へ乘れば長い日一日、別にする用事もなし、船がゆれゝばゆれる程、中に腹が減ると云ふ者があつて、普通の三食が四食となり、更に間食が始まる、ソコデ、折角數日の準備と買つた鷄も玉子も、肉も二日か三日で空してしまへば、いくら四食でも、船内規定の味噌汁に澤庵漬、たま〳〵鮭の鹽漬があつても、他に何も異つた御馳走がないから、腹は減つても喰ふ物がなくなる、さうかと云つて、喰はずには居られぬが、コンナ苦しい事はないのでございます。

我々の樣な新參者、殊に漁業について餘り經驗のないものはイザ知らず、年々此の航海と漁業に精通ものは『どうだ、今日は風も澤山なし、船のゆた〳〵するのを幸ひ、釣りの糸を下げて見やう』と云つて外に致方はないから、時節離れだけれど、ひもじい時にまづいものなしと、鱈釣りをする、スルト、帆走船は概ね沖を行くので、海は淺くない、鱈釣の糸を五十尋、或は百尋、隨分長いものを繰り出すのだが、針の或邊迄行つたかと思ふと、直ぐにかゝる、

寧ろ糸を繰り出すのと、繰り上げるに時間を費やすのであるが、之れは非常に面白い、又日和の工合を見て、いゝ海岸に錨を一挺打ち込み、飲料水を汲み取り旁々何か食ふべき野菜をと探りに出る、もし此海岸が浅く、岩石の障りがないと見れば、小船で手繰り網をやる、一度手繰れば四斗樽に一二本の雑魚を得られるのだから、皆は嬉しがる。

鱈をうしほ煮にする、味噌汁にする、中に刺身をやらして、出刃、ナイフ、不整頓な俎板の上で料理をするが、鱈の刺身は水が出てよろしくない、ケレド不自由さがまづいと云はせぬ、雑魚は焼きもの、味噌汁のゴッタ煮、鰈のヌタ、刺身、俄かに卓の上は山の如き珍味で、それを唯だ喰ふのは勿體ないと、豫て船内に積込んである酒を出して、雨でも降れば止むを得ぬが、無論陸に行く時と、網を下ろさうと云ふ時だから上々日和、甲板に賑やかな寄合開始、なんぼ三圓の會費を出しても、普通の料理屋では、斯う云ふうまいものは喰べられぬと、ホク／＼喜ぶ所には、不自由と、自分等が勞働をしたのと、自ら料理し、二十名でも乃至三十名でも、寄合ふものが家庭的に卓を圍む爲でありませう。

▽米の飯を餘ます　航海中の異つたお話しはいらくもございますが、さうすると、長くなるばかりか、貴重な紙面のお邪魔をしてもすみませんから、我々が目的地の漁場へ行つて、約そ一と月半、長くて二月に滿たぬ滯在中、ドンナ所に雨露をしのぎ、ドンナ事に日を送り、ドンナ食べ物を主にするかをお知らせいたさう。

六月の末、若くは七月の上旬に漁場へ着きますが、之れが内地だと暑さの取つき、白地の單衣に麥藁帽子、歩いては溜らず、さうかと云つて、電車の中でむされるのも随分酷い、夫れで往來は氷店の繁昌、目につくのも他人の家の青簾、色どりのよい團扇などであるが、サア飛離れた樺太と云ふと、我々の行く東海岸……ソノ奥地に入る程寒く、時にはまた氷塊が海の上に漂つて居たり、氷塊の爲に仆れ

た鯨の死體が流されて居る事もある、で、各自の扮裝はと云へば綿入の重ね着にシャツと股引、襟卷をして、それでも寒い、無論洋服も冬ものに毛皮の外套、それて少しも暑いとは感せぬ、漸く陸地に着いて、今年はどうかと堀のこしの井戸を覗いて見るに凍りつめて居る事がある、地を堀れば、一尺位の下は氷の盤で、地蟲一匹見えぬ仕末だから、寒暖のお話などは出來ぬと云つてよろしい、此の異卿として面白いのは、都では、多く聽くを得られぬ、彼の郭公をきくことで、之を季節ある俳句に詠むと、餘程變な調子て、お芋の煮えたも御存じないと云ふ宗匠、當今の大家先生には分らぬのであります。

氷塊のながれ來る夜やほとゝぎす

と、斯う云つた風で、もし之れを油繪にでもすれは隨分珍らしい、シカも雄大なものが出來ます

ほとゝきす自由自在にきく里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里

と云ふ狂歌はあるが、樺太は夫れ以上で、二里行かうか、乃至三里行うか、酒屋も豆腐屋も求め得られぬ、ソコデ、我々の身を容れる個所は丸木柱の堀立て小屋、茅葺屋根、床もない所に莚を敷き、莚をのべ、大きな居爐裡に焚火をしながら暖をとるのである、玉垂の云々と云へば雲の上人であるが、二ケ月ばかりの假住居は、堀立小屋の菰垂に雨の日は物憂く、ほとゝぎすをきいて、唯だ有明の殘れる月を仰ぐ菰の上人であれば、其年によつて漁でもなく今年はいゝ利益の配當がないと思ふと、つく〲嫌になる、同し人間でも何一つ不自由のない都會に居る者と、樺太の樣な所へ來るものと、斯うも相違があるものかと泣きたい事もあるが、併し、朝から晩まで活きた魚が山のやうにとれて、段々に口馴れて來れは格別、行つた當座は皆な珍らしいので、日に三度魚の方を多く喰ふ爲めに、自然賄が、一人前、何合とつもりの米の食を喰いあますのである。

◎次號には支那女子の風俗を實踐女學校坂寄教授の談によつて本欄に掲載すべし、

炭屋の女主人

小石川の奥林町に濁れる今の世には珍らしき賢夫人あり、同町四十一番地に『炭商林屋』と記せし軒燈の店頭ならで、玄關構への門前に掲げられたるは、是ぞ往來の人の眼を惹く不思議の商家にて、先づ門內に入れば、草生ひ茂りて、其處に一輛の荷車あり、左側なる納屋に、五六俵の炭の用意しあるを見るべし、此一風變りたる商店の主人は、茨城縣鹿島郡中島村字筒井宮崎三郎氏(三十六)なれど、是れは商賣には少しもたづさはらず、現に中央大學に事務員を奉職して、家に在る事稀に、其實同氏の夫人芳子(二八)の經營に成るものなり、芳子は磯部正太郎といふ人の娘にて、元神田の生れなるが、八年前臺灣高等法院就職中、此の世を去れる實兄榮三郎氏の慈愛の下に、新潟にて小學教育を受け、十七歳の折父の知人が創立せる同地の産婆學校に入學し、翌年秋卒業するや、直ちに同市に開業せしも、僅かに二年にして杖柱とも賴む實兄に先立たれ老いたる父を親戚に托し置きて、上京したるは二十一歳の秋、三十三年の事なりき、當時は牛込神樂阪上に止宿し、牛込教會に臨して、期日の祈禱怠りなかりしが、之れぞ當時東京法學院學生なりし今の夫三郎氏と神の結びの緣初めして、卅四年秋同教會の牧師高木信吉氏(目下青森にあり)の媒介により、芽出度く結婚したる後は、故鄉の父を呼び寄せ、今の住居の裏の方に住ひ、夫は同年同校を卒業して同校事務員に就職したれ共、何分薄給とて一家の口を糊するに足らず、長女道子(五つ)長男有一氏(四つ)と云ふ二人の子供の養育さへ覺束なき其上に、志固き夫は、去卅四年以來數回の失敗にも屈せず、公務の餘暇を盜みて高等文官試驗、判檢事試驗との受驗準備にいそしみ居れば、何とかして後顧の患なからしめんものと、再び父を親戚に托して、現住の場所に內職の炭屋を始め、纖弱き女の身一つに、子供の養育、夫の介抱、商品の賣捌運搬迄も引受けて、少しも人手を煩さず、微なる稼高の中より、生計の資を捧ぐるさへあるに、夫も先月中腦病の枕重かりし折の如きは、平常にもいや增して骨身を碎き、姉樣冠りの手拭色古りたるを恥しとも思はずこそ、挽出す荷車の重きも苦にせで、手足に炭粉に塗て、眞黑くなるをも厭はず、家業に勵み、藥餌を供せし程に、さしもの夫の重患も頓に本復したりしとか、過日某記者の訪れたる折は、謙讓して多くを語らず、已は洗晒しの紺飛白に、唐縮緬友禪の帶も炭塗れなる儘なりしが、いとし兒道子と有一氏には、衣裝に塵一つも止めず、先づ令孃に向つて『貴女學校へ行きますか』と問へば、紅葉の如き片手の上に、片手の二本を並べて『斯うなれば行きます』と答へ『お父さんは何處へ行つしやいます』と問へば、『學校』と答へぬ、次に有一氏に向ひて『今おいくつ』といへば覺束なげに四本の指を捧げたる悧發さ、芳子が再三の乞ひに任せて、寫眞を探しに座を立てる間も二人對座に畏りて、更に母を追ふ樣もなかりしと、彼れと言ひ是れといひ行末賴母しき良家庭と謂ふべし、

文藝

折にふれて

佐々木信綱

大寺のいらか高くも見ゆるかな
　里をつゝめる朝ぎりの上に
奥ふかき青葉がくれに聞ゆなり
　乳人よびます姫ぎみのこゑ
かくながら土の底にやくちはてむ
　とてもかくても幸うすき身の
しめ〲と小雨ふる日を弔ひの
　またゆきかひし谷中道かな
くれなゐの光も消えてほのぐらき
　闇にぞしづむ夕ぐれのくも
秋ふけて朝しも寒き花ぞのに
　老し胡蝶の羽たゆげなり
胸をさくなさけの斧よおなじくは
　身をも霊をも断てよとぞ思ふ
君にとてこゝろづくしの旅の土産
　あまりにはかな奥都城の君
笑のうちに刃もわらん笑のうちに
　なみだもわらんともに笑める人

月夜の琴

小川直子

水の面にてる月なみを數ふれば、今宵はそのかみ仲國が小督局を尋ねむとて、嵯峨野の奥に分け入りし夜なりけり、されば只にやまむも口をしくて、常にまゐりなれたる某の君がりまうでけるに、君は折ふし箏の御琴かきならし居給へりければ、女房して消息聞えさすれば、いと喜び給ひて、とくこなたへと

仰らるゝに、やそらのぼりぬ、あはれ此君ははやう殿におくれさせ給ひて、よるべすくなき御身なれば萬いと心細げに住なし給へり、御庭のありさまなど見まゐらするに、ひんがし山の高ねより、さし上る月かげ、まがきになびく尾花が袖の露にやどりて、いみじうあはれなるに、かき根はむぐらさへ生ひのぼりて、虫どもの聲しげく、とりあつめたるあはれさいひしらず、彼古後徳大寺の左大將がとひ奉らせ給ひけむ、二代の后の御有樣も、かしこけれど、かくやと思ひやられぬ、かくて君は此程のつれ〳〵なりし御物がたりなど、こまやかにし給ひて、今宵は夜もすがら月に向ひて語り明かさんとて、御琴かき寄せて、折にあひたる虫の音といふ曲をかきならし給ひけるが、更行く月のかげと共にすみ渡る爪音、はた御聲さへくもりなうなまめかしうて、高うさやかなるは、尾上を通ふ松風もしらべをあはせ、らう〳〵しうこめきてかすかなるは、枯野にすたく虫の音もはづかしげなり、あはれ身にしみて、來しかた戀しう、はた行末の頼みがたき世の習ひまで思ひ殘さず、心しる人に聞かせてしかな、とおぼゆるまゝに

山松のあらしにたぐふ琴の音を
　　また我ならぬ人にきかせむ

など口すさみたり、いでや彼唐土の白樂天は江上の月を翫びける時きゝたりけん、琵琶の調べの、いと妙にして、糸すぢの如く、絶え〳〵なるかときけばまたむら雨のうち過るに似て、耳を驚かしたる聲の訴ふるが如く泣くが如く、喩ふるにものなしとて、聞く人袂をうるほしけりとかやいひ傳ふるは、さもあらばあれ、こよひの御しらべこそ、似るものなう懷しう覺えたりしか、あはれ其樣を語らむと思へど眞似ぶべくもあらず、書もしるして傳へまほしけれど、筆にも及ばねば、いかゞはせむ、只心にとゞめて、後の思ひ出にせむとて。

秋夕

馬あらふ小川の水に月かげの
さしもさびしき秋の夕ぐれ

月の影

中山幸子

秋月

賤が家の軒端をぐらき燈し火に
　ひかりそへたる秋の夜の月

秋の夜の月のひかりのさやけさに
　こゝろもすみて見えにけるかな

月前露

むさし野の月のしら玉いよ清く
　見ゆるは月のひかりなるならん

もすそぬらす露に心のつかずして
　さえたる月にうかれけるかな

月前虫

秋のよの月を見んとておりたてば
　さやかにきこゆ虫のこゑ〴〵

わが宿のち草にすだくむしの音も
　ともにさやけき秋のよの月

うかれくる限なき野邊の月かげに
　むしの音たかくきこえける哉

ひたち日記

橘純子

ことしの夏のいとま、ゆくりもなう、ひとりあづま路へぞ旅だちける、女子のひとり旅せんこと、わが家の法ならねど、こたびのこと、また有るべくもあらねばとて、門出の前、せうとの君のみゆるしあり此の旨ふみもて、鈴木白雲の君に聞えたまふ、その夫妻の君のせちに招かせ給へばなり、あはれ世に、親はらからを捨きては、心しれる友の交ひばかり、情ふかく、變らぬものはあらずなん、頼みふかき友なくては、片時も生けるかひなしとはわが幼きころよりの心にしありければ、年たくるまゝに、いつしか眞の友も數澤になりぬ、さる中にもわきて慕はしう忘れがてなるは、此の友清子の君に

こそ、學びの舍におきふしを同じうせし頃は、さらにもいはじ、七とせのむかし、もろともに業卒へて君は今の白雲の君に嫁がせたまひて、まだ都にいまし〻頃は、さながらわが家のごとくゆき〻しけるが一とせの後、常陸なる大津の里へうつらせ給ひければ、それよりは、只文の便をいのちとぞ頼みける、されば年毎の夏のいとまには、こたびこそはとしば〳〵のたまへども、さはりありてかなはざるを、いとほいなく、恨ましう思へども、強いてなさんわざにしもあらねば、おのづから成りゆくにまかせしをことし、君は、公の仰にて、俄にその里をはなれ給ふとて、重ねて招かせたまふやう、いたづらにたゆたひなば、長き望もうたかたと消えて、此地のこ〻かしこを、何れの日にか見せまゐらせん、いざきたまへ、と背の君もろともにす〻め給ふに、有がたき仰せなれば、従ひまゐらすこそよけれと、家母せうとの君のつたまへば、あはた〻しうそなへしけるに、夜更けて身も心もつかれはてゝぬれども、中々にやすいしがたくてよみいでける、

いきたなき常にもあらず小夜ふけて
　むねさわがしく物おもふかな

文月十九日、つとめて、いさぎよく門出す、されど車の軋りいづる頃は、何となう心かきくもるやうなりて、

しばしぞと思へど悲し古里の
　空は木かげに見えずなりゆく

都をはなる〻こと遠くなりゆくま〻に、山川の色さへ、いや深くみゆれど、矢の如くすぎ去りては、其さまかいしるすべくもあらず、げに今の世の旅は、旅する心地もせられずなん、土浦の驛をすぎて、利根川を横ぎり渡る、去年の此の頃ならん、おのれいたく病めるに、せうとの君に随ひて、銚子わたり湯あみにゆくに、舟こそよけれとて、月あかき夜、纜解きて、此の川をすぎけるに、水少くて舟のはこび鈍く、やゝ行くと思へば、二時も三時も動かずなりていみじうわづらひけること〻も、おもひいでられ

て、

浪枕つらくもすぎしものながら
　みればなつかし利根の川づら

又霞浦といふをはるかにみ渡して

名にしおふかすみが浦もけふわれに
　さやにみすらん沖つしら浪

水府の城の、雲井にたかく聳え、千波沼の物ふりて淋しげなるわたりは、おのづから古しへの忍ばるゝを、まして西山こそ、したはしきかぎりなれ、見えずやと思へど問はん人もなければ、

西山はいづれをそれと知らねども
　只こひしさに仰ぎてぞすぐ

此よりは行さき遠からずときゝて、ひたぶるに待たれける時の心を、

いと早きゆげの車どしりながら
　けふはおそしとかこちぬるかな

清子の君が御すまひのさまこそ、わきて思ひやらるれ、芝生の小高き丘の上にやあるらん、坐ながら海ばらを望むべくやあるらん、潮風に袂ひるがへりて夏の日も肌さむくもあるらんなど、思ひつゞけて、

海近きいほとしきけば打返す
　浪のよる〱夢のさむらん

また大津の里のこと思ひやりて

まだ知らぬ山里ながら知れる人
　まつ人多きこゝちこそすれ

ほどもなく關本につきぬ、大津はその東二十餘丁とおぼゆる方にあり、あせみちを過りてぞ行くなる、小川の流れすゞしく、本くらき杜に日ぐらしのいそがはしげなるは、まだきにくれはつる心地せられけり、道すがら、高どのある家のみゆれば、此にもやと思へど、皆たがひて心いらだつ頃、やう〱其みすまひにつきぬ、清子の君たち驚きて、今より迎へまゐらせんとて備へしけるなり、いと早かりけりなど、悔しがりたまふ、なべて戀しとおもふ人に遭ふことかなひぬれば、嬉しさのあまればにや、暑さ寒さなど云ひもあへず、言の葉もあとさき亂るゝ故、

かゝる時には、中々に、よき歌などうかびいづべくもあらねば、いと拙きを二首まゐらせけり

嬉しさに堪へずもあるかな君かすむ
　大津のさとは此とおもへば

逢ふことはかなはじものと歎きてし
　こゝろあまりてあふか嬉しさ

清子の君もまた

嬉しさの限りならまし今日しもぞ
　まちにし君にあへる我身は

此のみすまひのさまは、わが心にゑがきゐしまゝにはあらねど、山を負ひ海を控えて、おのづからなる眺に富めり、はちすまばらなる池のかたへに、曲水のさましたる徑の二重三重ありて白雲の君が、つとめのいとまに養ひたまへる草木のひまよりのぼるべく、たかどのは海山にむかひて、ながめいとはれやかなり、廣からねども、つくらぬ庭の、中々にゆかしく、隣なる畑に、蔓はひのびて、ゆたかに實れるもをかしく、表よりつゞけける池の、いと長うめぐれるには、緋鯉のいみじう肥えたるがくさ〳〵あり、年ごとにふえまさるとなん、かはづの聲、夕ぐれよりはわきてしげくなるを、きゝなれし君たちは喧しなどかこち給へど、己れはいとおもしろくこそ聞きたれ、雨やよぶらんと思ふほどもなく、しめやかに降りにけり

笙なん携へたまひしか、心ぞへせんとて打忘れつ、とまだわが行李とかぬうちより、白雲の君ののたまへば、いかで忘れ侍るらん、おのれこを物するやうなりし時、その師の君に、ひたちに一人のふるき友あり、交りいと深ければ、年毎に招かせたまへど、笙もたではまからじといなみつゝあり、と告げまゐらせき、されば、君がり笙たづさへてまからんとはなるをとて、取いでて見せまゐらせければ、ちかき六とせ七とせの望にて、まだこの道に入らぬ頃より十六夜には、平潟の入海に舟うかべて奏したまへなどすゝめ給ふ、おのれこよなきことゝ喜びて、こは日頃いたく願へるふしなれど、都にてはかなはねば

こたびは、果してんと思ひけるに、君よりかくのたまはせたまふは、實に幸多く侍り、と答へまゐらせぬ、白雲の君、いたく鳳笙の形をめで給ひて、調律やぶるゝとも、そなへおかんには、きはめてけだかきものなり、得まほしうこそ、など語らせたまひき

兄君も、歌にて御返り事たまはりぬ

まちわびしその音づれをいまきゝて
我もこゝろの安くこそあれ

家居には心なおきそたらちねの
親もわれらもさきくありけり

秋七題



木の實（其の三）

此の日みやこへ歌もておとづれすとて午をへて二時すぐる頃なりき

大津の里にやすくつきけり
たらちねの母のみうへもはらからも
さきくてこそあれ遠の家居に

知らせのうた讀をへて座右におきけるに、やがて見えずなりければ机の下などさがしけるに、白鼠の引ゆけるなりけり、

語らねどけふの便りや待ちつらん
人よみをへてやがて引ゆく

旅のつと

田畑夏子

帰省

あづま路を今朝立ちし身のこの夕
故郷の母とかたるうれしさ

聴虫

夏木立もる月きよみなく虫の
聲きゝて寝る葉がくれの宿

懐舊

さと川の木陰に立ちて其むかし
蛙つりたる友をしぞ思ふ

養老瀧にゆきて

養老の瀧の眞清水みやこ路に
流して塵の跡をたゝばや

八月廿五日(舊暦六日)の夜あまりに
月の淸ければ

戀しき母上わが妹よ
われみそなはせ木がくれに
六日の月の影きよく
すゞしくうたふ虫のこゑ

三十一文字　投書中の佳作

月　　杉原衣子

花よりも月ぞあだなる一夜へて
みつればかくる影の見えつゝ

母に寄す

業にうみて物おもふ夕うつし繪の
われいましめてさゝやくかごと

賤機を絶ちしにまさる御教を
まもりて行かんまなびの道を

常盤御前　　石井妙子

子を思ふこゝろの闇にいさぎよき
みさほのかゞみくもりけらしも

八千草ににほひことなる女郎花
花のいろこそ花のあだなれ

八月二十五日、朝よりふりしく雨の、晴間ありける夕ぐれ、子供ひきつれ海邊にいで、思ひつゞくるまゝを

阿部優子

秋雨の。はれまにわくる小松原。こぼるゝ露のしらたまの。落ちて碎くる眞砂路を。ふみつゝ行けば墨染の。夕しほたかし由井ケ濱。たづぬる甲斐もなかなかに。昔もかくやありそ潟。浪よりいづる月かげも。まださゝなくに海人小舟。ゆくもかへるもからき世を。わたるしをりのあとたえず。のぼるけぶりの末とほく。なびきてかゝるむらきもの、心づくしの子まつらむ。その子の母もまつらむと。いそぐ住家やいづこなるらむ。

反歌

としどしにすむ人おほく磯やかた
　ありしむかしの跡ばかりなり

由井が濱むかしひゞきし鶴がねの
　かたみにのこる千代の松かせ

九月五日宮中御歌會詠進

秋池

八千くさのはなのうつれる池水も
　秋のにしきを見るへかりけり　瀧子女王

秋風のおひてまちえつはすいけに
　ちりうく花のあけのそほふね　高崎正風

秋風にみなそこすみてはすのみの
　さひしく見ゆる庭のいけかな　鍋島直大

よる波もさやかに見えていけ水の
　すめるは秋のこゝろなりけり　北小路隨光

大くらの入江ひゞきてたつかりの
　おとしつかにもすめる月かな　本居豐穎

はなはちすちりてうかへる不忍の
　いけの面涼しあきのあさかせ　津輕承昭

春日野に雲とふしかのこゑふけて
　月すみわたるさるさはのいけ　小畑美稻

秋風はふきそめにけんきりのはの
　ちりて浮べるにはのいけみつ　梅溪通治

いろいろの數もさやかに見ゆ斗り
　すみわたりたるあきのいけ水　藤井行德

田にそゝき畑にそゝきて秋ふけし
　野中のいけそすみわたりける　唐橋在正

秋萩のはなさきそめてなつかしき
　いろになりゆくにはのいけ水　水野忠敬

にごりなき御池の水もあきかせに
　すみまさりたる心地こそすれ　常磐井堯熙

蓮葉もやゝかれそめてあきかせの
　ふくおとさむし大くらのいけ　柳原愛子



家庭と鼻の衛生

醫學博士　岡田和一郎

三　鼻病と家庭の關係

身體が鼻の爲にいろ〳〵に影響して來て、まるで鼻の病氣でないやうな病氣を起して、醫師を招んで來て、非常に苦心をすることがある、例へば喘息、喉がつまつて肩で呼吸をして苦む、もし一家内に喘息の患者があつたならば、一家の人は非常に不幸な家庭に陷らなければならぬからである、そこで此喘息は多くは鼻の病氣に由來するのである、鼻がつまつたといふやうな人は、喘息などの病氣に罹る、喘息は悉くと言ふのではないが、百の中ならば八九十までは鼻の病氣から來る者である、又時に依ると癲癇も起つて來る、痙攣して倒れて仕舞ふ、極く輕いのであれば、飯を食ふ間に茶碗を落して仕舞ふやうな癲樣發作の來ることもある、鼻がつまつたと云ふ時分に、あゝ云ふことが度々ある、其他神經性の心悸亢進に動悸がして來るから、ソレッと言つて醫師に駈付けて診て貰うと、心臟に大した異狀はない、併しながら動悸がして仕方がないといふやうな病氣も多くは鼻から來る、其の他まだ種々神經性の消化不良症と名づけて食事の進まぬことがある、始終鼻がつまつて居る爲、食慾が少く、又食つても消化しない、始終何か胃に入つて、非常に押されて心持がわるいといふやうな工合にして、遂に夜に入つても腹が押されるやうで眠ることが出來ないといふやうになつて來ることもある、即ち皆此等の病氣は鼻の知覺が過敏であるから、其の神經から交感して、腦髓に及んで來て、腦髓から肺だとか、胃だとか、心臟だとかに關係して來る、さういふ風に鼻の病氣から

身體の各部の病氣がやつて來るから、さうすると一家内が非常に騷ぐのである、斯く述べ來らば、鼻の疾患は、生理的作用、即ち鼻で作用くことが出來ないで、それが爲に口から空氣を取らなければならぬ爲に、其當人が非常な不快を感じ、いろ〳〵な餘病が發つて來る、鼻の感覺のなくなつたが爲、實に人生の快樂中の一部を奪はれそれのみで、既に不快であるに、神經に交感して來る爲に、腦髓に變化を起して、或は教育も充分に出來ず、亂暴をする人のある爲に、家内に風波が起るといふやうな、種々の影響を及して來る、故に一家内の者の鼻が健全である、即ち空氣を取る道が充分に健全であつたならば、少くもそれが爲に一家の上に不愉快を來すといふことの一部は正に免れるに至るのである、そこで愉快なる一家の家庭を作つて、子供を養育する上に於ては、他人に負けず、充分の成績を以て教育を授け、それから一家内の者は、いづれも健全なる精神を有つて交際場裡に立つて充分に社交の上に鞅掌して行くやうな家庭を作るといふやうな事は、充分に身體各部の健康を無論計らなければならぬが、それには此鼻の健康を圖つて行くことにしたならば、幾らか其目的を達することが出來るであらうと信ずるのである、一家の安全を圖り、家庭の幸福を得んとするに、如何にすれば鼻の病氣に罹らぬやうになるか、どうして此不幸を防ぐことが出來るかと云ふのが、大切な問題であらうと思ふ、故に此問題を解決するには、何ういふことをすればよいかと云ふに、無論前述の如く、鼻の病氣を來す原因は澤山あるが、一には天性のものがある、それは仕方がない、けれどもさう云ふのは子供のうちに早く醫師に賴んで癒して貰ふ天性のものは鼻に一定の病氣があつて、其爲に精神の變化を來し、神經系統に變化を來すのであるから、さういふものは左樣せぬうちに早く癒して仕舞ふやうにすれば、教育も充分に出來、神經も冐されずにしまふ、是にどうも幾ら衞生を重んじても防ぐことは出來ない、又傳染性のものは、現今の吾々時代に

は仕方がないが、今の時代の人が、健康になつて居たならば、遺傳、又傳染するといふことは少くなる、遂にはなくなつてしまふ、後の世には盡くるであらうと思ふ、天性斯の如き病氣に罹るものは少くなるであらうと私は認める、そこで此病氣の原因は何であるかと云ふに。最も多くは感冒性である、即ち風邪をひくことである、風邪といふことは、今日の言葉でいふと鼻加答兒である、精しく云へば、鼻か腫れて、さうして鼻汁がふえて、鼻が詰るといふやうな事である、其の風邪、之を豫防するといふ事は、鼻の病氣を減ずる唯一の方法である、それから此風邪をひくことを防ぐには、どういふ風にするかと云ふに、是はなか〳〵むつかしい、

風邪をひかぬといふことは、藥劑をのんだり、チヨツとした方法を以て豫防することが出來ない、一番よいのは即ち自分の身體を鍛えに鍛え、さうして寒さに冒されぬやうにするのが一番宜い、鍛えると云ふのはどッする、と云ふに、世の中の此氣候の變化といふことは自然であるから、どうしてもなければならぬ變化である、なければならぬ變化であるから、之に應じ得るやうに覺悟するのが必要である、あまり暖かい所に引込んで居ると、大變心持は宜いけれども、寒い風に當つたら必ずそれに冒される、そんな事では迚も世の中に健康に生存することは出來ないのである、氣候といふものは始終變化する、それから又空氣の寒冷溫度といふことも始終變化するものである、其の變化に應じて行くには、自分の身體の修養が暖かい時にも寒い時にも、充分堪へるやうに出來て居らなければならぬ、さういふ風に鍛えるといふのである、即ち日本人は我々の家屋の構造だとか、或は衣服なども多少關係して居る、總て生活法が、戸外の空氣の變化に堪へるやうになつて居る、即ち過般の戰爭などで、日本の兵士達は彼の滿洲に於て、零以下十八度或は二十度といふやうな、今日東京などで考へられぬやうな處でも凌いで來た、私は二十七八年の戰爭に滿洲に行つたが、手などは動

かね、口髯は凍つてポッ〳〵折れるといふやうな寒さで、其の中に居ても、毛布を澤山給して、さうして包んで其中に安然として寝食するならばよいが、併し兵士の生活はさうでない、時によると露營もする、雪の中に毛布タゞ一枚にて寝るさういふやうな寒冷の中に居ても、日本の兵士は風邪を引かぬのであつた、私も其の時に患者を多く見たが風邪を引いて診察を受けるなどゝいふものは一人もない、實によく寒冷に堪へる、夏はどうであるかと云ふに、過般の戰爭の夏に於ては、熱くて仕方のない場合には水の中に飛込んで一時の熱さを凌いで進軍するといふ位で、實に熱いけれども、あの重いものを持つて、突撃をするといふ事も充分に出來得るといふのは、即ち熱さにも堪へ、寒さにも堪へて、自分の任務を全うするのは、是は日本の兵士が、身體を豫め能く鍛えて、寒さにも堪へ熱さにも堪へるといふことは鍛上げた結果である、此寒さにも熱さにも能く堪へて、さうして任務を全うし得るといふ身體の軍人は實に結構である、然らば此結構なる特性は日本の國民悉く有つて居るかと言ふと、隨分有つて居ないものがある。而も日本の上流社會、或は婦人社會の人など

秋七題



（其の四）　小春

は此性質が缺けて居りはせぬか、即ち上流社會の人は、家へ歸れば煖爐が焚いてあつて暖かにしてある、或は家の内外を問はず常に衣服を澤山重ねて居る、殊に上流社會の人が子供でも持つと、戸外に出るに寒いから下着も着ろ、それから上に上着も着ろと、いふ工合にやられるのであるが、さうすれば氣候に對する抵抗力が減つて來る、デあるからさういふ生活をする人は、稀に寒い日に用事の爲に外に出れば風邪をひく、頸卷をするとか、手袋を用ひるとか云ふことも同樣である、西洋の人は帽子を始終冠つて居るから、帽子を脫いで少しく路傍に立つて居ると、直に風邪をひくといふ工合である、併し西洋のやうに戸外へ出るには、帽子を冠らなければならぬ、人に接するには手袋を用ひなければならぬといふやうに、世の中の習慣がチヤンと定つて居れば容易に忘れぬから、それが爲に風邪をひくのは稀であるが、日本では生活する上に就て、實に不規則である、手袋を用ひなくても禮を失したといふではない、又帽子を冠つて居ないでも失禮といふではない、社會の制裁が無い、人々の意思通りにして居るのである、さういふ風に、あまり種々な事をして居ると、時々忘れる、忘れると平生の習慣と違つた事をするのであるから風邪をひく、であるからチヤンと定つて居るのはないが定らぬものは、成るべく單純にして貫ひたいのである、私どもは冬でも頸卷などはした事はない、成るべく衣服も薄着にして、胴着などは着ろといはれても決して着たことはない、其お陰で日淸戰爭の時なんぞも、そんな兵隊のやうな生活をして居つたけれども、チツとも風邪をひかずに任務を盡して來た、デあるからこれから追々朝寒夜寒になり、段々冬に近づいて來るが、成丈け暖くないことに慣れるやう、餘計に衣服を重ねぬやう、室などもあまり温ためぬやうにして、さうしてよく戸外に出て、寒氣に身體を當てゝも堪へられるやうにして行きさいすれば、決してどんな氣候の變化が來ても差支ないやうにするであらうと思ふ、却つて

上流社會の人にさういふ風に無理々々自分を弱くする傾向がある、さういふ人々は、抵抗力の少い爲に悪い病氣を引起すことがあるかもしれぬから能く寒冷に堪へるやう、身體を鍛へるといふことに力めるが宜からうと思ふ

乃ち病氣は澤山あるが、兎に角風邪を引かぬといふことを充分に心掛けたならば、それに依つて健康な身を有つことが出來る、健康な身を有つことが出來れば、一家の内の精神に變化を受けることなく、身體各部に來る病氣も減つて來て、私の理想通り、一家團欒、和氣靄々の家庭を作ることが出來やうと思ふのである、（完）

女子と看病

醫學士　久保杏林

凡て何れの邦でも看護には婦人を使ふ樣に成つて居りますが、是は何故婦人が好いかと云ふに、第一手柔かで思ひ遣が男子よりも宜い、夫から手先の業が、男子よりも巧みにして細かい、又男子は日常の職業を營んで往かなければ成らんから、勢ひ家に在りて看護などの事には女子が從事しなければ成らぬ、夫から又看護婦たるもの丶心得て居らなければならんことは、成るべく自身の意見を出さない樣にするといふこと、即ち自分は殆と器械的の人間と成つて專ら醫師の命に隨ひ、只深切に病人を扱ふと云ふ事が肝要であると云ふ事を心得て居らなければなりませぬ、又人の病を看病すると云ふ時には、其目的とする人の身體の事を多少知つて居りませんければ、看病と云ふ目的を達する事が出來ません、例へば、外科に於て解剖學を看病法に說きまするは、何の必要がありてかと云ふと、大怪我をしたとか、或は骨が折れたとか、其他非常の負傷者を取扱ひます時分に、骨の關節はどうなつて居るか、脈管はどう云ふ風に走つて居るかと云ふ事位は是非共知らなければ成りません、夫から又内科の方に屬して居ります

所のものでは、血液の循環、食物の消化、神經の作用、夫から人間の身體の中に在つて不用なものを外に捨つる所の塲合、其一例として申しますれば、目に見えて不用物として、外に出て來ますものは大小便の様なものです、是等のことを一通り心得て居ることも肝要です、

先づ吾人の身體は蒸氣仕掛と同じ様なものでありますから、此例を引いてお話するのが一番解り易いだらうと思ひます、此蒸氣機械と云ふものは何に依つて働くかと云ふと、之には先つ新炭の如きものを燃いて熱を生じ、其熱にて蒸氣釜の中の水が蒸氣になつて、夫から機關の所へ導びかれて初めて原動力に換つて運轉を始めるのであります、夫で此蒸氣機鑵の方は、側に火夫が居つて始終石炭を入れて遣りませんければ不斷動いて居ると云ふ事は出來んのでありますが、人間には手も足も付いて居りますから、自分を養ふ所の燃物をずん／＼と取つて來て喰ふ事が出來ますから、大變便利な器械であります、

さて此の人間の身體と云ふものは運動をするので活きて居るのです、而して此運動は何から出來るかと云ふと、熱が運動に變ずるのですが、人間の身體は之と反對で、其生じた熱の四分一丈が運動に變ずるのであります、それ故其他の不用な熱は捨て仕舞はなければならんのです、我が邦の様な穏和な氣候の中に住んで居ても、常に不用な熱を生じて居るからして、若し病氣などの爲に無駄な熱を生じた時には、少しも早く冷ましてしまはなければいかんのです、此事は極く理に適つた所の看病術でありまして、熱病者の熱を冷すにどう云ふ手段方法を以つてするかと云ふお話は看病學の本領でありますから、夫れは追々お話する事にしませう、

先づざつと申ますと、何が常に人間の身體から一番熱を奪ふかと云ふと、身體から、不斷水分が蒸氣に成つて蒸發して往きます、此水分の蒸發で以て吾々の身體は冷めて居るのである、其次に身體の温を外へ出すのを放散と云ふて、之は理學の方で云ふ身體

冷飯の話

昨年の夏頃麥飯の中に消化菌(枯草菌)ある事を發見し、學界に名譽を博したる東京衛生試驗所技師八木長恭氏は、此程再び米飯(冷飯)の中にも、同樣の菌あることを發見し、冷飯の効用を明かにしたる由なるが、其話の大要を記さん

▽**枯草菌の性質**　枯草菌は何の植物にもよらず附着して居ますが、殊に米、麥、甘藷、馬鈴薯、大根等に多いのです、元來此菌は澱粉を砂糖に變ずる働きをするものです、其順序を申しますれば、澱粉からデキストリンになり、次に麥芽糖となり、更に葡萄糖となり、夫れから砂糖となるのです、枯草菌は右の樣な働を持て居ますから、之が日本人の常食たる、米の中にあると云ふのは何よりの事です

▽**米はザツト洗ふべし**　枯草菌は米粒の外部なる、所謂糠の附着して居る部分に附いて居るのですから、若し御飯を炊く時、少しも糠の無くなる樣に洗つたならば、枯草菌を洗ひ流しますから、先づ水の濁らぬ程度に洗つて置く必要があります、

▽**枯草菌は冷飯に多し**　元來此枯草菌は強度の熱に遇へば悉く死にますから炊き立てのホヤ〳〵飯には、枯草菌は少しもありません、然し枯草菌の生ずべき芽胞は、強度の熱に堪へますから、炊き立ての飯中にも芽胞は生存して居ます、そして此芽胞は飯の冷ゆるに從つて、漸次に生長して、遂に全く飯の冷へきる頃には、再び深山の枯草菌を生ずるのです

▽**冷飯の効用**　右の理由から、飯は炊き立てのホヤ〳〵よりは、冷飯の方が速く消化するのです、世人が茶漬は早く腹が空くと云ひますが、あれは全く根據のない事ではなく、此枯草菌が存在するに基くのです、ですから腸胃の弱い人は、温かな飯を食はぬ樣にすれば、自然消化力を助けます、云々

▽**兩樣の試驗**　八木技師は斯く語りつゝ立つて、二個の試驗管を示されて曰く、此の一つの試驗管のは、米を何度も〳〵も丁寧に洗つて、少しも糠を止めぬ樣にして、飯に炊いたものです、又一つはよい加減に洗つて飯に炊いたものです、そして此二個共に人體と等しき溫度で温ためたのですが、御覽の通り前のは少しも飯の形を變へて居りませぬに引代へ、後のは此の樣にどろ〳〵の液體に變じて居ます、是れ前者は米の中の枯草菌を洗ひ去つた爲めで、後者は其中に存する枯草菌の作用で、飯が既に消化したのです、冷飯に人體と同じ溫度を與へますと、凡そ四十八時間にして澱粉は變じて、砂糖と變じ、どろ〳〵の液體になります、此の試驗の結果に照しましても、枯草菌が米飯中にて働く作用が分りましやう、彼の下女や下男のブリ〳〵と肥つて居る達者のも、旦那樣や奥樣方の何時も弱々しいのは、此ホヤ〳〵飯と冷飯の關係が與かつて力あるのでしようハヽヽ。

の温を周圍の物に分け與ると、それ丈己の温をうしなふのである、今一つは傳導と云ふて、自分の身體が熱くあります時分に、涼しい風にあたるとか、または團扇の風で温をあふぎ去つて仕舞ふと、新しい冷やかなる空氣が入り替つて參ります、その涼氣があたたまつて來るまでには、身體の温が幾分冷えます。

夫ですから熱病人などのあつた場合には、涼しい風で以つて其の病人の身體の周圍を圍繞てある方が道理に適つて居るのであります、

夫から今一つは熱病人の居る室は、空氣を能く入れ換へて風通しをよくしなければならぬのです、夫は何故かと申すと、病人が呼吸を致しまする場合には、息と共に水蒸氣が澤山肺から出る此中に傳染する性を具へたバチルスの樣なものがあるかも知れません、夫故に病室と云ふものは、只涼しくするばかりでなく、新しい空氣が始終出入する樣にして無いと危險であります、

乳の話

其九　牛乳の檢査法

農學士　牧　忍

牛乳の需用が增すに從つて、牛乳に水や米の磨汁等を混じて分量を增したり、又は滓乳（バターを製する爲に牛乳中より其脂肪分を取り去りたる殘りの牛乳）等を販賣するものがありますから、是等を檢査する方法を述べて見ませう、然し正確な方法は種々の藥品器械等を要しますので、專門家でなくては出來難くありますから、止むを得ず普通の方法だけを述べます、

一、水を混じて稀薄にしたものを檢査するには、比重計で比重を計ればよいのです、正當な牛乳の平均比重は、一、〇三乃至一、三三ですから、もしそれよりも比重が減じましたら、それは水の混つて居るからであります、御承知の通り、水の比重は一ですから、混つて居る水の分量の多い程比重は減じます、

二、滓乳を檢査するにも、矢張比重を計れば宜しいのです、前に申した平均比重より著しく比重の增したものは、滓乳です、凡そ牛乳の成分中で、水より輕いものは、脂肪ばかりですから、其脂肪を全體でなくとも、幾分か取去りたるものは、比重が增すのは當然です、序に申しますが、滓乳に適當な水を混合して、其比重を調合したるものは、勿論比重では檢査することが出來ませぬ、これは其固形物の量又は脂肪の量を定量せなければ知れませぬ、

三、米の磨汁を混じたるものを檢査するには、其牛乳をよく振つて盃に入れ、之に二三滴の沃度丁幾を加ふれば分ります、即ち米汁の混せてないものは、沃度丁幾の色（黄色）になるばかりですが、米汁を混せたものは、直ちに藍色になります、これは米汁中の澱粉と沃度丁幾とが作用するからであります、

○大日本實業婦人會　今回東久世土方の兩伯を、名譽顧問に戴き、朝野知名の士の贊成を得て、大日本實業婦人會なる者組織され來る六、七、八の三日間本鄕座に於て發會式を擧行する由、

針のはこび

島田好糸

この月より袷の氣節に入りましたから、袷の縫方をお話しいたしませう

女　物

△篦のつけ方　先づ表袖を取り出來上りの寸法よりも一分長く、丈及び袖口の印をつけ、袖付の寸法は出來上りに、裏袖は八ツ口の丈を五厘つめて印をつけます、

身頃は、表の丈及び袖つけ身の八ツ口の印をつけ、次に裾廻しを取り、四枚そろへて裾口の方を裁切り、縫代を二分五厘として、丈の印をつけ、次に胴裏を取り身頃の丈より裾廻しの丈を引き、それにふきの寸法を加へて、丈の印をつけ、袖つけ及び身の八ツ口にも印をつけます、（ふきの寸法を加へますには裏表共に木綿なれば二分袘は四分、一分五厘の袘は三分の割合で加へますが、表が縮緬の樣なたれるもの

、時には、其積で一二分ほど適宜に加減をして加へませぬと、表がかぶりますから一寸御注意までに申上ます）それから次に表の衽を取り、裾の方をよく切そろへて、身の丈より衽下りを引ました寸法に、丈の印をつけ、次に褄先きの巾を縫込を二分五厘裾の縫込を三分に、衽巾は褄先きの巾の縫込みより四寸出來上りなれば四寸一分に、褄下の丈の印は褄先の印よりはかりて、出來上りの寸法に印をつけます、褄下の巾の縫込は褄先より、襟先までに二分まげますから、襟先の縫込は四分五厘となります、次に相づまを三寸六分に印をつけて、前に申ました單物の衽つけの印と同樣に印をつけ、襟つけの印をつけます、次に裏の衽の印をつけますが、裏はたてづまの切と衽先の切とをはぎ合せて、寸法は表と同樣に衽丈は袘丈を多く見積つて印をつけるのです、襟は單物と同樣に裏表の印をつけます、裏襟は襟先の切を一つはいにつける樣に積り、襟先をはぐ方がよろしう御座います、

△縫ひ方　袷を縫ひますには、先裏袖を取りまして、それに袖口を一分口先きに出してかけます、次に袖口を少しずらす、袖裏の身を少しゆるめて、袖口の先を躾糸にて縫ひ、表の袖口先と袖口の口先とを揃へて縫ひます（但し袖口の印の處は、裏袖と表袖と縫ひ込みを同じに二分五厘として、一寸位の間斜に縫ひます）袖口を縫ひます時は、表の切を少ゆるめ、袖口を少しずらして縫ふのであります、縫ひ目は可成細かの方がよろしく御座います、次に袖口を表と表と裏と裏と四枚合せて、袖口の印より一寸ほど返し縫いたしまして、それから四枚一しよに袖下まで縫ひ、その縫ひ目より量りて袖巾の印をつけ、次に袖下の八ツ口の方を裏表別々に二寸ほど縫ひ、次に八ツ口を裏と表と合せて、袖付の印より印まで縫ひ、次に袖下を四枚合せて袖の丸みの處まで縫まして、單衣の袖と同じ樣に丸みのひだを取り、表へ引返し、袖口八ツ口、及び袖全體裏表一しよに躾をかけます、次に表身頃を取りまして、脊及び脇衽とを縫ひ、次に

裏の裾廻しと胴裏とをはぎ合せ、脊、脇、衽等を縫ひ衽を合せ、褄を縫ひ袘の寸法を定めて裏表いつしよに躾をかけ、袘とぢを致します、袘とぢと針目の數は、脊脇の縫目には裏表に出しまして、後は裏の前に三、後に四、表は前に七、後に十一、の割合で裾の折目より一分より少し上の處へ針目を出します、次に脊脇をとぢ、肩巾の折をつけ、小八ツ口を縫ひ袖をつけます、袖付を留めますにはじめ表身頃と袖の裏表と三枚をとめ、それに裏身頃の一枚をとめつけまして、表袖を縫ひつけ、次に裏

秋七題



運動（其の五）

袖を縫ひつけます、袖つけは初終ともに返し縫ひをいたします、袖つけの折は表は袖のかたへ、裏は身頃のかたへかへすのであります、次に衽をとぢまして、褄下を縫ひます、それから裏表一つしよに褄下に躾をかけ、衽先さのまがらぬ様によく裾へつけまして、衽の縫ひ目に躾をかけ、また衿付の處も躾糸にて衽の裏表をとぢ、裏表の衿にて身頃をはさみ、衿肩より兩方へ縫下します、次に衿先を縫ひ表のかたへ折りかへし、衿の中の縫込をよく裾へつけて、衿をくけます、裏衿

の巾は表よりも二分狹くいたします、出來上りましたらば木綿ものはそのまゝにたゝみつけ、絹布類でしたならば、火熨をかけてよく仕上げをいたします、

男　　物

△篦のつけ方　袖は表裏ともに袖丈、袖口、袖つけ、等を同じ寸法にしるしをつけます、裏は裾廻しの付きますものは、女物袷の裏の篦の付けかた同樣でよろしう御座います。若し裾廻しの付きませぬときには、裾口を切りそろへまして、裾口より丈をはかり表の身丈よりも裄だけ長く印をつけ肩の處で上げをいたします。其外衽衿等は女物と同樣で御座います。

△縫いかた　男物と申しましても縫いかたについては別だんに女物と大差は御座いませぬから、唯々其順序のみを簡單に申上ます。

先づ袖裏に袖口をかけ、表袖と合せて袖口を縫ひ、次に袖口をとめ、袖の先まで裏表四枚一しよに縫ひ袖巾をはかり、人形袖の時には表と裏と別々に人形を縫ひ、後に袖下を四枚一しよに縫ひます、若し人形なくして袖下の皆つく時には袖下の袖に付く方を三四寸ほど別々に縫ひあとは皆四枚一しよに縫ひ袖のひだをとり、表へ引返して躾をかけます。

次に表身頃の脊縫ひをなし、上げを縫い、脇と衽とを縫ひ裏も同樣に衽まで縫ひまして裾を合せ、袘とぢをなし、次に脊脇の縫目を表と裏と綴ぢつけまして、袖をつけます。次に衽を綴ぢ褄下を縫ひ衿を表裏一しよに縫ひつけ衿先きを縫ひ衿巾を定めて、衿を絎けます。

臺ところ

霞袖女史

先づ料理をするに心得て居らねばならぬことは、魚の生立場所と、時候とにより、味の良否と滋養分に差別がある事です、

▽鯛　小鯛中鯛には年中時候の變りはありませんが大鯛は十月より翌年の七月までを時候といたします

す、生立場所は東京海邊より、神奈川縣内海、本牧海邊、相州江の島三崎が一番であります、小田原海邊より東海道筋の濱邊より取れるものが其次であります、又房州の海邊、東方九十九里より銚子の海邊は又其次で、それより水戸の濱方より東京魚市場へ箱入にして送ります、味は極めて惡うございます、此外所々から送り來る品もありますが、皆味は此近邊の品より數等落ちるやうであります、

▽鯛の海鹽煮　鯛の鱗と腸を去りたるをよく洗ひ、頭と尾の際、腹の部等がよろしいのであります、脊の部の身の多くあるところは皮つきのまゝ（刺身又は酢のものに用ゆる）取除けおき、成るたけ頭、尾、腹などの骨の多きところを適宜に切りて、鹽をふり、〔三十分より一時間内外〕おくと、鹽が充分に身にしみ込みますから、それを調理するのであります、

扨てこれを調理するには、先づ鰹節の上等を、上の皮部を取除き薄く搔き、煮出し汁を取り、鯛を水にて洗ひ、沸騰したる湯の中へ入れ、手早く交せ、湯を絞り、水を替へ、充分鱗をさぐりとり、煮出し汁を沸騰させたる中へ鯛を入れ、火の透りたるころ、鹽味にて味を見計らひ、少し醬油を加へ、椀盛、茶碗盛等へ入れ、吸口は時候により見計ひて用うるのです、

▽鯛の霜降刺身　前に鯛のあらひを海鹽に仕立た殘りの脊の身の皮目へ、沸騰したる湯をかけて水に冷し、布巾にて水氣をふきとりて薄くつくり、刺身となし、又は角形に切りて皿へ盛り、つまものを添へて出すのであります、つまものは時候によりて種々ありますが、うど、靑紫蘇、穗紫蘇、白瓜、黄菊、其他海草類でありますが、刺身に添ふるつまものは、衞生上の點よりいたしても、極必要なものであります、何故と申せば、刺身につまを付けずして醬油にて食しますると、あまり食慾の増し過ぎるものでありますから、

▽鰹は其品柄、鯛と同じ品位を保つ魚であります、又滋養分と、經濟との兩點に置きましても、決して

鯛に劣りません、又此鰹も、矢張生立場所と時候とを撰ぶのが、最も肝要でございますから、一寸其心得を左に申しませう、

東京近海にては、相州鎌倉邊より、小田原、三崎等の濱邊を一等をし、房州海邊より銚子の海邊が次にて、九十九里邊は味が又おちます、鰹節に製しましても同じであります、近頃伊豆の海邊にて製造いたします鰹節は有名なる土佐より品が勝つて居ります、また房州節常陸節は雜菜用にて、料理用には出來ませぬ、又時候は五月中旬より十月中旬迄が宜しいのであります、

▽鰹の味噌汁つかみ豆腐、鰹を卸して背の身と腹部を縦に切り、血合を充分取除き、脊身の皮をすき取り、庖丁の背にて能くたゝき置、味噌汁を仕立て、たゝきたる鰹を鍋へ入れ、味噌汁を少しづゝ入れ、攪交せ煮立たれば、豆腐を手にてにぎりつぶし、汁の中へ入れ、汁加減を見て、吸口は柚子、青紫蘇の微塵切、或は穗紫蘇を用うるのであります、

▽同じく腹の霜降刺身　腹部も血合と腹の骨を取除き、横に金串を四五本差込み、充分なる烈火にて皮めのみ手早くこんがり焼いて、冷水にてひやし、布巾にて水をふき取り、刺身につくり、或は背の身の皮をすり取りたるをつくり、盛合せるも體裁よきものであります、

▽豆腐粕煎　は場合により經濟の總菜にもなります、煮汁のなき節、或は他に用ゆべき品ある時は用ひぬがよろし、さて鰹入豆腐粕煎は、鰹のよろしき身を用うるのではなく、血合、中骨、腹部の身を用うるのであります、調製は血合の身は、一度湯を透し、骨付の身は蒸して身をほごし、擂鉢にてすり置き、鍋へ胡麻の油を少し入れ、火に乘せ、烟のたちたる頃二品を入れ、能く攪きまぜたる中へ湯をさし入れ、砂糖と醬油にて味を見計ひ、中途にて葱の小口切を加へ煎り上げ、器物に盛りたる上へ、生姜の細切と穗紫蘇を酢に漬けたるを上せ、食膳に供すこと一層味のよろしいものであります。

嶄新なる臺所道具

工業所有權保護協會にて、嘗て懸賞募集せる臺所道具發明品の當選披露會を先月三日麴町道三町特許局内に於て舉行せしが、應募總數百四十名の內、左の七個當選せり

第一等　爼　下谷區徒町三の四三　渡邊　務
第二等　小原式五用火器　淺草諏訪町一　小原吉五郎
第三等(甲)獻立棚　麻布網代町一五　橋本　岩吉
同(乙)　戸棚　下谷徒町三の四三　渡邊　務
同(丙)大小兼用五德　京橋木挽町十の五　中川　津平
同(丁)沙焙器　千葉縣安房郡田原村池田四一〇　河北　卯吉
同(戊)　魚燒網　赤阪田町一の二　磐井彥太郎

等にして、第一等に當選せし爼の如きは、從來何人も最早發明の餘地なしと思惟せるに係はらず、斯かる新案の出でしは、發明者の苦心思ひ遣らるゝなり、此爼は從來の者と異り、鐵脚にして、上下に開展するを以て、爼の表裏を使用する事を得べく、且使用後は其脚を板面と水平にし、壁などに掛け置くに便にしたり、第二等の三原式五用火器とは、全部金屬製の方形のものを二つ重ねたる爐にして、上部の道具を取り換ふる事に依て、或ば燒釜ともなりて物を蒸し或は銅壺となりて、湯を沸かし、或は其上に釜を掛け或は魚類を燒くものとなり、或は餅の如きものを燒く網となるものにして、即ち五つの効用をなすものなり、第三等(甲)の獻立棚は前側の一つの棚板を上へ揚げれば棚は、忽ち疊まれて一枚の板の如くなるを以て、取かたづけに極めて便利なり、同(乙)戸棚は一見下駄箱の如きも其盃を引けば棚板と水平となり、一の獻立棚となる仕組なり、同(丙)大小兼用五德は從來の五德と同一形なるも、其爪が固定せずして左右に開閉するを以て、大小如何なるものをも載せ得べく、且又若し火が五德の中央より、傍にある場合には、其爪を緘閉して、火の眞上に物を載する事を得、又其爪を充分に開けば網を要せず、物を燒く事をも得るものなり、同(丁)沙焙器は専ら卵を燒く時に用ゐらるものにて、從來の卵燒器と異り、二重底となり、內側の器に卵を燒くを以て焦る事なく、且つ直接火氣に當る、第一の底の周りには、小孔あるを以て、火氣は其底より入て、上部に迄も充分火氣を與ふる事を得るなり、同(戊)魚燒網は從來の魚燒網に改良を加へたるものにして、即ち魚の針金に當る面少きを以て、魚の針金に附着する憂なしと云ふにあり、即ち今日の審査方針に就て審査委員塚本博士氏の語る所を聞くに、第一發明なるや否や、第二實用的なるや否やに就て、各委員が充分に考究せし結果、當選者を定めたるものなれば、以上の諸品は極めて嶄新なる實用的發明品と稱して可なり、



寢物語

石川殘月

由比賴三は放蕩に身を持崩して、先祖累代の地所家屋も他手に渡し、家産を蕩盡して自分夫婦と一郎と云ふ小兒と三人づれにて、心安き知人の許に厄介になつて居つた、賴三を一時は絶交までしたる叔父が、それを見かねて、某銀行の書記に世話せしも、その持つて生れた心の病が、またも再發して、銀行の務もなりがたき始末となつて、果は逃亡三昧、今は日影の身となつて、廣い天地に身の置所もなき憐れな生涯、心一つの持やうにて、いか程も廣くなる世間に、罪の籬をめぐらして、たよる友もなければ、寄るべき親戚もなく、とある町の裏店住居に、初めて嘗むる辛味噌世態の心の苦しさ、妻のお民も當年三才の乳のみ兒をからげて、寸燐の箱はり內職。奧樣とあがめられて身の裝飾に餘念のなかつた番町の屋敷の事を想ふと、夢であつたかとまで疑はるゝ程のいまの零落。若し渠に夫を懷ひ子を愛するといふ一片の情がその胸になかつたなら、お民のやうな富家で氣樂に育つた身で、なんでこの裏店に住んで、味噌漉一つに一杯にならぬ日米を買ひ、金の指環をはめた事もあつたその手で、情ない箱はりが什麽して出來やう。身を粉にしても、夫の身持を直し、その頑是ない子にも相應の教育をして世に出だし、又世に出でたいと思へばこ

そ、かゝる生計も忍ぶなれ、今のお民の身は、わがものといはんよりは、我夫わが子のもの、わが夫さへ我子さへ、天晴立派な男となつて、世に立つてくるゝならば、高が知れた女一人のこの身位、火に入らうと水に投らうと、苦にやむ程の事もないと思ふ強健な心底。渠がこれまで懐ふその夫は木か石か、情けなくも露ほども妻の心を汲まで、内を外にして遊びあるき、それも物が足りての事なれば、妻の身としてはよもや忍ばれぬ程の事でもあるまじけれど、食うやくはずのその日ぐらし、二錢三錢の内職で、細い煙さへ立兼ぬるに、やせても男一人の根かぎりの働き賃に不足して、前借までを入れての遊蕩とはなんの因果か、お民は所詮一人で苦勞しても、この分にてはとても、夫の身持を直さん見込もなければ、何んとか一つ思案をせにやあなるまいと、獨りで心を痛めて居つたのは或日の夕ぐれであつた。

其翌日は日曜日で、賴三の出て居る工場も休みなれば、賴三は二三の職工同志で、午後より何れにか遊びに出る樣子。お民は連がよくないので、遊び先きも大方察せらるれど、此方も今は職工の身の上、苟めにも仲間朋輩なれば、客の前では苦き顏をば爪ほども表はさず、紙ばりの行李の中より赤縞二子の袷衣と、千筋の同じ二子の羽織とを出し、かひがひしく貧乏相應の仕度をさせて、夫を出してやつての後は、又も同じ氣苦勞をしながら寸燐の箱はり。

賴三は其夜一泊して、翌朝歸り途で朝湯に入り、其から工場の事務所に缺勤屆の端書を投じて、家に歸つたのは八時頃であつた。家内に入つて觀ると、火鉢の鐵瓶には湯がかすかにたぎりて其側に膳が仕度してあつて、まだ朝飯の前らしいが、お民は何か買物にでも行つたか留守である。賴三は火の側に間がわるさうに坐つて、膳の上を見ると、今朝にかぎりて、膳の上には自分の爲の仕度ばかりしてあるので、もうお民は朝飯を終つたのだと思つたが、今にお民が歸つてから箸を取うとして其歸りを待つて居つた。

やがて二十分程も過ぎると近所の十二三になるおりきと云ふ兒が一郎を負ふて内に來たので、お民の事を尋ねると、今朝一郎をかれに頼んで用達に行つたとの事。

お民はどんな用事があつても、小兒を他人頼みにして出て行くやうな不注意な婦人でないから、賴三も不審だと思つたが、それとも何か是非なき用事が出來て一郎を頼んで行つたのであらうと思つて、一郎を膝の上に取れば、悶れて元氣のよくないのは腹が饑つて居るらしい。今にかあちやんが歸つてくるからと云つて、賺かしても容易にだまらんので、それならまんまをあげやうかと膳を引寄せて、一郎に御飯をやり自分も朝飯を喫してお民の歸りを待つて居つた。

かれこれして晝時分まで、一郎の守りをしながらお民の歸りを待つて居つたが、戸の口より郵便と言つて投げ込むやうに置いて行つた封書を見れば、差出人は今に歸るかと待に待つて居るお民であるから、什麽したのであらうと不審ながら、封を切つて讀み下だせば、

「ヽヽヽヽ由比家の親戚に對し候ても、又由比家の相續人たるべき頑是なき一郎に對し候ても、不肖なる妾が夫に盡すべき道を盡さゞるより、遂に由比家を亡して、非人も同樣なる境遇に陷れたりとのそしりは免れがたく候、妾が由比家に嫁ぎ候てより、はや七年に近き歳月を過し候得共、その間の事を思ひ廻せば、皆何事も妾の不肖なるより、はては御前樣の御身持までも、言の葉につくせぬおんありさまに相なられ候は、誠に申わけもなき妾の罪業に候、妾は何事も妾一心の不肖より出でたる事とあきらめ居り候ゆゑ、今日までどのやうなるうき苦勞を致し候ても、御前樣を御うらみ申すやうなる事ゆめにもこれなく、つねぐ\我身のみを責め自らくるしみ居り候、今までの如くこの不肖なる身にて永く御前樣にそひまゐらせ候ては、却りて御前樣のためにも、また一郎のためにもならぬ事と思はれ候まゝ、こ

のまゝ身の御いとまをいたゞき、妾は兎も角もこの身を相立て可申、何事も御前様の御改心御出世のほどのみくれ〴〵も念じ上まゐらせ候ゝゝ一郎の事はおひ〴〵寒さにも向き候まゝ時候のさはりもなきやう御いとひの程くれ〴〵も念じ上まゐらせ候……』

頼三はこの書面を讀み終りて、更に封筒の消印に目をつくれば、日附は今日の『ろ』便で京橋とある。頼三は平常女子のやうなやさしい性質で、又幾分か心の小さい方であるから、この書面を讀んで非常に驚き、殆んど途方にくれたやうすである。これが氣質の惡い男なら『あの阿魔め今に見ろ』と云ふ刄物三昧にもなりかねぬやうな事なれど、頼三においては實に木からおちた猿か、水をはなれた魚のやうなありさまでお民の逃亡にたゞ甚く驚いたばかりで、早急には何の考へも起らぬ。たゞかれの心には『お民は何處へ逃げて行つたのであらう』と疑念のみが幾度か去來して其事ばかりを考へて居つたが、自分の考へでは、お民が逃げて行つても身を寄せるやうな家は什麼しても思ひ當らぬ。昔時の事を思ふと、十日や二十日位世話になれる家は幾程もあれど、お民の氣質として、今頃それらの人を頼りて、行くやうな事は決してしない、又お民の身内のものがあつても、渠は決して夫と小兒とを棄てゝ身内の者に身を寄せるやうな婦人でない。頼三はどのやうに考へても、その行く先きがわからぬ。さればとて絶交同様の親戚の所に、妾が參りませぬかと云つて尋ねて行かるゝ義理でもなし。廣くもない家の中の、箱や行李を見ても、衣類などはお民の分まで其まゝになつて居る。たゞ見えぬものは二三枚の櫛と梳油を入れてあつた小箱と、古蝙蝠傘一本きりである。

自分の不身持で妻に出て行かれたと思ふと、頼三は何となく世間に顔向けも出來ぬ心地がする。彼は近所合壁の人にお民の事を問はれたら何といはふ、一郎はこれから什麼して養育てやう、明日は工場の方をど

うしやう、など〻これらを若勞に其日を暮らした。燈火を點る時分になると、一郎は頻りと憤りて外の方を指しするは、大方母親を慕ふのであらうと思ふと、其心が不愍でならぬ。戸外に燈火がついた、今にかあちやんが歸るよと云ひながら戸口を出ると、向ふ長屋の飾り屋の内儀の背姿が見えたので、一郎は其を指してかあちやんに行くと云つて泣き立てる。かあちやんは彼處だと云つても、いつかな聞き入れぬ。かれこれして居る中一郎も泣きつかれて、その儘賴三に懷かれて寢入つてしまつた。

賴三は平常の身持がその通りで、身代の善かつた時分から、今の身の上になつても、家に居る事は多くなかつた、從つて子供を自分で守りをするやうな事などは夢にもなかつた。一郎は三歳になるこの年まで、獨りで生育つたやうに思つて居るので、一郎をこれまでするには、お民がどれほど世話がやけたか那麼ことは更に氣もつかなかつた。今日までは獨りで生育つた樣に思つたその一郎を、たゞの一日手にかけて見ると、『守りほどつらい者はない』――まして今夜から暖き懷で乳をやる者がない子ぢやと思ふと、この頑是ない一郎が可愛さうでならぬ。

其夜は常よりも尙冷きやうな心地がする、薄蒲團を敷いて、一郎を懷にして床についたが中々寢むられぬで、又小洋燈に火を點して種々の事を考へて居ると、ねむけがさす故洋燈をけすと又目が澄える。かれはねむられぬまゝ目をつぶつて、既往の事を想ふと、その暗の中に一點の曇りもなく澄渡つて居るかれの心はかれが既往の事を瞭然寫出して、宛然目の前に觀るやうな心地がする。暗夜は惡を生ませる母ならば、又確かにその惡を認めしむる照魔鏡である。四隣寂として萬籟の寢むるといふ眞夜中、世界は暫時、暗の裡に沒せられ、目に入る一物もなければ、賴三の心は暫く耳目の世界を離れて、自身一代の歷史を讀むやうに、觀念は、觀念の道筋を走つて、賴三の心を思ふがまゝに運轉させ、その夜にかぎりて賴三が物を思ふ

のでなく、頼三が物を思せられたのである。自分が幼少の時の事から今日までの事を想ふと、自分はいかにもなさけない男である。三四年前の由比家はどれほど全盛な家であつたか、自分の父はどれほどの財産を我に遺したが、自分は會社にどれほど信用を得て、商業社會に運動したか、何故自分は巨萬の財産を蕩盡し剩へ名譽を傷け信用を失つてこの九尺二間住居のあさましい職工の身となつたか、なぜ自分は曾て自分の家に置いた車夫にも着せた事のなかつたやうにこの薄い蒲團に身を包むやうな生涯になつたか、なぜお民は我れとこの子を振捨てゝ逃げたか、今日のけふまで自分のした事を懷想すると、お民が我をふり捨てゝ出て行つても、決してお民の薄情ではない。お民に對する我はどのやうに薄情で、かれをどれほど泣せたか、お民が今日までこの放蕩者の妻となり、この裏長屋住居の赤貧を忍耐したのは、どれ程の苦勞、どれほどの難義であつたか、お民が富家の長女で、あれほど氣樂に育つた身を、これまで冷落して寸燐の箱張りまでをして我に盡したか、どれほどの親切であつたか、お民が今まで自分の樣な者につれそうて居つてくれたは却つて不思議なほどで、今一郎を自分につけて出てゆかれても、お民に對しては露ほどの恨もない、たゞこの惡くもない一郎を、ふり捨てゝこの放蕩者の我と共に艱難をさせやうとする其心のみがいかにもうらめしい。お民が自分を捨てゝゆいたは少しも恨まぬ、今までの事を思ふと、それが尤も至極である。然しこの一郎は、お民に對して何の恨みがあらう、又あれほどの子煩惱が、什麼してこの子を手ばなされたらう、妻に捨てられたこの身は、これからどれほどの艱難をするも、少しも苦勞とは思はぬ、たゞ無心のこの子が、三歳で生みの母親にふり捨てられて、唉き母のふところを知らずに、この冷かな男の手に育つかと思ふと、それが可愛さうでならぬ。この子に斯のやうな苦勞をさするも、そのもとゝ云へば、皆この身の作つた罪の報い。もしやこの子に物覺えがあらば．どれほど我を恨むであらう、心があつ

て恨んでくるゝなら何忍ばるゝが、この無心でこの頑是ない可愛らしい身體で、この罪ふかい父の懷に安すや〳〵と眠むる、その罪のない心を思ふと、この胸が張りさけるやうに悲しい。一郎さぞかあちやんが居らんで寥しからう寒からう、皆この父親がわるかつたので、そなたにもこの艱難をさするのじや、免してくれ。この放蕩者の我が身を、この罪のない子供と比ぶると、尚更この身の罪が申しい、この五尺の男がこの子に對して心恥しい、申譯がない、面目がない、と思ふは何故であらう、只この身のなせる罪である。我身が立派な由比賴三であつたら、お民にもあれほどまでの苦勞はさせまい、又、一郎にもこんな饑餓道に迫らするやうな事もなかつたであらう。思ひ續くると愚痴をこぼすやうなれど、もし三四年前の由比家であつたら、一郎にもなんでこんな身窄しい扮裝をさせやう、なんでこんな澁い硬い冷い蒲團にねかせやう。思へば身の迷ひ心の狂ひ、あゝこれが一生の誤りである。お民はどれほど我に異見をしてくれたか、知己の人々も何れほど我がために心配をしてくれたか。お民に心配苦勞を重ねさせて、別人のやうにやせさせたのも、誰の罪であらう、我れながらわが身の罪が怖しい。あゝ苦しい、什麼して今更お民にわびやう、どうして世間に申譯をしやうと、賴三は幾度も同じやうな事を想ふて煩悶すると、益々眠むられぬ、眠らずに物を考へつめると、全身の血は頭に上つて、足の爪先の方が、次第に冷くなつて、そのまゝ死ぬやうな心地がする一郎が時々もじ〳〵して自分の胸をさぐるのは、大方母のそひねと思つて、乳房をさぐるのであらう。豆ランプに火を點して、煙草をのみながら、一郎のねがほを見ると、何を夢みたのか可愛い顏で莞爾り笑ふ。夢にさへ笑ふほどの淸き心の、子のねがほを見て居る賴三は、何を思つたか一滴の熱涙をそゝいで、ランプの火を消したが、拂曉ごろにねるとはなしにいくらか眠むつた。

其翌日も工場にも出ですに、一郎をからげて其日を送り、其前夜のやうに、殆んど眠らずに物を考へたが

今となつての後悔は只心を苦しむるばかりで、賴三のためには、前途に對する希望とては更にない。さなきだに心のせまいやさしい彼の心は、糸のやうにかき亂れて殆んど男にはあるまじき程の心配をした。然るにお民は、日曜日の朝に一郎を近所の兒に賴んで家出したが、素より何處に行かうとするあてもない。その日からでも桂庵の手で奉公でもする考へであつたが、おもはしい口もなかつたので一二日桂庵の二階に厄介になつた。家を出る前のお民の決心と、その考へは、中々立派に筋道の立つた考のやうであつたが、桂庵の二階にひそんで種々考へて見ると、始めの決心始めの考は何處に消えたか、今は賴三がさぞ困つて居るであらう、一郎はさぞさみしがつて居るであらう、朝はどうしたらう、夜分にもさぞ泣いてじれて居るであらうと、その事のみを案じて居る。

お民の考へでは、賴三の身持を直さうと、今まで種々の必配をしたれど、中々本心に歸りさうもないのでもし一年か二年の間も自分が去つて、賴三に一郎をつけて、艱難に艱難をさせたら、元の賴三に立歸るであらう、其間は自分はどれほどの苦勞をしてもかまはぬから、賴三の品行が直つてくれゝばよいと思ふ一片の考へで家出したのである。

然しお民は家を出る前にも、一郎が可愛さうだと思ふ心から、これを斷行するまでは隨分苦心した。然し賴三の品行を直すのが妻たる者の本分であるから、什麼してこれを直さなければならぬと思ふ理屈一片の心は、遂に一郎が可愛さうだ賴三が困るであらうと思ふ人情を打消したのである。元來お民は當節風の教育を充分うけた女であるから、理屈にかけると中々強い方で、今も倘世間は何事も理屈通りになるやうに考へて居るので、今度の事なども、つまり理屈一片で考へて、心の情を道理の力で押込め、可愛さうとばかり思つて居つては何も出來ね、事をするには情を制しなければならないのは當然であると、見事な決心

をした積りである。

自分の良人と愛子とに對する愛情は、一時理屈のために心面より退去られたれど、良人を離れ子を捨てゝ後のお民の心には、その人情も、今は烈火のやうに燃立つてお民のせまい胸を刺すやうに、又切り劑くやうに苦しめた。お民が二三日立つて芝邊の瀬川子爵の中働に行くときまつた當夜、彼はよそながら一度わが家の樣子を窺はんとて、わが家の門口に行いて見ると『貸家』と書いた細い紙が、おぼつかなく横さまに張れてある。お民は一度は驚いたが、其處に何時まで立つて居つても仕方がないから、それとなしに角の油屋で由比の轉宅先きを尋ねると、轉居先きを元の差配にも知らせなかつたと云ふ。この夜からお民の心配は又一通りでなかつたが、彼は其翌日瀬川家の中働きに住込んだ。

お民は氣質のはき〳〵した、容貌のよい、物に折り入つて居る、又苦勞をした身であるから、その應對言語と云ひ動作と云ひ、決して、通例の奉公人のやうでない。また日數も立たぬ中から、奥方の寵愛を得て御出かけの御供は何時もお民ばかりで、衣類なども奥方の注意で御若い時分の御下りを頂戴するので、奥方と車を並べて出て行く時のやうすなどは、とても女中風情とは見られぬ容姿で、知らぬ者は義理ある御親戚だらうと云ふ評判をして居る。

然しお民の心になつて見ると、その御殿奉公の榮華は、決して氣樂安心ではない。お民が奥方の寵愛を得て身が豊かに樂になれば、かれの心はその度ごとに却て苦るしむのである。彼の身は瀬川家の御殿にあるも、心は何時も良人と愛子とを離れぬ。彼が想像する今の良人と愛子との生涯は非人同樣の暮しであらうと思ふので、自分も其心になつて居るので、身はどれほどの樂をしても、心は少しも其を樂しく思はぬ。

お民は常に鬱々として居るで、奥方までがそれを心にかけられて、潜かに其を尋ねられた事もあつた。又夜分になるとお民が御部屋で獨りで泣て居ると云ふことが女中仲間にも知れて、何か仔細あるだらうと家中でのとりざた、渠は夜半分は大底一郎と良人の事を思ふて泣てくらすのである。渠は時として厚い蒲團の上に寢るのが、一郎と良人に對してすまぬと思つて、敷蒲團をかいぬけて、上敷一枚の上に寢た事もある。又奥方の供をして外に行つた時、見事な乾菓子を頂戴したのを、一郎に對する陰膳のかはりに、紙にのせて文庫の上に供へた事もある。

頼三はお民の想像するよりも一層艱難をして居るので、もし頼三の今の身の有様をお民に知らせたなら、お民は確かに狂亂するであらう。頼三は獨身に小兒をからげては、とても今までの職工もしがたいので、元の長屋を轉じて小商ひを始めたが、それも日中は人目をかぬるので、夜分に一郎を負つて薄暗い提燈をさげて辻うらを賣つてあるくのである。時節はおい／＼寒さに向いて、風のある夜分の寒さなどは中々ひどい。頼三はこの寒さに袷一枚に一郎を負つて、踵のすりきれた草履をはき燻ぼけた手拭を茶巾にかぶつて目をかくし、背中の一郎と問はず談りをしながら辻うらをふれて行くのが、いかにも可愛さうである。一郎がさむからうと思つて、頼三は一枚のよごれ赤毛布を着たが、其れも名ばかりの毛布で、毛はすりきれて、縦横の糸ばかりで、やつと帶の所までくるやうなむさくるしいのである。毎夜一郎には、或る横町の芋屋でおいもを買つてやる事にきめて置くので、其横町に行くと一郎が背中で元氣づくのが頼三にとりては何れほど意地らしいか知れぬ。

或る晩も例の通りその横町に行いたが、其夜は折あしく、芋が賣れ切れて、なかつたので、芋のかはりに辻うら一つを一郎にやつた。一郎は脊中のやぶれ毛布の間から可愛らしい手を延て辻うらせんべいを口に

入れたが、中に辻うらの紙があつたので其を出して、とらせたから、頼三はあゝ紙があつたかと微笑ながゝ其を取りて、その辻うら提灯の火にかざして讀むと『みんなむくいだよ』と云ふ辻うらであつた。頼三は寸鐵で胸を刺されたやうに感じて、物のわからぬ一郎に向ひ、『一ちやんほんにさうだよ』、と言ひながら袖で目をふき、無量の感慨はその聲の辻うらとふれる聲さへわなゝきふるはせた。

頼三の辛苦は一通りの辛苦でなけれど、これは今までの罪の贖ひ、又一つにはお民に對する申譯じやと思ふ一念が強く張つて居るので、何事もあきらめて、苦を苦ともせぬやうすだが、たゞ罪も科もない一郎はこのうきめをさせるをいかにも苦るしく思つて居る。かれはどれほどの艱難を凌いでも、この一郎一人を人にして、お民に廻り合はせてやりたいと云ふのが、一つの望であつたから自分の食ふものもくはずに一郎にやるので、頼三の瘦せ衰へ居るに似げなく、一郎はまる〳〵と太つて、



とても木賃宿生育の子とは思はれぬほどである。賴三の今の身は、たゞこの一郎をこのやうに丈夫に育てゝ、自分が死んで後にお民にも一郎にもうらまれさへしなければ、其がせめてもの願いで外に望も樂みもない身である。



お民が瀨川家の奥方に身の上を問はるゝ事が度々あつたが、始めの程は何も心配のある身ではござりませぬとよきやうに言つて居つた。然るにその年の暮に一郎の誕生日の事であつたが、お民はその日少々ばかりの菓子を買ひ求めて女中仲間に御馳走したのは大方一郎の誕生の心ばかりの祝ひをして、一郎の生ひ立を祈つたのであらう。其夜お民は部屋に閉籠つて、瞼がはるゝまで泣き悲んで居つたのがはしなくも奥方の目に留り、仔細を心切に尋ねられたので、身の上を泣きながら御話すると、奥方も幾度か目をふきながら、事の始末を聞かれ、深くお民を慰めて出てゆかれた。

奥方は、其夜寢物語に、お民の話を御前に申上ぐると、瀨川の主人は殊の外驚かれ、由比家と云へば、我父御の親友で、一方ならぬ世話になつた一家の事、我が耳に入つた上は、そのまゝにして置くわけにもゆかざれば、什麽か取計らはねばなるまいとて、其翌日お民を御前にめされて、種々の御相談があつた。結極賴三の在所を探ね

て、瀬川の主人が夫婦の中に入つて、再び一所にする事と定まり、頼三の住居は警視廳の知人に依頼して早速探し出して、頼三は一先づ瀬川の親戚に預けられた。

本心に立歸つた頼三は、素より放蕩者の頼三とは全く別人のやうに生れ變つたのであるから、瀬川子爵も殊の外頼もしく思はれ、頼三とお民は、又もとの平和なる由比の一家をなして、頼三は瀬川子爵の取立で某會社の役員となり、一郎が再び暖き母親の懐に眠むるを得たは、父親が放蕩の悔悟と母親の不人情の悔悟が、別人のやうに父母の心を造つた賜ものであつた。

奇遇

陫槳女史

あれ、お猿をおんぶして、まア可愛らしいお猿だこと、御母樣御覧あそばせ、御父樣も早く〳〵と呼立つるは、今年六歳にも成りたらんか、切禿の女の子、藤色地の幽禪の被布を着て、下には紫の矢飛白の袷、手には空氣毬を持ちたり、

處は函根塔の澤の鈴木の表二階、今しも玉緒橋を渡りて此方へ來らんとする猿曳を見て、斯く呼びたるなり、なんだねえ、まア大きな聲で………何處に猿が居るのだえ、と云ひながら立出たるは、これが母なる人にや、二十七八の上品なる夫人なり、障子の中より聲して、猿に浮かれて上から毬を落すな、と言ふは大方父なる人にやあらん、猿曳の男は年既に老いたり、猿はまだ稚し、老猿曳は破れて音の惡き太鼓をたゝきながら、とぼ〳〵として歩を運びぬ、小猿は脊の上にて彼の鋲釘の如き眼を輝かしぬ、

あれ〳〵可愛らしいお猿、御母樣、あれを呼んで頂戴、ねえ御母樣、呼んで頂戴よ、御猿を舞はして見せ

て頂戴と、彼の過ぎ行かん事を恐れて早言に母に願ひぬ、つれ〴〵は湯治場の常なり、母は諾して猿曳を呼びぬ、唯々として猿曳は留りぬ、扨て小猿を脊より下して、綱を片手に曳きつ、片手に破れ太皷たゝきつ、しわがれたる聲して唄出しぬ、されども如何に仕たりけむ、小猿は舞はざりき、

太皷の手を止めて、コリや太夫、如何したものぢや、何故藝當を御覽に入れぬのじや、しツかりと〳〵、されども小猿は虚呂々々として彼の目を恐ろしく瞬きしつ、頬をふくらし、歯をむきいだし、意味有氣に上の方を見入りたるのみ、尚舞ざりき、

猿曳は怒りて鞭打ちぬ、小猿はキヤ〳〵と鳴きつ、扨ておぼつかなくも舞出しぬ、其内忽ち立留りて又上の方を見始めたり、えい、脇目しては埒がアレる、と太皷の棒にて酷に鞭ちぬ、鞭れては舞ひ、止めては鞭れ、漸くにして一曲を終りければ、母なる人は白紙に小錢を捻りて、娘の手に渡しつ、お前からお猿へ授けて御遣り、と言ひぬ、娘は其紙包を受取りて、地上に投げんとし、却つて片手の毬を落しぬ、

猿曳は氣轉顔にて、小猿に其毬を拾はせ、手に捧げさして柱より登らしめ、彼の二階の人に渡さしめたり瞬一瞬、小猿は叫びぬ、娘も叫びぬ、猿曳は驚きて面上土の如し、周章てゝ力一杯綱を手繰れば、べりべりと言ひて裂ける衣の音す、二階より落ちたる小猿の手には幽禪の被布の片袖あり、

此異變の物音聽付けて、障子を蹴飛して立出でたるは娘の父なるべし、大喝、猿曳との一聲、此方は縮み上りて、身を震はせ、猿を抱きながら地上に坐し、低頭して其罪を謝しぬ、上には娘を抱きて母親は只立てり、あまりの驚きに言葉は出でず、下には早や跳出でたる店の若者、あはれなる猿曳を捕へて、打擲を加へぬ、父親は益々怒聲荒く、これ、猿曳、和主の不注意は何事だ、大事の娘に疵が付いて居たら、其儘にはゆるさぬぞ、

此聲にいよ〳〵低頭して、額を砂の中に磨込み〳〵御免なされ〳〵、と繰返して言ひぬ、

幸にして怪我のなかりし事を母親の見出して、これも不意に驚きて泣止まぬ娘の被布を示しつ、疵が付きましたのは此被布でした、其他は無事で御座います、今一手遲かつたら被布ばかりではすむまい、危いこと〳〵、と父は言ひつ尙打据ゑむとする下の若者を制し、もう好いわ、ゆるして遣れ、と留めぬ、猿曳は此上の痛き目を逃れて、不圖首を持上ぐる時、上なる人と顏見合せ、ヤ、ヤ、貴郎は……おう其方は……、麴町の旦那樣か、筑波の爺か

常州筑波山の奥に分入りたる獵好きの紳士は、一頭の女猿を擊殺し、一頭の小猿を生捕りぬ、されどもあまり其猿の不憫さに、敎導として連れて行きたる土地の獵師に其小猿を托してそだてしめぬ、年は過ぎたり、其の紳士は此所に今ゐる娘の父にして、獵師は此の猿曳の老爺なり、彼の時の小猿は則ちこれなり、

奇遇は酒宴となり、扨て猿曳は少からぬ祝儀を得、小猿は片袖の破れたる美しき被布を得て、共に倶に喜びつ、又彼の太鼓の音立て、宮の下へとのぼり行きける、

○淸國の早婚禁止令　北京朝廷は考政大臣等伏奏の結果、近日早婚禁止令を發布する由なるが、從來淸國人は總て男子十四五歲女子十三四歲にして結婚するもの多きより、今回男女共に二十歲以上に達せざれば、結婚を許さゞることゝなし、犯すものは其父兄を處罰するの法律を制定せんと、目下內儀中なるが、右は獨り考政大臣のみならず、政治館提調實も封奏したる由にて、不日法律として顯はるゝに至らんといへり、

懸賞小說　貳等

人ごころ

上

東京　内田ちか子

木暮武一といふ青年、一日學校から歸つて、母の前へ行き、平常のやうに『只今歸りました』と挨拶したが、二十一であつても、母の前では、八つか、九つの小兒の様である、武一は此時母の傍に、靜かにしとやかに坐つて居る一少女を見た、彼は誰であるか、母の知れる人か、但しは姉の學校朋友か、それにしては餘り衣服の質素過ぎる、はて何であらう、疑問は母が解いた、

『此子はお梅の代りに今日から來られるのだよ』此の一言で武一は、彼が二三日前に母が病氣だからとて里へ歸つたお梅といふ小間使のかはりに來たと云ふのが分つた『此子はね、お花さんといふので、お梅より年も行かないのだから、荒い事など云つては不可よ』

お花は恥かしそうに、武一に初對面の挨拶も、時々言葉が途切れ、總體から云へば、調子が至極低い、此が世なれぬ證據と思へば、何となく可愛く、ふびんに思はれる。

今日は來たばかりであつて家の様子も分らず、たゞ間の惡そうに、母の傍に坐て、下向いて物も言はず動きもせず、人形をかざつてあるやうな有様。武一は母に向つて今日あつた、色々の事など話し、話のとぎれる時、母が煙草を吸ふ間に、一寸お花の顔を見る、是は『何んな人であらう』と云ふ問題が心の内にあるからである。

お花は色白く鼻筋通り、目は黒みがちであつて、口元は如何にも、愛嬌が有る、衣服は隣りのお嬢さん

のやうな花美でなく、髮は束髮で油の香が無い、人に依つてはすかれる、約言すれば里へ歸つたお梅よりは、余程人からが好く、若し此子をして綺羅を飾つて侍女に侍づかせたら、天晴お孃さまと、云つても恥かしくはない、併し其性質がお梅のやうに優しい、姉樣のやうに慈悲深いか、多分さうであらう、お梅よりも優しいであらう、其外貌が其性質を證する。

こんな事を思つてをる内に、時計は四時を示した、勝手の方でガタ〳〵するのは、おさんが夕食の用意であらう。

武一は母の居間を去つて、自分の部屋の机にすわつて書を讀み、青年には稀なる勉强家で『その樣に勉强しては、御病氣が出ます』と昔から出入する藪醫の竹庵が云ふた位、但し當人は若いから大丈夫だと云つて、少しも苦にしない。

されば少年に似合ぬ博識家で在る、己の才に誇らぬは此人の德で、人が武一樣々々と尊敬するも、此が

爲である、日も暮れかゝつた時分、武一は窓の障子を開けて庭の景色を眺めて居た。

向ふの籬に凋れてある朝顏は、如何に哀れな物であらう、奇麗な露の惠の下に、うつくしの花を咲かせて、嗚呼美しいと言はせるも、唯一時の事、朝日がさせば枯れ初めて、夕には早や此の樣である、世には此に似た者も有らう『若樣御膳が出來まして御座います』優しい聲に武一はふりかへつて見れば、お花が手をついて行儀正しく言つたのである、お花は今武一に見返へられて、するとはなしに下向いた。

木暮武一の家には、其母と姉と小間使のお花とおさん合せて六人である、

武一の父は新聞記者で大坂に居る。姉は女學校を卒業して、今年廿二であるが、未だ何處へも行かぬは世に所謂緣が遠いと言ふものか、但し人品は如何にも立派である、一人の妹はあつたが、二年前草葉の蔭の者と成つたので、母と姉と武一と、時々生前の話をして涙を流した、此後も又流すのである。殊に

武一はするどい神經家であるから、物事に感ずるのが人より強く、時々妹の事を思つて、獨り涙にくれる事がある、哲學とかいふ、むつかしい學問をする人も、脆いは情である情は人を捕へて自由に動かす一大魔力、博學の武一も妹の爲には涙の人で有つた。武一の母は優しうて慈悲深い性質、姉も母に似た生れつき、お三まで形こそ醜けれ心はうつくしい者、こんな家に使はるゝお花は幸ひであるけれども家慣れぬ内は時々悲しう思つて、涙を襦袢の袖にぬぐう事もあつた。

併し此は少時の間の事、慣れるに從つて、母や姉や武一が優しう言つて呉れるにつけ、小兒心に嬉しく勤まるなら長く此家にとの願も起つた。



或夜の事、雨は窓の戸を打つて淋しい事は限りない武一の母は新聞も讀み飽き、姉はお針をして居る。武一は朋友の所へ遊びに行つて未だ歸らず、お花は淋しそうに俯向いて、唯奥様の御用を待つて居る。「お花淋しからう」優しく奥様が言はれた「武一の部屋に面白い本があるから取つて來て。御讀みよ」これも優しい姉さんがつけ加へた。めし使はるゝお花の身に取りては、これ計りの言葉も非常の感動を與へる。もしお花の母が今尚此世にある

ならば、此んな優しい言葉は母よりも聞く事も出來るだらう。併し三年前に母様に別れて、伯父さん處の世話になる身となつてから、罵聲ばかり耳に聞えて、優しい言葉は庭の黄鳥の鳴くより他に知らなかつたに、今御主人から斯様に言はれ、骨身に染み渡り、うれし涙も出るばかりである。扨てはお花は薄命の身であつたか。奥様が優しい言葉にあまへて、本を讀むも餘り勝手がましく、躊躇し、遠慮してをる。姉様はお針を止めて、自分から武一の部屋へ行き、小説本五六冊持て來た。

お花はおそろしい程嬉しく、一冊の本を開いてすこし讀みかけた。是れは哀れな小女の薄命をうつした小説、お花は此の小女の身の上が自分に似て居るを思ひ、身の過ごし方を考へ、又此の末を何うならう抔、ふと思ひつゝけ、うら悲しくなつて來て、うかむ涙に文字も見えぬ様になつた。

「おやおッかさん、お花が斯うしてゐる姿は、妹のおまさによく似て居ますネ」「オヽ左うだネ、あゝ好く似てる、不意の言葉に、お花は思ひ事を破られて見上げた。あら恥かしや涙を見られたか。

「おやお花お前泣いてをるのでないか」「何か悲しい事があるの」お花は聲細く「ハイ……この話が、あまり哀れなのでつい泣きました」優しい心は母子の好む所、お花はこんなやさしい子で有つたかと、一入お花を可愛がる緣となつた「お花茶を入れて御呉れ」お花は茶棚より茶盆を取り下ろし、九谷燒の急須に茶を入れ、湯をさして、小さな茶碗にうつす様靜かで可愛らしい「お花、此戸棚の中に御菓子が有るから、此處へ出して御前も御食りよ」「ハイ有難う御座います」

お花は只茶を飲んだ計りで、菓子は取らなかつた。姉は其白い手をのばして、菓子を三ッ四ッ取つてお花にくれて。お花は此菓子より母の事を思つた、嬉しいやら、悲しいやら、心は様々である。そりから武一は歸つて來た。「おや、お三は何うした」「燈火は私が持つて行きます」お花は燈火を持つて玄關の方

へ行つた。

下

もはや十時もすぎた頃、お花は自分の部屋に來て暖き布團にくるまつて寢た、床へ入つても色々な事が心に浮び出で、中々寢られぬ、妾の身の上を考へて見れば、不幸の樣な幸の樣な、矢張不幸なのである。父樣は御維新の時戰爭で亡くなられ、後は長々母樣の世話になつて、其の御恩も報いぬ内に悲しいお別れ、兄弟でも有れば慰めるすべも有る物を、唯妾一人、此廣い世の中に賴みとする者は一人もない母樣がなくなられてからは、伯父樣の世話になつたが、伯父樣は只よそよそしい方、それに伯母さんの御小言、下女迄に見下げらるゝ口惜しさ。

親の無い子とはこれ程つらい者かと人知れず幾回泣たか知れぬ、お出入の竹庵さんの御世話でお家に雇はるゝ樣になつたが、今の所では伯父樣の所に居るよりは餘程いゝ、伯父樣の家に居た時は、色々な用事があつて、遊ぶ暇抔は少しもなく、お花は馬鹿だとか、仕事がのろいとか、さん〱な小言をいはるゝも、厄介者なれば何と言ひ返す言葉もない、無理な事にも只ハイ〱と從はねばならぬ、妾がこんなに苦勞するのを、もしおッかさんが見たら、何んなにお泣きあそばすか抔思ふて、時々涙をこぼした事もある。今ではそんな苦勞もなく、水仕事や荒仕事はお三がして、妾の仕事といふのは、お部屋の拭き掃除と、其他少しばかりの用事、伯父さんの家に居た事と比ぶれば、遊んで居ると同じ事、それに奧さんや、お孃さんはいつも優しう言つて下され、武一樣も優しい方、旦那樣は如何な御人であるか、出來るなら長く勤めたい、若し奧樣に嫌はれたら如何せう、其時は妾は生きて居るまい、あゝ如何かして長く勤めたい。

お孃さまは今年廿二と申されしが、未だ御緣のないのか知らん、餘程學問の出來る御方らしい、併し伯父樣のお孃さんのやうに、生意氣でないから、慕はしく思はれる、妾も御母樣がおいでなら學校位行く

事が出來たであらう、一生物知らずで暮す程つまらぬ事はない、お孃樣の御暇の時、本でも教へて下さるまいか、優しい御嬢樣、きかれぬことはあるまい、夫にしても好い御緣が有れば好い、御孃さまも心細い事であらう、
心細いと云へば妾しの身の上、これからどうなる事であらう、年がいッても、妾のやうな者を相手にしてくれる者はあるまい、一生獨身で暮すとしやうかおや、ついつまらぬ事を思つて悲しくなつて來た。武一樣も男にはめづらしい程の優しい御方『お花此の机を一寸拭いてをくれ』妾が拭いた時に『有難う』と云はれました、召使に御禮とはあまり優しい御心御部屋に澤山本のある事、あれは皆御讀みなされたのか知らん、皆讀まれたのだらう、毎日讀んで御ゐでだもの、それに御母さんに孝行な事、妾もお母さんがあれば、あのやうな孝行がしたい、あゝ又悲しくなつて來た、せめて妾に彼の位の兄さんがあつたらどんなに樂しからう、アヽソレ〳〵武一樣の奧さまには、如何な御方が來るだらうか、何んなに樂しいであらうか、彼んな優しい御方んゝら奧樣を大切になさるだらう。
木暮家のお花は、慣るゝに從つて此家が慕はしく、家族も皆善い人であつた、只長く無事で勤めたいと云ふ願で、きらはれはしないかと云ふのが心配であつた。
少さな胸に色々の事を思ひ續けて眠られぬ間に、時計は十二時をうつた。
若し此少女が眠つたら、何んな夢を見るであらうか？
思へば哀れな者である

懸賞小說　選外　秀逸

不如意

長野　[illegible]谷巳子

一

歸國熙子は、うら淋しい想に沈みつゝ、我家の門に立つた。入らうとしては、歸り、歸つては蹈み出し、一步たゆたび、二步たゆた

ひ、恰も虎の尾を踏む様、断頭台に上るが様。彼は遂に決断の勇気を出して門をくゞつた。昔に變らぬ我家、戀しき吾家。常ならば直ぐにも飛びこまうものを、彼は何となく躊躇して、なづ／＼と歩を進るのである。飛石を傳ふ下駄の音に立出でたのは、下女のお時。『おら照様か。』おはたゞしく母屋へ走る。南天の葉は、もう黄ばんだのに、晩桔梗はまだ、一輪二輪名残をとめてゐる。目的は、病の爲に遂げられず、おめ／＼郷へ歸つた照子は、又も、深い冥想に沈んだ。そして恐ろしい、殘念しい、恥しい、悲しい様な思に、彼が幼き胸は立籠められた。

二

村で名高い勝間の家。照子を相手に談してゐるのは、繼母のお爲、傍に繼弟の邦治、傍に乳母のお澤が、控へてゐる。「照さん、では何かへ、女醫にとかは、なれないと云つて郷へ歸つたとお云ひかへ。それは病氣と云ふのならば、無理はないさ、併し餘り馬鹿／＼しい話ぢやないか。四年や五年の學資は此家では何ともなりますが、照さん。わざ／＼此繼母が辛く當るとでもいふ樣に、家を飛び出して、それも兎に角成功したと云ふなら、まだしもだが、只をめ／＼郷へ歸つたでは人目の笑いもんでもないぢやないか。ちつとは當方の推量もしてくれなくちや困るからね。邦治そう云ふもんだろう。」お爲は強く切り出した。『ほゝゝ眞實に、お母樣澄みません。』照子は漸く云つたぎり無言。『姉さんが、お繼母樣の不服なのを、家出なさつたのが、心得違ひさ。服部へ嫁きなされば、何の事はないのに兎かく親なし兒は、ねじけ易い者で。ハハア……』邦治は冷然と云ふた。『邦さん、免して下さい』照子は涙に暮れた。

三

何と云はれても、私がわるい。併しどうして私が服部へ嫁かれよう兩親がないとて、勝間の遺娘が、服部へ嫁つたと云つては、世間の顔が立たぬ。病さへなかつたなら、出來る丈の學問もしようものを。照子の胸は掻亂れた。

四

日影暗い部屋に獨り忍び泣に、泣いてゐるのは乳母のお澤である。『御孃樣、勝間家の獨娘と云へば誰人知らぬ人なき照子樣。あれが昔のお孃樣か？照樣か？美しいと襃まれた孃樣か？どうしてあのおやつれかたは。ほんとに、ほんとに、不運な方だ。

兩親さへ御在世なら、こんな憂目は、どうしてお見せ申さう。それにつけても、意氣地ないのは此乳母。

あゝ昔、奥さまの御亡りなさる其時『澤や、照は弱いから、氣になつてなりません、どうか乳母の御前が頼りだから…て、難有い仰せそれを胸に秘めあれば、旦那樣の御死後も、只辛い思を忍び／＼て今の奥さまや邦治樣には、陰になり日向になりしてお育て申したのが、照樣。照樣が、此乳母を、實の母とも思していらしたのでそれをせめての樂しみにしてゐたのに、服部樣の一件から、お孃樣は東京へお出になり、後は此澤一人。とくにお暇を頂く筈を、もしや照樣が御歸り遊ばす日もあらうと、それを一途の便りに、辛い炊事の務もいとはず、つとめてゐたのが。

五

甲斐あつてか今日、お時どんが。『お孃樣がけいらした』といふのに何かと出て見れば、まがひもない照子樣。落した玉を拾つた樣に喜んだ、その時はどんなにうれしかつたらうか。それも夢の間、病の爲にお歸りになつたのを、奥樣はお可愛相と思召すとは雲の相違。あゝ、照樣。ほんに不運な方だ。乳母は想に沈んでうなだれてしまふのである『澤や。』調子高に、お爲の聲が聞えいた。

六

その翌日、勝間の家に照子の姿は見えずになつた。彼は再び我家の門をくゞるであらうか。

（了）



樂燒物語

伯爵 柳原義光

先年信州上田の停車場を去る三里、別所といふ所に都の塵を避けたことがあつた、實に閑靜な、頭腦を養ふには至極よい、五十日ばかり逗留して居つたが伊香保、熱海など丶違うて、些の俗臭がない、その代りに名産といふやうなものもない、

併し二ケ月に近い滯在をしたのであるから、何が紀念といふ程の品でなくとも、土産の一品位はほしい物と、旅宿の主人にその事を語ると、主人は曰く、ツイ此近所の寺に、手びねりの燒物を拵へて居る人があります、外には不便の土地故何も是といふものがありませんから、それでも土産に成さつては、といふことである、

寺に手びねりの燒物、これは面白さうな行つて見やうと、敎へられた寺へ來て見ると、成る程手びねりの燒物をして居る人がある、破れた寺の、尾花の一本もあしらうて、夜景にでもすれば、北齋圖中に入るべきもので、物凄さうな、さてむさくろしき中に、餘念もなく燒物をして居る顔を見ると、背景に釣合ふ風采に似ず、名利の外に超然たる相貌にて、日は東から出で、西へ入ると極つたものと觀念したやうな態度、兎に角に生れてから斯うでもあるまい、身の上を聞くも、折にふれての一興と、其人の來歷を問うた、

すると、其人は生れは尾州名古屋の人で、水野浪越といひ、幼少の時出家となり、維新後還俗して、一度は妻帶もしたとの事であるが、後には元の獨身となり、根が風流氣のある所から、諸國遊歷と出掛けて廿七年、美濃路より信州に入つて、信州には緣深



御用 **體操器械**

ピンポン室内テニス

一號	一組	一、二二〇
二號	同	一、五〇〇
三號	同	一、六八〇
四號	同	一、八三〇
號外	同	〇、九六〇

其他各種御注文に應じ製造可仕候



確實 **製造販賣**

ピンポン改良室内テニス（旅行用）

一號	一組	二、〇三〇
二號	同	二、二三〇
三號	同	二、三五〇
四號	同	二、五一〇

同用テーブル上等一臺拾參圓四拾錢並等一臺十二圓





テニス用ラケット一組四本

一號大人用	一二、五〇〇
二號同	一一、〇〇〇
三號同	八、八〇〇
四號同	七、四〇〇
五號同	六、七〇〇
六號同	五、七〇〇
七號同	四、七〇〇
婦人用（小學用）	七、七〇〇
同二號（一號）	六圓

改良櫻二重枠ラケット一組

一號	拾參圓參拾錢
二號	拾壹圓七拾錢
三號	九圓五拾錢
四號	八圓貳拾錢
五號	七圓貳拾錢
六號	六圓貳拾錢
七號	五圓貳拾五錢

テニス組一張一、八八〇ヨリ三、一一五〇迄各種あり升

東京市神田裏神保町五 **安藤商店** 電話本局四百八十四

く、陶器の名產地に生れて、多少陶器の製法を見覺えたると、篆刻の素養があるので、更に信州上田にては内田石城といふ人に就て、燒物の事を學んだ所から、燒物に新工夫をなし、種々の樂燒を作り始めた、されど別所に居たのでは、氣の利いた上等品を作つても、賣品にならぬので、ほんの盃やうの物をつくつて、漸く其日の無事を樂しんで居るとのことである、

そこで自分は、これは珍らしい土產が見付つた、寧ろ其人ぐるみ、東京へ連れて歸りたいと、その事を水野老人に語ると、老人は折角のおぼしめしであるから、といふやうな事で、一人身の氣樂さ、話は早く纏よつて、同行歸京する事になつた、それは彼の草深き所で、あたら風流を雨露に朽ちしめるのは惜しいものとの考からである、

案の如く、老人なか〳〵風韻があつて、氣に向けば土をこねて見やうとなるが、さうでないと五日が十日でも乃至一ヶ月でも、何もせずしてツクチンとして居る、その代り土をこね始めると、それが骸骨、埴輪等の摸擬品から、遊印、肉池、香合、扁額、其他種々の美術品となる、ことに羅漢に妙を得て、五百の羅漢悉く格好が變るといふ手際、其形をつくるには、小刀一本と竹篦一本、大體は手でひねり上げるのであるが、實に手先の器用驚くばかりである、段々評判が高くなつて、そこ此處から、依賴があるが、今ではそれが拵へ切れぬ有樣である、もとより金さへ出せば拵へるといふのではない、殊に近頃は懇望されて餘儀なくといふ位であるから、猶々拵へさへすればよいといふ譯には行かぬ、なか〳〵趣向と手際を要するので、ます〳〵氣が向かねば出來ぬといふ事になる、

この樂燒は、シチリンにて炭火で燒くのであるから一通り燒方と藥のかけ樣を覺えて、手先の器用なもの、繪畫の素養があれば申分ない、婦人の職業中に入れてもよからうと思ふ、風雅な仕事であつて、昔から婦人に此名手があり、近くは蓮月尼の如き名物

の樂燒家も出たことである（記者聽書）

禮式と音樂

文學士　上谷天籟

吾人は婦人に對して注意を促さんとするもの二あり一は禮式、一は音樂なり、前者はなかるべからざるもの、後者は婦人の學びて最も適當なるものなり、この二者は近頃吾人の念頭にのぼりしものなり、固よりこの外に婦人の學ぶべきもの多々ありといへども、そは他日にゆづり、今先づこの二者につきて聊か所感を述べんと欲す、

禮は人間の交際を圓滑に保たしむるものにて、天下一日もこれなかるべからず、人間の交際場裡に禮なるものなからんには、秩序を亂し、紛擾を生じ、その害遂に底止する所を知らず、夫の、上下を別ち、長幼を正し、整然として亂れず、肅然として靜かなるもの、禮の存するが故にあらずや、相犯さず、相狠らず、盡すべきを盡し、受くべきをうけ、情うちに圓滿にして、行そとに端正なるは、禮の存するが故にあらずや、猥に怒らず、妄に悲しまず、事中正を脱せずして而も情その宜しきを得るは、禮の存するが故にあらずや、高智濃情も禮に合はざればうるはしからず、善意好義も禮に合はざれば人之を喜ばず、凡そ人間社會の秩序ありてうるはしきは、一に禮の存するに由るなり、詩に曰く『鼠を相るに禮あり、人として禮なからんや、人として禮なくんば、胡ぞ遄かに死せざる』と、夫れ禮の重んずべき實に斯の如きものあり、去れば古より聖賢は、禮を尊びて、之を思ふこと至りて切なり、起居禮に合はざるを恐れ、擧止禮に舛はんことを憂ふ、顏回嘗て孔子に向ひて克已の目を問ふ、孔子答へて曰く、『禮にあらずば視る勿れ、禮にあらずば聽く勿れ、禮にあらずば言ふ勿れ、禮にあらずば動く勿れ』と、何ぞ禮を視ることのそれ重きや、又嘗て之を聞く、古の聖賢は一牛を殺すに忍びざる心を以て尚王道の本と

なす、然も且つ羊を殺すに忍びて、告朔の禮を廢するに忍びざりきと、禮を尊び之を重んずる聖賢の心誠に至切なりといふべし、當世輕薄の紳士、果してこの心ありや否や、機根素養、固より天地の差ありて相較ぶべきにあらずと雖も、尚ほ人心の存するあらば、乞ふ猛省一番せよ、

夫れ禮の尊ぶべく且つ重ずべきことかくの如しと雖も、固と禮なるものは常形定式あるにあらず、時の古今によりてその形式に差あり、洋の東西によりてその形式に別あり、爾く古今東西によりて差別ありと雖も、その等しく禮なるに於ては則ち一也、思ふに禮なるもの、内心の尊敬を外形に顯すなり、故に古今情をことにし、東西俗を同うせざるを以て、かゝる外形の差別を生ずるなり、而も内心の尊敬に至りては、古今東西更に變りなきを以て、等しく禮たるを失はざるなり、されば禮に於て最も尊ぶべきはその心にあり、心に尊敬の意なくして唯外形にのみ之を顯はす、即ち虚禮なり、然れども、心に尊敬の意ありて之を外形に顯はさず、是れまた禮にあらず、要するに禮なるものは、心と形との二つより成る、苟もその一を失すれば即ち禮を缺くなり、心と形と、これ禮に於て缺くべからざる二大要素なり、さればこのうち一を缺かば、巳に禮たるを失ふ

秋七題



（其の七）　栗　柳

は勿論なれど、未だ之を缺かず唯一方に傾くに於てすら大なる弊風なしとせず、即ち心を尊びて形を重せざらんか、天下をして一大無禮講たらしめんか、その弊や無禮講よりも大なるものあらんとす夫れ徒に形式に拘泥して精神を忘るゝにいたらば、是れ死物のみ、去れば禮の形式に拘泥してその心を忘れんには、其結果は死物を生ずるや明なり、凡そ物には常に極端に走る傾向ありて中正を得ること難し、吾人は禮に於てもまた之を見る、

德川氏の政權を執るや、干戈を戢むること二百餘年の昇平をいたし、馬を華山の陽にかへし、牛を桃林の野に放ち、絕えて兵馬の倥偬たるを知らず、風俗華奢を競ひ、文物燦爛たり、時勢斯の如くなれば、この時に當りて壯事なる禮式作法の起らざるあらんや、宜なり、社會は窮屈なるまでに秩序そなはり、上下を通じて繁雜なる禮法の存するに至りしや、然れども遂に虛禮虛式の弊に陷り活人間の言語行爲をば、死法を以て縛し、虛僞を以て束ね、往々抱腹すべき狀を呈するに至れり、禮式てふ模型の中に人間自由の精神を拘束し、一擧手一投足皆これに從はしめ、其結果は人間心裡の多分を占むる熱切なる感情を正當に發露する道を絕ち、人間の行爲は活物の行爲にあらずして一種の繪畫を見るの感を懷かしむるに至れり、固と禮なるものは社會の秩序を保ち、相互の間に優美肅靜をいたさしむるを目的となすものなるに、斯の如く弊の極るに至りては、啻に其効なきのみならず、禮は心情の發露を拒ぐ堡塞となり、行爲の自由を厭する暴君となりたりといはざるべからず、是に於てか人は虛禮空式の爲にその心情精神を殺されたり、即ちかゝる虛禮空式に拘泥するものは死物たるを免れず、然るに時勢一轉して維新の改革となり、さしも盛なりし德川政府も一朝にして死解し、王政古に復し、泰西の文物沛然として輸入し四民は同權となり、舊式古格は廢止され、自由の空氣天地に充滿するに當りてや、今まで壓制暴抑の下に育ち、虛禮空式の桎梏に苦しめられし反動は、何

事に關せず在來の事物を破壞して顧みざること、恰も暴風一陣田野をあらすが如し、去れば、虚禮空式を廢すると同時に、知らず〳〵禮の尊ぶべく重ずべきを忘れて、遂に今日の如き狀態を來せり、これ人心反動の結果なれば止むを得ざることなりと雖も、心あるもの誰か嘆かざらむ、嗚呼今や禮の心と形と共になし、古の聖賢をして之を見しめなば、果して如何の言かある、吾人は、かの虚禮空式を排するに躊躇せずと雖も、現今の如き亂雜なる狀態の一大無禮講を默して看過する能はざるなり、

禮の重ずべきは勿論男女に限らず、しかも女子の禮を蔑にする者は、男子よりも尙一層見苦しき感なき能はず、夫れ女子は交際塲裡の花なり、温雅靜肅の容を以て人に接し、敬重優麗の言を以て客と對すれば、翠蛾丹臉、西施小町の美にあらずと雖も人を動かすに足り、長袖紅裙嬌艶の姿を粧はざるも人をして敬慕の念慮を生ぜしむ、然るに唯外形を飾るにこれ急に、烏雲を梳り、白粉を粧ひ、徒に細腰裊娜の態度を喜びて、內心に養ひ保つもの一もなく、禮を失し式に差ひ、行爲輕騷にして言語浮薄なる女子あらば社會に指彈され、士君子に擯斥せらるゝや必せり、女子たるもの思はざる可けんや、竊に思ふに當今の女學生なるもの、その智識見聞ます〳〵高遠に交情志想いよ〳〵華麗にして、在來の女子と比較すべからざる進歩を呈せるも、如何せん禮讓恭虔の此心乏しく、言語冗漫に流れ、擧動淑肅を缺くが如し吾人は、敢て小笠原流の禮法儀式に由りて、女子の一言一行を拘束し、以て得々たるものにあらずと雖も、この點につきて、聊か女學生諸姉の反省を促し又女子敎育の任に當る人の注意を乞はざるを得ず、愛すべき禮式の事は略陳したり、これより

音樂につきて

すこしく所感を逃べむ

夫れ音樂は美術中の美術なり、建築、彫刻、繪畫の如きもの、いづれも吾人が審美の情を樂しましめざるはなしと雖も、音樂が人心に與ふる感動の大なる

に比すべくもあらず、音樂が美術上最高位を占むることは、學者の夙に承認したる定論にして、今更吾人の喋々を要せず、凡そ器樂聲樂を問はず、音樂の吾人に快感を與ふ所以は、調和整ひ音節正しくして亂れざるに由る、然れども更に一歩をすゝめて、吾人は何故に調和の整ひ、音節の正しき音響を聞きて快感を生ずるかと問はんに、これ到底解する能はざる也、吾人は、その『何故』を解すること能はずと雖も、音樂の大なる快感を與ふることは、各自の心中に顧みて、その事實たるを證するを得む、それ樂器の何たるを問はず、一度音樂者の手にふるれば、高遠なるものは天涯の叢雲を望むが如く、壯大なるものは海洋の波瀾の起伏するが如く、或は幽麗、雨中の煙に似て、情緒絶たんと欲して絶つ能はず、或は快濶、天空の鳥に駕して九天に登るが如く、或は玄、或は峻、或は愁、或は悰、曲に由り譜に從ひて興感發情の類を異にすと雖も、心身共に我を忘れしめ、塵世の形影姑く身を離れ、恍然惚然として他界天上に在るが如し、實にや妙音好節に感ずれば、行く雲も止まるべく、流るゝ水もこれに和せむ、況んや梁上の燕飛び、水中の魚踊るをや、宜なり、齊に在りて韶を聞きては、魯の夫子をして三月肉の味を知らざらしめ、潯陽に琵琶を聞きては、江州の司馬をして青衫を濕ほさしめたるや』

且つ夫れ音樂は單に人心に高尚なる美感を與ふるものなるのみならず、德義の上進に大なる關係あり、世人或は美術が德義に對して利することありといふを、如何にも迂遠なる説なりと思ふべけれど、その實決して然らず、美感優情に富む人にあらざれば決して完全なる德義家となる能はざるなり、抑も眞誠の德義なるものは、唯徒に定りたる法則を守ることにあらずして、自ら進みて同胞兄弟の爲に悦びて盡力することなり、然らば美感にうとく、優情に乏しき者如何でかゝる行爲をなし得んや、故に繪畫なり、彫刻なり、皆これ有益なる美術なりとす、殊に音樂に至りては、その人を感動せしむる力更に大な

ると共に徳義の上進をいたさしむるに一層適切なること論ずるまでもなし、禮記にいふ『樂なるものは聖人の樂む所なり、而して民心を善くす可し、其人を感ずる深し、風を移し俗を易ふ、故に先王その敎を著はす』と、又『セキスピーヤ』の句に『音樂を知らざる、若くはその妙音に感動せざるは、反謀、奸策、破壞に充たさるゝ人なり』と、『コングレー』曰く、音樂は殘酷なる心情を和ぐるものなり』と、皆虛ならざる言也、嘗て之を聞く、殘忍刻薄を以て著しき土耳其帝『アムラス』なるもの『バグダット』府を陷れし際三萬の捕虜を得たりしが、無殘にもこれを鏖殺せんと欲して、命を將士に傳へたり、然るに捕虜中一樂人あり『アムラス』帝に請ふに、生前帝の前に於て名殘の一曲を奏せんことを以てす『アムラス』之を許しゝかば、樂人靜に樂器を執りて之を奏し、歌ふに『バグダット』の陷落、土耳其軍の勝利を以てす、其聲劉亮として玉の如く、一高一低或は幽に、或は壯に、乍にして悲慘壯烈、乍にして荒涼黯憺、身現にその境にあるが如く、幾萬の軍人感に堪へずして思はず落涙せり、『アムラス』とて情なき木石にあらず、憐憫の情起り、悲哀の感湧き、殘忍の帝王も爲に數滴の熱涙を濺ぎて、遂に三萬の捕虜を解放せりと、嗚呼音樂の人を感動せしむる力實に大なりといふべし、

思ふに、女子は音樂を學ぶに最も適當なり、凡そ美術家は天才のものにあらずんば、その蘊奧に達すること能はざるは勿論なれば、吾人は悉くの女子が皆大音樂者と爲るに適せりとはいはず、又吾人は悉皆の女子に望むに大音樂者たらんことを以てするものにあらざるなり、然れども女子は其の聲優婉にして玉の如く、その神經は敏捷なり、その注意は周到なり、指の細く腕の柔かなる、いづれか音樂を學ぶに適せざらんや、且つ夫れ女子の天職は、家庭の女王となり、一家の調和を保ち、夫を慰め子を養ひ、情花心露、之を大にしては社會の慰藉者となり、新生氣となり、生命となるにあり、夫れ女子の資性天職

既に斯の如し、聊か音樂を學ぶ豈によみすべきにあらずや、家庭に悲哀の事あらんか、則ち慰むるに樂を以てす、心境の花うるはしく、情裡の月きよく、塵世を脱し、形骸を離れ、蒼たる天に登り、渺たる海に臨む思ひあらむ、之を聞くもの果して如何の感あるべきか、親族に歡喜の事あらんか、則ち祝するに樂を以てす、駘蕩たる春風、時ならぬに吹き來り神すゞしく、身ゆるやかに、快濶壯絕、人を樂しましむる果して幾何ぞや、或は芳花爛熳たる節、或は幽蔭蓊蔚たる處、友と彈じ客と歌ふ、豈に超世の至快にあらずや、吾人は女子に對ひて切に音樂を學ばれんことを望まざるを得ざる也、而してその樂器の如きは、各々好む所に從ふをよしとす、温雅なる『オルガン』幽婉なる『ピアノ』、壯高なる『ヴアイヲリン』固より可也、箏の雅にして幽なる、月琴の靜にして麗なる、取りて以て學ぶに足る、洞簫、提琴、淸笛の類また不可なし、唯吾人の一言いはんと欲するものは、かの三味線なり、抑も三味線なるものは樂器としての價値は、世界に誇るに足れども、今や專ら狹斜煙花の地に行はれ、その歌や野卑陋醜にして聞くに堪へざるを以て、大に改良せざるべからざるものなり、

禮式音樂につきて、吾人の所感を一言すること斯の如し、大方の姉妹諸君、吾人の言を徒に看過するなく、心をこの二者に用ゐ給はゞ、吾人の滿足これにすぐる事あるべからず、敢て語を寄す

繪畫に就て

內山竹塘

世の中が物質的に進步するにつれて、何職業たるを問はず、些しにても油斷をすれば、直に社會の外に放逐されるのは當然であるが、はじめより絕對に不生產的の職業に從事して、世に立たねばならぬ人々は、物質の文明が進むにつれ、勢ひ逆境に立ざるを得ないのは、止むを得ないことである、中にも根本



[illegible]

△投書　この新聞誌面にも和歌俳句短文を歡迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　女鑑の景物にて女鑑の讀者には自然ロハで見らる、譯
▽廣告　一行十五字詰金二十錢但し四面に限る

發行人 紫式部　編輯人 清少納言　印刷人 赤染衛門

發行所　東京築地二丁目　株式會社 國光社

論說

少女のため

今の教育を受けたる人は、理屈を云ふことは、大層うまいが、自身の行ひは餘り感心せぬ、殊に疳癪の強いことは、とても男子も及ばぬ權幕で、人をやりこめる、昔はあんな事は、裏店の細君か何かでなければせぬ事でありしが、今は却つて立派なる人がする、而も學校出身の若い令孃などでもするとのこと、なるほど理屈ぽくなつたことは慥かであるが、教育ある令孃が疳癪まぎされに、裏店の妻君を學びて、聲高に云爭ふは、まことに苦々しき也、かゝる類はよも普通にはある事にてあらざるなりされど、堪へ忍ぶ力は、薄くなりたりとの評は、眞實らしく覺ゆ、すべての事の迷信より、確信に移らんとする時代故、いろ／＼の缺點も不都合も、出で來るは免るべからざる道理にてはあるべけれど、女子誠に年若き人の憤りしとて、之を顔色にあらはし、腹立たしとて、聲節を變へなどしたるは、淺ましとも淺ましきことなり、云ふべきことも、かこつべき節も、能く／＼思ひさだめて、其打ち出づる時は、いよ／＼顔つきを和らげ、聲低うして、丁寧に云ひ出でつべし、我希望の遂げ難かり、とて、直に不平の色を示し、わが辯解の立たざりしとて、忽ちに怨言を放つ等、決して年少女子の爲すべきことにあらず、いくたびも色を和らげ、形を正して、熱心に懇篤に云ひ行ふ時は、至誠などかは神明にも通ぜではあるべき、短慮なる勿れ、不忍耐なる勿れ、のど、に優なる心こそ、遂に金鐵をも溶かしつべきなれ、なほ年少の女子ならぬ際にも、かゝる行ひある人あれど、こは以ての外の事なり（下田歌子氏談）



文苑

秋五題　八木一峰

蕎麥の花太古の如き家居かな
蕎麥の花笠着てもどる一茶かな
鶉なくや灯火おそき五家の莊
臼つくる嵯峨の小家や鶉なく
島かげを出る帆入る帆や秋日和
秋晴れて芒に風のなかりけり

糸瓜つくる糸瓜の如き男かな
野分して小溝に糸瓜横はる
糸瓜棚解けば昔の庵かな
天に星柿ちぎる人猿に似たり
庭につゞく高嶺の裾や柿赤き
鈴なりの柿行く人の肩を壓す

九十

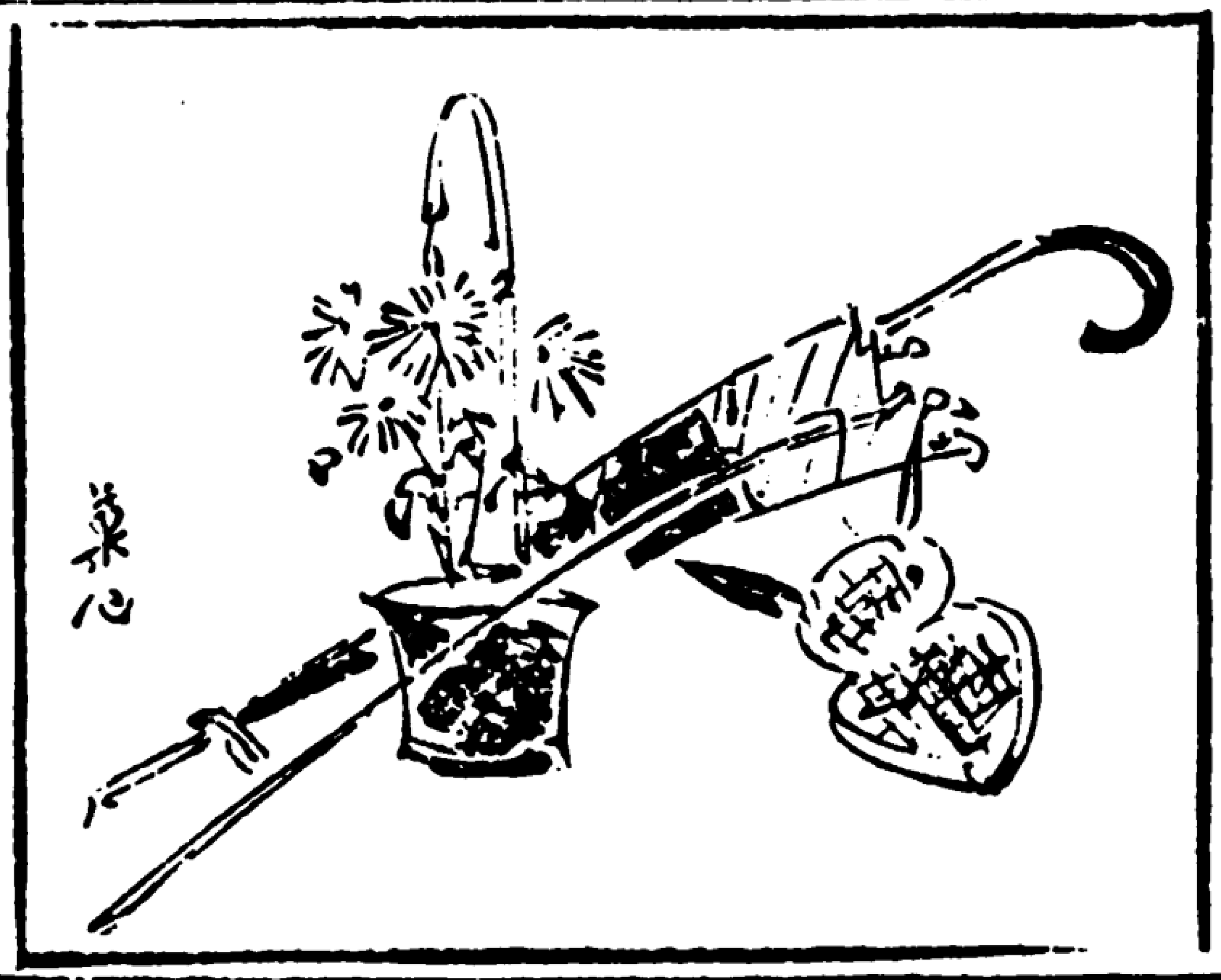
雜報

實業婦人會の設立

戰後經濟力の發展を期し實業家の發奮を促さんには、其一半の勞を婦人の内助に俟たざるべからずとの主旨にて、今回東久世、土方の兩伯を名譽顧問に戴き、朝野知名の士の贊成を得て、大日本實業婦人會なるもの組織され、來る六、七、八の三日間本郷座に於て盛んなる發會式を擧行する由、尚ほ同會にては、差當り左の事業を計畫着手する筈なりと云ふ、

一、實業女學校の設立
二、實業婦人會授産場
三、實業婦人會孤兒院
四、實業婦人會救濟院

◎愛國婦人會近況　愛國婦人會會員は、日露戰役以來非常の增加を來したるが、最近の調査に依れば特別會員五萬五千百二十二人、通常會員四十五萬千七百三十六人、合計五十萬六千八百五十六人に、贊助員三萬六千七百五十九人あり其内等一位を占むるは、石川縣にして、女子人口百人に付き五、六一次は、山口縣五、三六にして、東京の如きは第三十番の下位にして、女子人口百人に付き一、六五、大阪は第三十二の下位にて一、六一に過ぎず、而して最も少きは岐阜縣にして、僅に〇、四七の少數なりと云ふ、



◎姉小路楨典侍の近詠　藤原公知卿の令妹、姉小路楨典侍が卿に正二位を贈られたる、聖恩の優渥なるを感泣して、左の詠あり

亡兄君の特典を以て贈位の宣下ありけるをかしこみて　楨子
大君の大御惠の露ふかみ
苔のしたにも袖ぬらすらん

◎女子と圖案　某圖案家曰く、織染圖案の今日の如く流行するは、女子頭腦の發達によるされど之を西洋の婦人に比較すれば、及ばざること尚ほ遠し、西洋婦人の粧飾に意を用ふる、自己の容貌、膚色の黑白等により、それ〴〵工夫を凝し、白粉の黄、白、淡紅いづれを用ふべきや、襟、衣服の色合は、何が最も配合よかるべきや、頭髮にてもそれ〴〵特殊の結び方を案出し、殊に帽子に至ては、萬人萬樣悉く自己の顏面に合して加工裝飾すといづれにしても、厄介な代物といふべし、

流行の婦人洋服

◎禮服　はデコレツテヱトドレスまたビヂチングドレスとも、形は今春のものと同じく、色合は相變らず薄オリーブを第一とし、他は薄ねづみ色等最も多く目に入る也

◎平服　袖フチは一層大きくなり袖先は細きほどをよろこび、カフスの巾は遂に八吋に及べるが、胴前のふくらみは、之も思切つて充分になし、つとめて胴を細く見するやうの好み多く、色合は矢張り若きは薄オリーブにて薄茶、紺など、可なりに迎へらるゝやうなり

◎少女服　は桃色、オリーブ色など動きなく、形は從來の帶つけを下げたるは、日本人は是が短かければ、無格好なる故、心もち帶つけを上にしたる外、いちじるしく變りなく、値段は仕立上り四五才向七圓以上十三圓、七八歲向九圓より十五圓、十二三歲向十圓以上十八圓迄の所、まづ通例なるべし

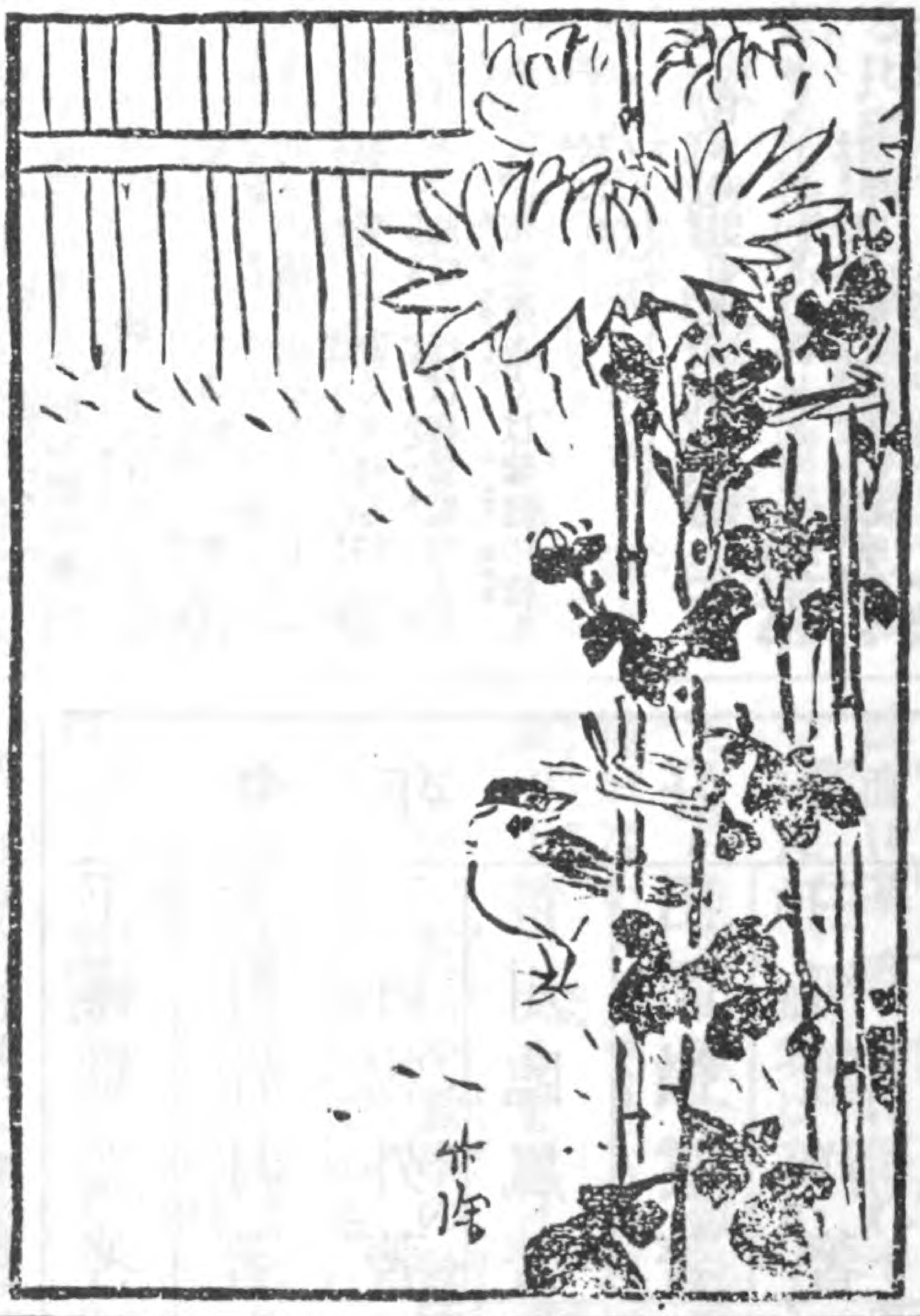
辭令

茨城縣土浦高等女學校長兼教諭　金澤鍗次郎
兵庫縣高等女學校教諭　丹羽とし
休職ヲ命ズ
茨城縣新治郡視學　原政矩
茨城縣立土浦高等女學校長兼教諭ニ任ズ
正六位勳六等　澁谷寛
鹿兒島縣立高等女學校長ニ任ズ

雜報

修道館のおばさん

本郷區彌生町三に廣島縣より出京せる學生の爲に設けられたる修道館と云ふ寄宿舍あり、目下此處に寄宿せる學生は帝國大學、高等學校を始め、各種專門學校へ通學する青年五十名近くも在り、此多數の學生等の面倒を見て、衣服の事、食物の事、其他萬事萬端に世話を焼くは、廣島縣佐伯郡廿日市町より出でたる柴野君子(三十五)と云ふ婦人なるが、去る廿六年の春より今日迄慈母の愛子に對するやうに、館主を遇する事十餘年一日の如く、青年の血氣に逸り、邪路に迷はんとするものなどある時は、溫言を以て懇々と諭し、將來を戒めて、熱心に監督する程に、館主等は何れも此の婦人を呼ぶに『おばさん』と敬ひて、其の名を呼ばず、此の『おばさん』の厄介になりし連中には、目下釜山の理事官として韓地に在る元の警視廳第二部長法學士松井茂氏を始め、興業銀行理事法學士村田俊彦氏、女子高等師範學校教授文學士下田次郎氏、早稻田大學講師高野元三氏なんどありて、其他にも大學其の他の出身者にて、現に實業界に重きを爲せるもの尠なからず、是等の人々何れも君子に對しては、今に至るもおばさんと稱し、平素音信往來の禮を缺かすとは、近頃美しき話の種ならずや、



◎池田侯爵妹姫君の結婚　池田侯令妹嚴子姫(二十二)は、伯爵南部利淳氏(二十三)と婚約成り、近日華燭の典をあげらるゝ筈、嚴子姫は、華族女學校昨年の卒業にして、書畫花茶何くれとなく、嗜好深しと△南部伯は、昨年奉天にて戰死されたる中尉利祥氏の弟にて、現に東京法科大學に通學中なり。

◎皇女御教育掛　元華族女學校の助教迎照子氏(三十)は、今回泰宮殿下御教育掛を仰付られ、去る十五日より出仕せり、受持は地理、歷史、國文、美術、圖畫、習字なりと、

◎女子雇員　鐵道作業局運輸部にて、出札係女子雇員を募集せり、志願者資格は滿十四年以上、廿五年未滿にして、試驗程度は、高等小學校卒業の標準なりと、志願者はなか〳〵多かるべし

社會

清國留學女生の歸國

實踐女學校女子留學生師範速成科の人々は去る七月二十日卒業式執行後も引續き諸學科の補修に餘念なく、下田女子を始め關係教員一同が彼等をして歸國後充分人の師表たる實力を備へしめたしとの熱心より三伏の炎熱をも厭はず日日出校して講習を積み、殊に今後本邦の教育新刊書中の要書を選みて、彼等に送ることゝなしたるに付、之が解釋に差支なからしめんが爲め、特に日文の研究に重きを置き、八月を以て漸く全部の終了したり、斯て其後女學生等は歸國の用意旁々、自由に市中の見物をもなし居たるが、愈々十五日午後五時五十分新橋發列車にて横濱に赴き、同地より上海に直行、直に歸鄉の途に上ぼる事となりしを以て、下田校長を始め職員並に同國男女留學生等數十名同停車場まで見送りたり、下田校長は彼等に近づきて一々別辭を陳べたるに、一同は首を俛れて丁寧に目禮し、業成りて錦衣家鄉に歸る發達の喜びも流石に惜別の涙を禁め兼ね、悲喜の情交々胸中に往來するものゝ如く、見えたるが、一聲の汽笛に列車の搖ぎ出づるまでも、一同車窓に凭りて深く名殘を惜み居たりき、此時一行は皆質素なる日本服に、海老茶若くは紫紺の袴を穿ち居たり、

◎日本漫遊の米國婦人團體　米國ポートランドのテレグラフ新聞社は、明年四月櫻花爛漫の好季節をトして、二十名の婦人にて、日本を漫遊せしむる計畫中なりと、

◎女の車掌　我國に於ても婦人の地位漸く昇進せると共に其職業も次第に増加し來り、汽車の切符販賣、銀行の會計にも婦人を採用するに至り、此頃に於ては遞信省の御役人となり濟ませし婦人もあり、然れども、米國には婦人にして汽車、電車の車掌たるものあると聞くに及んでは實に一驚を喫せざるを得ず、最近の統計に依れば、亞米利加合衆國に於て婦人にして汽車の車掌たるもの七人、電車の車掌たるもの四十六人ありて、又鐵道の機關方火夫相合して四十五人に達すと云ふ、

女鑑編輯以外にて小生に御用の方は左記の所へ
京橋區本港町十八番地　中川愛氷

より精神的なるは畫家であらう、當時世に時めく諸大家をのぞき、所謂第三流四流の人々は如何にしてその日を送りつゝあるか、畫家は人爵を捨て、天爵に就くは當然である、然るに現時の社會は人爵の世である、畫家にして高等官もあれば、海外留學生もある世の中に、己れのみ超然として、世外に放逸して、世の變遷にも傚はず碌々人の交際もせず、獨りで濟し込んで、遂には埋れ木となつて終ふのも、亦人間本來の目的に反する愚なる次第であるとすれば、現時に於ける畫家たるもまた難い哉である、何より畫家は精神的仕事に從事すべく、一身を畫と云ふ最も崇高なる技藝の爲に獻げ盡し、世を辭して後己れの作品を世に遺すべきを最後の目的とする以上は飽までも意志の强固が必要で、薄志弱行の輩には畫家たるを得ないのは、今更言ふに及ばないところであるが、夫がこの生存競走の激しい當時の世の中ではなか／＼六かしい仕事である、譬へて云へば爰に二人の青年があるとして、一人は四年なり五年なりの歲月を費して、芽出度美術學校日本畫科を卒業したとして、他の一人は夫より尠ない日子にて某々の英語學校を卒へたとしやう、後者は直に某商會に傭れて其日より相當の俸給にありついたが、前者はなか／＼以て口がない、てんで傭てくれる先がない、雜誌社や新聞社は迅に滿員で餘地がない、たま／＼あれば田舍の學校教師ぐらゐが關の山で、夫もをまけに畫を教へる側ら自己の目的でない、英語や數學の教師まで兼ねばならぬと云ふなさけない有樣である、

自分等に遠慮なく云はしめば、三年や四年畫を學んで、夫れで直ぐに月給とりにならうと云ふがすでに根本より間違うてゐる、非凡の天才の外は、五年六年の修業ではとても畫は描けるものではない、他に譬へて見ればザット千里の道を一步踏みだしたばかりであらう、前途は頗る遼遠なのである。

以上述たる如く現今の物質的世の中に、畫を學び、一かどの畫家たらむとするには、非常の決心を要し

且つ相當の財力のなき人々には、殆んど不可能の事と云ふべきである、世の父兄にしてその子弟が幼少のころ、器用に繪をかくから、繪かきにしたらよからう位の、漠然とした考へから畫を學ばしむるは、初めより月給とりにならんとて、畫を學ぶは根本より誤りであることは前述の通りであるが、現時の有様ではとかく小成に安んじ易く所謂大器晩成の大才の輩出し能はぬのは、美術界の將來に對して洵に心細い次第である。

往昔は畫家は畫をさへ描けば、夫でよかつたが、當時はやはり普通學の素養がないといかぬ、故に秩序ある學校で畫を教へることになると、教師たる畫家は高等官に任じなければならぬのも亦必要であらう。而して卒業した生徒を海外に留學させて見聞を擴めることも亦肝要であらう。併しその根本たる精神的修養は絶對に必要なのである、日本畫の長所は飽まで精神的にして消極的である、物質的にして積極的ではないのである。

未生流挿花法

岡　眞甫

凡そ人は己れが行爲の標準を外に求めつゝあるものなり、縱へ其標準の程度に於ける高低の差別こそあれ己が理想を事物に移して形あるものとなし、之に依りて我が品性を導かんとする心根に至りては、東の人西の人古も今も皆然らざるはなし　さればにや挿花は遠き古へに、足利八代將軍義政公に依りて、始められしも、其流れは絶ゆることなく、以來幾千年を經し御代の今までも彌榮へ來り、又榮へ行かんとするの有様とはなれり、例へ維新後暫くの間、挿花の流れ淀みしが如くに思はれしも、是れ一時の反動に過ぎざりしかば、長くは續かずして、最近十二三年以來挿花は再び以前の隆盛を以て人の嗜好を喚起し、人の行爲を支配するに至れり、是れ人心の奥底に潜める一種の强き要求なるを以てなり、然るに人或は挿花の如き人の手に成りしものが果して能く

人の品性を養成し、人の行爲を指導するに足るかを疑ふ者あり、然れども彼の美術家の筆は自然を寫して而も其美は更に自然の上に出づるものあらずや、然らば正邪曲直の理を辨へ人倫の眞髓に擬らへて作りし挿花も旦夕之を愛で樂む所の人をして自ら其自然の性を抑へて能く高雅なる品性に醇化せしむるの價値なしとせんや、

然るに現今盛んに花道を學ぶ人多しと雖も、其精神の奧妙なるを辨へず、只だ目前の慰みと心得、或は子女に至りては、結婚手段に挿花を學びつゝあり、殊に關西中國地方の一部分に於ては、妻を娶らんとするに先ちて先づ其女子の挿花抹茶道の心得あるやを聞糺し、女子として最も缺ぐ可からざるの教育を第二流に置くが如き惡風を生じ以て花道の精神に矛盾を來し、尙甚しきに至りては、藝娼妓すら花を手にする有樣なり、是れ實に花道の價値を低からしめ其精神に悖るものなり、余は大に感ずる所あり、我流花道の精神を述べ、次で其凡ての方則或は挿方法を記す所あらんとす、

凡て人は花を挿け樂まんとせば、初め神、創造者に據りて森羅萬象の造られしことを確信し尙草木の出生を攻究し、彼の花一輪を以て神の存在を認めし哲學者の如く、我等も神を認め神を讚美し神に感謝せずんばあるべからず、

然らば直接の挿花道を講ずるの先に、少しく植物界に移り、植物を攻究し、而して其性質如何を知らざるべからず、然らば挿る花の出生に應じ、及ぶべく之に似せしめ、缺點なき花を挿るを得て自然敬度の念を喚起せしむ、又斯道は一方より人生の健康上大なる關係あり、例へ彼の毛茛科（Ranunculaeae）の屬內に於ける附子屬の如きに至りては、驚くべき毒質の液汁を含蓄せり、今若し無意識にして、之を挿け過つて其液汁を口に入るゝ事ありては、意外の難を惹起するものなり、

曾て余に此の例ありしが、漸く醫師の助けにより平癒せしことあり、

雜録

笑ふこと

男爵　細川潤次郎

笑は人生固有の者にして、時あつて發することは決して咎むべき者に非ず、然るに男女を擇ばず、年少の時期に在ては、笑を發すること容易にして、笑ふべき程の原因なくして發すること、少からず、特に女子に在ては男子より善く笑ふ風ある者なり、

凡て笑を發するは、蓋笑ふべきの原因ある者なるべし、此原因に付ては古來の說大抵二派に分れたることを聞けり、其一は西哲『アリストートル』の說にして、其言に據れば凡そ笑ふべきことは、事物が其通常の地位を離れたるを認知して、之より起りたる驚訝の念に本づく者なり、但危險の感覺少しも之に伴はざるを要すと曰へり、英國の哲學者及『コレリッチ』と曰へる文人の如きは、此說を奉じて他の說を排斥せり、

其一は羅馬人『クヰンチリヤ』英國人『ホップスハズリット』等の如き者の唱道する所にして、輕蔑の意味を以て笑ふべきことの原因とせり『アレキサンドルベイン』は此說を大成するものにして、其著述の心理學の書に曰へらく、世俗事物の適宜を失するを以て笑ふべきことの原因とすと雖も、適宜を失する者必ずしも笑ふべき者に非ず、愚痴の人邦國に君臨するが如きは、適宜を失するの甚しき者なれども決して笑ふべき者に非ず、又曰へらく凡そ笑ふべきことは他に強盛なる感情を發することなき場合に於て勢威ある人若くは事物の輕蔑せらるゝに由て初めて起る者なりと、

此の二說未だ俄に其の是非を判斷すべからずと雖も亦未だ俄に一方に偏することを得ず事物の通情の地

位を離れたること、即適宜を失することとは、固より笑ふべきことの原因多分を占むることならん、然れども亦事物の輕蔑せらるゝに由りて起ること實際少からざるを見るときは、二説共に其理なきに非ず、之を要するに哲學心理學の學科は、之を講究すること容易ならず、初學に在ては深く之が講究に遑あらざる可し、

年來の實驗に據るに、凡そ笑ふべきことは、忽發して忽止む、憂愁啼哭の如く永く繼續するものに非ず、若又他の感情之に加はるときは笑ふべきことゝ雖も、亦笑を發するに至らずして止む、此れ前述の二説の共に同意する所なり、第一説の如く危險の感覺之に伴ふときは、縱ひ事物の適宜を失することありと雖



も、決して笑を發する者に非ず、又第二説の如く強盛なる感情なる場合に於ては、縱ひ事物の輕蔑すべき者あるも、決して笑を發することなかるべし、此れに由て之を見れば、笑の性質たる至て微弱なるものにして少許の感動に由て牽制せらるゝのみならず、若危險其他の感情之に加はる時は笑ふべきことの感覺は、刹一瞬時間に消滅すべし、之を換言するときは、精神に檢束ありて前後を顧慮するときは笑ふべき時に方ても、復笑を發せざるべし、故に又大抵笑を以て精神に檢束の乏き徴候となすことを得べし、若笑を以て精神の檢束に乏き徴候とすることを得る

ときは、宜く避くべきの行爲たるに似たり、然りと雖も人は自由の性を具へたる上に、見聞する所の事物千態萬狀にして、喜ぶべく驚くべきに遇はゞ、之に對して自然の感覺あるは、固より得て矯揉すべからざる者にして、一々檢束することを責むべきに非ず、少年活潑の時期に在ては、特に然りとす、況んや放課遊戲等の際に於ては、決して笑に制限を加ふるの必要なかるべし、但列座して禮式等を行ふの際には、必注意して失笑することなからんことを要す

爰に又辨明を要する一事あり、容貌欣々として喜色を帶び、笑を含て笑を發せず、英語の所謂『スマイリング』に該當するが如きは、女子の美風を助くる者にして、決して咎むべきことには非ず、此れ笑と相似て同しからざる者なり、宜しく混同すること勿るべし、笑の戒は此れにて十分なるべし、然しながら古今笑の濫用に由て、禍害を招きたること其例少しとせず

齊項公の婦人は、一笑の爲に劇烈なる戰鬪を惹起し國君の辱を遺す事體尤も大なる者なり、吳王闔廬の寵妃二人は、共に一笑の爲に斬殺せられたり、此支那古代に起りし一種の珍事にして、今日容易に有るべきことには非ず、然れども笑ふべき時に笑はずして人の怨を招き、間接に身の禍となると決して少からざるべし、

婦人の內助

文學士 常盤大定

いかなる事が內助の功をいふべきであらうか、能く昔より內助の功と云ふ事を云つて居るが、少しこれに就て思ふ所を述べて見たいと思ふ、かゝる事を處女の方に向つて云ふのは、如何かとも思ふけれども然し讀本などを讀んでも、其中には賢夫人の事を書いてもあるし、また嫁娶後の心得なども、澤山に書いて居るから、內助の事を述べても別に不思議はあるまいと思ふのである、

夫婦は人倫の大義など丶、事六ケしく述るまでもな

い、女子たるものは、いづれ一度は、夫にかしづくものであらう、その時は、いかにせば、能く内助の功を擧げ得べきであらうか、中には隨分手腕もあり財産もあり、器量もよく、品質もよく、何一つ不足ない所に嫁して、一生を樂に過したい、何の苦勞もなく、立派な奥樣となりすまして、人にも羨まれ、お雛樣然と暮したいと熱望して居る方もあるだらうが、これが或は通常一般の女子の終生の望みかも知れぬが、拙者の意見よりいふ時には、これではあまりに腑甲斐ない事である、これでは手や、足や、眼や耳を持つて居る甲斐がない、まして活きたる精神を持つて居る理由がない、丸で寶の持ぐされであると思ふのである、これがもし通例一般の女子の望みとしたなら女子の位置の卑しいのも、決して無理ならぬことである、

女子が女子としての光りを放ちてこそ、即ち男子の出來ぬ處を爲し終せてこそ、女子としての甲斐もあれと思ふ、女子として、甲斐がありてこそ、女子の位置も次第に高まつて行く者である、拙者は女子が女子としての光りを放つ所が内助の爲であると思ふ或は政治家の嫁となる事もあらう、或は商業の家に行く事もあらう、或は讀書の家に嫁し、或は事務家の所に迎へらるゝ事もあらう、その時の緣によりて如何なる所に行くかも知れぬ、然し如何なる所に行ても、道は同じである、願はくば内助の功を擧げて夫たる者を上に向はしめ、自らも之に伴ふて上に進むといふ考を持てほしいのである、樂をしたいといふ樣な自分丈の考では、あまりに情けないではないか、むしろ自分の身の事は考へずに、自分を夫の中に入れこんで、この一體となつたものを上に進めたいといふ、自分を離れて而も其中に自分も加はりて居る考を起してほしいのである、

政治家の夫人となつて、夫の政事運動を助け、實業家の細君となりて、夫よりも多く運動するといふのもまた是内助の一つであらう、世上に皆之を内助といふ樣である然し拙者の考にては、これは内助の域

を通り越した、外助であると思ふ、内助と云ふのを内君の助けと見る時には、立派な内助であるけれども、内助といふのは、ウチで助くる意味であらうから、前に述べた樣な、夫の活動區域に飛び出してするのは、早ウチで助くるのではない、ほかで助くるのであるから、外助といふ方が適當であらう、拙者はかゝる外助的内助を排斥すると云ふのではないが然し、かゝる内助は一般の女子に向つて望む事は出來ない、また望ましくないと思ふのである、

男子の活動區域は社會にありて、而して其生命となる所は主義方針である、主義方針によつては、功名も捨つる場合もあらうし、富貴も顧みぬ折もあらう否時によらば、一切萬事をなげうたねばならぬ、そんなに面倒な事をいはんでも、人間には順境もあるし、また逆境もある、順境の時には別に苦情もないが、逆境の時には種々の困難が内外より起つて來るものである、此時に多く男子の生命とする所の主義方針が、動き易いものである、逆境の時に於て、尤も望ましいのは内助であつて、内助の有無によりて男子も自然に上に向いたり、下に向いたりするものであらうと思ふ、

女子の活動區域は家庭であつて、從順貞操を其生命とする事は、千古に動かすべからざる所であらう、貞操は不變の德をいふのである、夫に對して他心を起さぬ事は其第一の務めであるけれども、その外にもまだあると思はるゝ、夫の都合がよい時には、嬉々として機嫌がよいけれども、一旦事ありて都合の惡い事がある時に、不快な顏をしたり、活動をにぶくなる樣ではすなはち貞操の德を缺ぐと云ふものであらう、こんなことでは、内助どころか、内破である、夫が外に敗れたのを、内からもまた破る樣なものである、

家政萬端に於て、吝ならず、奢らず、骨を惜まずに萬事一家の爲と云ふ所に着眼して、夫をして内顧の憂なからしむるのが平常に於ける内助である、平常の内助の事は誰も心得て居る所で、大抵の人は、大

抵の所まで之を實行して居るから、此事は前に述ぶる必要もないと思ふが、最も困難で而も必要なのは逆境の時に於ける內助である、男子は主義方針によりては、位置も捨てねばならぬ事がある財產も捨てねばならぬ事がある、其時に內君たるものは、多く愚痴をならべたがるものだが、願はくば、夫の方針主義を納得して、斯る折には十分に慰めて、更に捲土重來の大勢を作る樣に、男女一體となりて心掛てほしいものである、こゝが實に內助の肝要なる所で、こゝに女子たるものゝ光を放つのである、

マサカ間違つたら、今までの縮緬を綿服とし、今までの勝山髷に手拭を冠りて、下婢なくとも、下男なくとも、家政の內外を一身でやらう、一身でやつて夫に內顧の憂なからしめ、心勇んで次の大勢を作る樣にさして上げたいといふ樣な氣持になつて、大なる內助をしたら、如何である、夫たるもの、何ぞフサぎこむ事があらう、何ぞ元氣を失ふ事があらう、必ずや前に倍する力を以て再び進むに相違ない、かくの如くならば、それこそ却りて大なる幸福を來すに相違ない、少しのつまづきから、大なる幸運を生出し、少しの逆境から、後日の大成を招き起す樣になるに相違ない、

男子が社會に活らく上に於て、斯くなれば自分に取りて勝手が惡いけれども、主義方針の上からは、斯くせねばならぬといふ樣な事が澤山にあるのである然しそれでは內君の機嫌が惡いとか。或は又內君が種々に賴むとかいふ樣な事からして、遂に心にもなく、グツ〳〵したり、カヂリつきしたりして一向に見苦しい事をする男子も少ないと思ふ、勿論これは內君の罪ではない、その男子の男らしからざる原因にもよると思ふが、其半分は內君の罪でもある、若しこの樣な姑息のやりかたをする樣では、これ即ち男子を殺すのであつて、延て自分もまた死ぬ事になるのである、主義方針からは、立派に職も捨てしめて、家政萬端等は、自分の一身に引受けてするといふ大なる勇ましい決心でもてかゝる折には、一體と

なつて、夫婦の光りをあらはす様にありたいものである、

鳥居龍藏といふ學者があるが、其内君きみ子女史は夫の學問を成就せしめんが爲め、二人の嬰兒を跡にして、今春蒙古カラチン王族の家庭教師となられたのであるが、拙者は學界の美談と思ふ、これは教師となつて、外國に赴いたのであるから、誰もかくせよと云ふのでない、また出來るものでもなからうが繰り返しいふ如く、逆境にあふたる時に、夫を慰め更に大勢を作る様な内助をなすのが、尤も女子の心得べき所と思ふのである、勿論かゝる内助をなすには、自分の身を大に苦しめねばならぬ事である、換言すれば手足身體を十分に利用するのであるから、何でもない事だが唯外見とか體裁とかをかざる様な心を捨てねばならぬのである、

トモすれば、女子は誰様に對して耻かしいとか、誰様はあんなに立派であるのにとか、何とかかとか外見にのみ體裁にばかり走る傾があるが、これでは實に内助の功をあらはしにくい、一旦逆境にでもあはうものなら大なる内破を起して、夫を社會ずり死せしめ、自分もまた諸共に死ぬる様な見苦しい事になるものである、以上は女子をして責めた様であるが、今は内君たるものに望ましい事を述ぶるのであるから、極端まで、拙者の思ふ所を酷見したのである、

今日の務

女子商業學校學監　嘉悦孝子

英國の特色は、其大なる保守主義信念であつて、着實、温健にして、最も常識を尊ぶのであります、故に物に當りては熱せず激せざる間に、氣はおのづから世間を呑み、何時しか世界の最强國となつたのであります、且其保守主義は根氣强いと云ふ美德を產んで、常に優勝的勢力を失はないと誰やらが申したことがありました、此說明は大きく云へば國家、小さく云へば個人によつて、極めて大なる訓戒であ

らうと思ひます、

人は今日をよくせねばならぬのです、此語を現在主義とかと同一に誤解してはなりませぬ、今日を勤むる所以は即ち永遠の事を全うするのであつて、人間の至上にして永久なる靈的生命を得やうとするものは、今日の義務を完全に遂行せねばならぬ、今日を完うするものにして、初めて人間は理想の境まで到着することが出來るのであります、

英國民は、其擴大なる版圖を有して、世界中日の沒することなしとまで誇つてゐるのでありますが、しかも彼等はなほ自己を戒めて、形體の尨大なるは必ずしも精神の偉大なるにあらずといひ、たゞ一意國民として國家に盡す義務、人間として神に對する義務を完うせざるをのみおそるゝといふありさまであります、大にして驕らざる彼國民にして、はじめて今日あるをいたせる所以なる事を私どもは知らねばならぬことであらうとおもひます、

此國民が盡すべき義務は、何かと申しますれば、自己の授けられたる今日の責任を、今日完うすることであります、明日のことを今日するのではない、昨日のことを今日することではない、まして今日のことを明日に延ばすやうな事は、即ち義務を完うせざる罪として、衷心非常に恥ずるところであります、彼等が今日の雄大なるを致す、決して偶然ではないのです、

『あすありと思ふ心のあだ櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは』となにかし僧の歌はれた歌を以て、世は頼むに足らず、よろしく自暴自棄せとは解釋してはいけませぬ、たゞ自らなさねばならぬ今日のことを早く完うせよ、明日は自己の運命とわからぬから先づ今日の中にするだけのことは、しておかねばならぬとの本義を咀嚼することが肝要であります、

今や我國の戰勝の勢は、國家をかりて、忽ちにして世界の最大强國とならしめましたとは云ふものゝ、私どもが甚だ心配に堪へないことは内部即ち個人の品性、家庭の狀態であります、實に各自の家庭の

治績といふものは、國家の治績であつて、家庭の富榮えるのは、國家の富み榮える所以でありまするのに、顧みれば、そゞろに寒心に堪へないのであります、戰には勝ちましたけれども、甲の緒をしめませんでした爲、遂に木曾義仲は亡びました、あゝ此教訓は戰後の國民、今後の家庭を極めて適切なる教訓として、しばらくも忘れてはならぬことであります甲の緒をしめると云ふことは、やがて今日の務を完うする意義に外ならぬのであります、

西哲は、人の眞に偉大なりといふは各自が自己の義務を果すことであると云はれました、眞に自己の義務であれば、職業は何れをとはず、よくはたらきよくつとめるものであつて、はじめて偉大なる人と云ふべきものであります、此意味よりして、職業に高下がないことは、勿論の事であります、

農夫は農夫たれ、商人は商人たれ、職工は職工たれ自らのなさゞるべからざるつとめを一意專心つとめてもつて、今日のことを今日にしてこそ、はじめて偉大なる國民と云ふべきであります、

とかく我國の婦人、ことに中流以上の婦人の多くは其自己の責任を盡すことを耻づるものゝ如きは、實に不可思議と云はねばならないのであります、家事の取締は自己の職分、子供の養育は自己の職分、臺所の業務は自己の職分であることは申すまでもないことでありまして、以上申した通り自己の責任をつくさねばならぬが、さて主婦は果して自ら喜んで此等の責任をつくしつゝありますが、如何、手を下して已むを得ずするにせよ、自らおさんどんをする人は、眞に美しいことでありながらその人自らそれをさへいやしきものゝ如く心得てゐるは、眞に口惜しき限りでありますまいか、

要は、今日の義務を盡せよ、かくて偉大なる人物となり、偉大なる國民となる事が出來ませう、今日のことを盡さゞるものは、斷じて何事をも成功するものではありません、

賢母のかゞみ

▽賢母の來歷　明治賢母の鑑なる、安藤喜久子刀自は長野縣飯田町仲の町飯田銀行員安藤欽一郎氏（六十六）の實母にて、堀大和守の藩士鎗術の師範役安藤辰武氏の室となり、男子四人を擧げしが、三十歳の春良人に死別れ、當時十四歳なる前記の欽一郎氏外三子を纖弱き女の身一ツに引受け、爾來五十年、未亡人として子孫の薫育に心を委れたる結果は、玆に一門中に二師團長、二博士を見ると云ふ、最とも芽出度家庭を作るに至れり

▽奮鬪的育兒　刀自は、同藩の漢學者島地樂叟の娘にて、漢學の素養ある上、又和歌に堪能の聞えあり、良人に別れし當時四人の子供を抱えつゝ、富有ならぬ身の二六時中、養蠶と機織とに身を委れ、長男欽一郎を始め直平、貞美等（末子武雄は當時尚ほ母の體内に在り）の保育に怠りなく、當時の教科たる漢書、手習、劍術、鎗術、馬術を習はしめ、時に鉄砲の使用法さへ習得せしむるに力め、自らは必ず論語孟子などの素讀をも授け、時には日本歷史の講義をなして専ら三兒將來の發奮に力を竭したるが、何ぞ知らん此の幼兒中に、未來の師團長あり、大審院の判事あらんとは、斯くて長男欽一郎氏は家長たるべく家に止り、直平氏以下は母の命に從つて東京に遊學し、今は天晴なる紳士となれり

▽二男直平氏　は現に喜久子刀自の寄寓せる今の大審院判事高等官一等柳田直平氏（五十八）にて同藩の柳田家を襲ぐ、夫人琴子（五十六）との間に長女順子（三十八）次女貞子（三十六）三女孝子（二十一）あり、長女順子は現代婦人界に

▽矢田部順子　と云へば誰れ知ぬものなき閨秀教育家なり、扨て其の妹なる貞子は、お茶の水高等女學校を卒業し、第五師團長木越中將の夫人となり、柳田家は三女孝子が襲ぐこととなり國男（三十一）と云へる法學士を養子となせり、亞きは

▽三男貞美氏　にて當年五十四歳現に陸軍中將として、第十師團長たり、海軍大將伊東祐亨氏の令妹八重子（四十七）を迎へて夫人となし、長女隆子（二十八）次女誠子（二十四）の外三男四女と云ふ子寶にて隆子は吉田陸軍少佐の夫人たりしも、少佐旅順にて戰死の爲め今は未亡人となり、次女誠子は此夏京都大學教授桑木文學博士の夫人となり、一門又榮えに榮えたり

▽刀自の昨今　喜久子は春夏秋の三季は殆んど姫路（第十師團所在地）なる貞美中將と、東京なる直平大審院判事との間を來往して、母子間の溫情を溫め、冬季に至れば鄕里飯田なる長男の許に歸りて、冬籠りするを例とせり、刀自と親み深き在京の婦人連が、何故に其の寒空を雪深き信濃の山奥に暮し玉ふかと訊ぬるに、

　私や信濃の雪降る里に、炬燵ばいりて冬ごもり

など〻都々逸にて、洒落のめし、至極暢氣に餘生を送り居れるが、又「靈魂不滅」と題る和歌あり

　現身はあらずなりても靈魂は、消ゆる世なしと聞くぞうれしき

家と庭（一）

愛氷生

或西洋の人は、或國の家屋を見て、多くは假住居なるべし、など評したりとか、なるほど日本一の大都會にても、戸締りしたる夜の家屋など見歩けば、色違の板戸、釘付したるさま、假住居と云はるゝも無理ならぬ、見すぼらしきもの多し、されば、家屋の結構は、西洋に向ひて誇ることむづかしかるべし、それに引かへて庭園にはなか〳〵に見るべきものあり、末松博士は、庭園の美は世界の中にて、日本にまさるものはあらじ、そはその術語の多きにても知るを得べしと、然るにその庭園の見るべきものは、次第に取こぼたれて、きのふの養浩園、けふのビール釀造場といふ、有樣にて。いつか秋元子爵には、記者に向ひて、庭園らしき庭園は、維新後少からず取こぼたれ、今後とても一個人の庭園は日々に狹められるなるべし、今後のは兎に角に、是迄に取こぼたれたる庭園はいま記臆の殘れるうちに、圖にひきて、冊子に紀念したきものなり、然らざれば、そのおもかげをさへ偲ぶによしなきに至らんと、語られたることありき、かくて世界に誇り得べき庭園は、次第に見る影もなくなりて、これまで笑はれたりし家屋は一建築ごとに、一火事ごとに、改良せらるゝやうなり、それにて或は平均を保たるゝかもしれず今こゝに『家と庭』として記述するは、右の如くにして改良せる家屋、後に紀念すべき庭園のことにあらず、關係なき人の容易に觀ることを得ざる家また、庭の有樣をうつして、座して其境に遊ぶ栞ともせんが爲なり。

芝離宮拜觀の記

芝離宮は、芝區濱崎町に在り、舊徳川氏の別園にて濱御殿と稱せしが、維新後其の隣地なる紀州侯の邸を合せて、今の離宮とはなりたるなり、毎年晩春の

候、この離宮に行幸啓あらせられ、觀花の御宴を開かれ、各國公使及び群臣に拜觀を許さるゝなり、されど其數ならぬ人多ければ、往來に人の、たゞ御門の外より、仰ぎまゐらするのみ、それに洩れぬ記者の如きも、昭代の餘澤、ことし六月十二日日本赤十字社總會の日、その社の一員として、拜觀を許されたり、御門にて、かねて赤十字社より頒たれたる拜觀證を守衛に渡し、御門を入れば、正面に可美眞手命の御像あり、その左手のうしろに宮殿あり、宮殿は舊來の建物に洋風の新殿を加へられ、外來の華族貴賓を接待せらるゝ處とし、延遼館と稱せらる、御像を拜して右に御苑に入れば、そこに燕の御亭あり五月の御眺めにあてたまへるにや、それより御池を右に見つゝ行く、鷹揚につくりなしたる御苑の風情影高き松の色、その間をつゞれる花の、春はいかにとしのばるゝ葉ざくらの色、底すみわたる御池の色、さては敷きつめて滑らかなる苔の色、一つ緑に染めなしたるが、何とはなしに神々しく拜せられ、仙境にありとは、かゝる折をこそと思はしめたれ、それより松の御亭のかたへを經て、櫻多き所に至る、この櫻は多瓣のが多きよしにて、花のさかりは、いかばかり美しからむ、池のほとりに出づれば橋あり、こゝは御苑の行きどまりにて、この橋を渡れば、右に潮見の御亭あり、其前の芝生より海面を見渡せば安房上總の遠山も、呼べば應へんとし、近くは竹芝の浦より、左に砲臺の並びたてる中を、數知れぬ船の往きかよひて、名畫の中に立てるが如き感あり、行幸の砌、程近く船こぎ寄するものなどあるを、侍從のさしとめなどする際にも、陛下にはそれも亦風情ならずや、とてそのまゝに見そなはすこともあり、とそこに立てる守衛は語りき、月すみのぼる秋のけしきは、類ふに物あるまじくおもほゆ、そこを過ぎて御池に沿ひ行けば、鶴を飼はせ給へる所あり和歌の浦と記せる札をかけたり、大君の千歳を歌ふ聲、いかばかり朗かなるらむ、

それよりまた、松と櫻と、緑をあらそへる下道を行

さて、御苑の西のはてに出づれば、そこに富士見の臺といふ岡あり、こゝより名にし負ふ富士の景色いかにと見れば、心あてにそれかと見らるゝが、遙かに淺黄色して立てり、雪白く見ゆる日は、その眺も一しほなるべし、其岡のふもとに描きなしたるやうなる芝生あり、濱床すゑたる上に休らひ、暫しあちらこちらと眺めわたして、再びとては容易く觀らるまじき御苑のうちに、少しにてもながく身を置かばやと、こゝよりなか／＼に足も重くなりぬ、

興いよ／＼加はれど、よきほどにして、また御池の汀に出づれば、池の中島にわたせる長き橋あり、そを渡りて御亭に着けば、御亭の前には藤棚をしつらへたり、花の盛りには後れたれど、そこにも暫らく立どまりて、御池の面を見れば、鏡のやうなる中に遊べる魚の數へらるゝも、なか／＼飽かぬ風情なりかし、そこより東の汀へも橋を渡せり、そを渡ればやがてもとの松の御亭へ出づるなり、

かくて御門の外に出づれば、何となく物忘れしたるやうの思ひしたるは、いかなる故にや。

△次は　華族會館

丙午の出生及婚姻

丙午の年と云へば、古來一大惡年と云ひ傳へられ、種々の迷信說さへ行はれしが、此迷信は今日も尙昔日と變らざるにや、本年に入りて以來出生兒の屆出例年に比して非常に少く、且つ其屆出づるものも男兒に多くして、女兒は少し、是本年に出生したるものも、其屆出を來年に延ばさんとの親の慈愛に基きしものならんといふ、又一方婚姻數に於ても昨年後半より、本年二月頃迄は例年になき僅少にして、三月以後四月よりは出生屆と反對に、其數急に增加し來りし如き、尙例の迷信說が如何に俗間に勢力あるかを證するに足るべき歟、今東京區裁判所に就き、前記二件の取扱數を檢するに、卅七年七月迄の出生屆は、二萬五千七百八十九人なるに對し、本年は二萬二千六百六十五人にして、即ち三千百廿四人の減少なるのみならず、本年屆出の內男は一萬五千三百十五人なるも、女は僅々七千三百五十人に過ぎず、例年になき偏頗の比例を示し居れり、又婚姻屆は昨年は月平均千三百件、多くも二日に於ける千五百一件少きは七月に於ける九百十五件なりしに本年三月よりは急に增加を來し同三月は千九百十三件、四月は二千三百三十六件を取扱ひ先月の如きは、實に二千四百十三件を取扱ひし程なり

女子職業としての醫師

（宇良田唯子女史談）

▽婦人界の趨勢　近年女子の間に獨立思想普及せる故にや、一般に婦人の爲め新職業の開拓されつゝある折柄、女醫も亦五六年以前其數四十人未滿なりしに、今日は既に百餘を以て算へらるゝに至れり、而して此の女醫たらん志望を抱ける女學生、亦著しく數を增し、之が爲め女醫學校てふ專門校の設備をさへ見るは、驚く可き進歩と云ふべし、

▽女醫と他の職業　其職業の範圍は八方に擴張せらるゝも、收入に至りては未だ男子と比肩しなば、其靴の紐を解くにも足らざるが如し、聞說女子の最高學府たる女子高師、並に女子大學の卒業者が得る收入は、昨今殆んど二十圓乃至四十圓の間に限らるゝとか、然らば寧ろ女醫の收入は、此等には數等を超したる唯一高額のものたらずや、此點に於て女醫は現今極て好望の婦人職業なりと信す

▽醫業に耐へ得る乎　唯頃溶女醫に對して、批難の聲を聽く、一時患者の好奇心より繁昌すれど、患者の服裝其他些細の點に婦人通有の注視を拂ふ爲め、暫くにして嫌惡せられ、門前雀羅を張るの悲境に陷るべし抔の言は太甚だ誣ゆるものにして女醫一般の評として、妥當を失せるが如し、要するに適當或は不適當の事は、女子の能く醫業に耐へ得る乎の問題に歸するならんと思はる、然も女子の全科醫は却つて不適當にして、到底其煩に堪へ得ざるべく、若し耐へ得るとしても、到底結婚が爲し得まじ、勿論良人ある女醫の强て這を堪へなば、却て大なる家庭難に遭遇することあらん、然れば女醫は分科の專門たるを要す現代の女醫中良人在るは、頗る少數なるに徵しても、注意すべき也、

▽眼科と婦人科　專門分科中最も女子に適するは眼科ならん、概して眼科治療は殆ど一種の技術にて、殊に緻密を要する技は婦人の長所なり、之に次で婦人科は患者の感情上女醫の診療を欲するは自然の理にして、輿論もまた是れを慫慂するに似たり、現に大阪に開業しつゝありし女醫福井シゲ子氏は昨年一月以降自分の母校なる獨逸マールブルヒ大學に在り、婦人科專攻中なり

▽藥劑師も亦可　嘗て自ら十八九歲の頃藥劑師の資格を得、藥種商を開業せしも當時餘りに歲若かゝりし故、うらはづかし抔の感情より、程なく中止せしが、今日之を懷へば藥劑師の業は、婦人として寧ろ醫師以上適切の職たるを信す、兎に角女醫とし、一家を齊さんには、尋常一樣の困難にあらず、若し藥劑師たらんと欲せば、寧ろ容易の事に屬するなり

大陸の歷史と賢女

淺岡一

下

是等のことよりも、猶一層憐れむべきことがございました。それは英國政府が、十二三若くは十四五の小女が竊盜罪を犯したからとて、速決裁判を以て、此小女の濠洲に逐られましたことがございますが、其小女の數が四百名程有つたさうでございます、其が英國で船に上せらるゝ時には、知る人は猶更のこと、知らぬ人までが嗚咽したさうでございます。

是等の小女が濠洲に參りましてからは、保護する牧人もなき荒れ野に、棄てられた羊の樣なもので有つたさうでございましす、此小女は男子の暴橫を避る爲には、夜中市外に出で草木の間に匿れ居るより外に途は無かつたさうでございます。賢女カロリナーが、印度から良人と共に、移つて參りましたのは、婦女子が右樣な悲慘の境遇に居つた時でございました。そこでカロリナーの道德の眼は、如何にも憐れむべき此婦女子を傍觀することが出來ませんで、濠洲シドニーの政廳に出て婦女保護の處置を講ぜらるゝ樣にと、熱心に請求致しました、然るに政廳は男子の監督さへ手に餘る折柄であるから、到底女子保護のこと抔に着手すべき餘裕は無いとの口實で、其請を彈ねつけました。そこでカロリナーは牧師を訪うて婦女子を保護することを謀りました。然るに牧師は人心を正しくする樣に、敎を施く爲には骨を折りませうが、手を下して保護することの相談には當り難いとて、之も受け引きませなんだ。そこでカロリナーは意見書を新聞社に贈り普く答按を求めました

カロリナーの、至誠と熱心とが、右樣の有樣でございましたから、一般の人を感動せしめ又從て政廳の人々をも感動せしめました。やがて政廳から大きな空倉庫を貸されました。これは意見書中に女子を收容すべき家屋を得ば他人の助力を仰がずとも、自ら保護の任に當らうと云ふことが有つたから、それで

此に至つたのでございました。カロリナーは、非常に喜んで直に最年若き女子百人程を收容て、これだけの人をば兎に角に露宿せずとも、男子の暴横を免れ得る樣に致しました、又良人の有る女子をば、其不在の折には、引受けて保護してやることをも務めました。

右の百人の小女は、何れも、無藝、無能で、是ぞと申す仕事は何一つさせることが出來ません。斯る女子を大勢集めて保護致しますには、如何なる手段を以てしましたか、彼の身分は僅に大尉の妻と申すに過ぎません、それに又三人の小兒を抱へて居りました。其勞苦の非常でございますことは、想像するに餘り有る程でございます、實に通常の人の出來得ることではございませんが、カロリナーは毎日此處彼處に奔走して、夫婦者若くは、一家族を纏めて、僕に衣食し居て、下婢とか手傳人とかを、要する樣な處を求めて憐れむべき、女子の爲に其方向を定めさせました。斯樣にして僅に一年の間に、七百の女子が、其身を寄せて衣食し得る場所を授けました。其内の三百人は、英吉蘭の新敎徒、他の四百人は、愛蘭の舊敎徒でございました。此七百人の女子が追々結婚致しまして、一二年の内に殘り少なに成りました。其故カロリナーと力を併せて、新渡來の女子を世話する者が澤山に成て參りました。

カロリナーの、右樣な骨折の爲に、レドニー附近には、十分に婦女の配置も行はれて參りました。されども濠洲全體には中々行き渡る樣には行きません。それで新渡來の婦女をば、追々遠方に配付せねばならぬ樣なことに至りました。他人の考へには最早カロリナーも奔走する必要も有るまい。殊に遠距離の地には、政廳の監督も政廳の保護も屆かないから、劍呑でも有るし、猶更出懸ることは無からうと、斯う思つて居ました。然るにカロリナーは、女ながらも馬に跨りまして、或は道途無き境にも入り險阻をも冒し、山河をも跋渉しまして、六十哩位の遠方に參ることもございました。これには二つの目的がご

ざいまして、其一つは鑛山其他の富源を發見して、男子の從事すべき仕事をこしらへ、前年心ならずも相別れた大尉を印度より呼び迎へんとすることと、從來の目的通り女子の奉公口、若くは其結婚するに適當な人を見付け樣とするとの、兩樣に骨を折りましたものでございます、それ故事によりますと大勢の婦女を伴れて出懸ることもございました。此旅行中にも滅多な所に宿りますと、暴漢に迫られまする虞がございますから、或時は深山の中に或時は岩穴の間に、又或時は艸深き原野に夜を明かしたことも屢々でございました。

此賢女カロリナーが、世の爲人の爲に一身の勞苦も打忘れて、斯くまでに盡力致しました所から、此を見聞致しまして、自然に奮發して誠實なる行を爲やうと云ふ人が、追々増加して參りました、從來此に集りました人々は、成るべく遊惰に、成るべく無事に生活することをのみ望みましたが、中には此風俗を改良したいと思ひました人も無いことはございませなんだ、併し移住民の精神も改まらず、從て風俗も改良の方に向ふ樣なことはございませんで、不德に不德の行を重ね、卑猥に卑猥の行を重ね、强者は我儘に、弱者は卑屈に、夫れは夫れは眼もあてられぬ有樣で、此地に來ました婦女と申すものは、生ながら地獄に落ちた樣なものでございました、ところがカロリナーの爲に自然に此惡風が減じて次第次第に誠實に向て進む樣に成つて參りましたのでございます、嘗てシドニー政廳長官がカロリナーに、夫人は如何なることを成さる御志かと問ねましたら、私が何を致しませう、私は唯人の爲に相當の配遇を得させますことに天命を受けて居りますからと、斯う申したさうでございます、如何にも其通り、直接間接に多數の男女を結び合せて、親族の基礎を据ゑさせましたことが、幾百千でございませうか、中々算へ切れぬ程でございました。

實に結婚と申すものは親族の基礎で、又生命の關鍵でございますから、カロリナーは此基礎關鍵を人々

に與へますことを以て、自ら任じ能く此事に身を入れたものでございませう、其故カロリナ一は愛の守護者とか、名譽の長者とか、謡はれました。さて此賢女は妙なことを信じて居りました、總て人と申すものは、安心して安穩の地に在れば、如何なる事でも自ら順序立るもので有るが、其れが間違ひまするのは、惡き人が居て人々に安心させぬ、從て安穩の地を得させないからである、畢竟安心安穩の地は自ら愛し、人を愛する地で、又時を愛し、自ら重んずる地で有ることは、疑ひなきことぢや、と斯う信じて居ました、

此夫人は唯男女を合同し、夫婦とするのみで無く、猶一族を一家内に纏めやうと勉めました、されば少き女子を助けて結婚せしめて、之を一家の執政者とし、其良人若くは自己の兩親を其家に招き寄せる樣に仕向けました。猶其上に從來は重に犯罪の女子のみを移住せしめられた。此新世界に本國に在て不仕合な裁縫工女又は其外の女工を呼び迎へて、一には其女工の衣食を得る樣に、一には他の女子に工藝を覺えさせまする樣に致しました、猶之に類した樣なことも澤山でございました。

此等のことから、夫人は思ひもよらぬ危險のことに出會ひました、それは英國から移住して此地に參りました女子は夫人の爲め若干の所得がございまして皆之を夫人の恩惠と思ふところから、其得まする貨幣に接吻して受取りました、シドニー地方の蕃民共は、夫人が本國人のみに厚くて、自分等には甚だ薄情で有ると兼て思ひ居たる所に、此貨幣を受取る樣を見ましたから、猜忌の心を起しまして、夫人の家の窓下に集り、夫人を暴殺しやうと企てたのでございました、實に此上もない危險なことでございました、併し諺に至誠に向ける刄はないと申す通り、有徳の人はまた格別なもので、夫人は平氣で其群集の中に立入りまして、温和な顔で説諭を始めました、が誠に諺の通り、大勢の蕃民の張り詰めた氣も緩み、握つた拳も解け、開いた眼も閉り、終に尊敬の

言を以て只管詫ながら引き退つたさうでございます夫人は濠洲移轉後七年目に一旦英國へ歸りまして、殖民省で其意見を述べまして、殖民卿の同意を求めました、猶其上に公開演説を致しまして、グレー卿も出席し、其外上院議員も出席して其説を聞かれ大に感じたさうでございます、されば上院議員は其後委員會を開いて、其意見の實際に行はるゝ樣に盡力致したさうでございます。

實に夫人の精神、夫人の誠意、夫人の勉强、夫人の慈悲は、之を稱揚しまするのに言葉の足らないのを憾みとする程でございます、其良人も常人には立ち優つた人と見えましたが、夫人の方が卓絶して居つたに相違ございません、其故世間ではカロリナー第一の門下生は、大尉シソルムぢや抔と、評したさうでございました、此良人も晩年に濠洲に移りましたさうでございます。

只憾むべきは此夫婦は一心に世の爲人の爲と申すことのみ盡力して、團欒の樂を爲ました時が、僅に指を屈して算へられる位で有つたと申すことでございます、當初濠洲で分れて後は、良人が重て此地に歸つて參りましても、相分れて別々に事業を勉めて居りまして、瞑目した其時丈良人の涙の雨に蒼白の顏を潤すことが出來たさうでございます。

我々は此賢夫人の爲に筆を執て其經歷を叙述致しまして、思ひまするに、實に是は女聖の傳記でございます、日々月々に名譽の喧傳せらるゝのは爭はれぬことでございませう。

總て此婦人の行爲は、巧妙、幽玄抔と申す樣のことではございませんで、至誠を以て實際に善行を爲遂る積極的精神、是が此夫人の夫人たる所を、遠く一般人の上に卓絶して居る所でございます、且つ此夫人は人を統御する才に長じて居りました、又精密に何事でも記錄に留めて置きまして、金錢の出納人の出入及其人の善惡性質又は月末歳末の各種類の統計抔と申すことまでも、整然として調へ置きましたさうでございます、夫人が畢生の間に親戚より借り入

れて、未だ返濟を終らざりし金額が十六フラン（我が日本の六圓許）有つたさうでございました、之を外にしましては、借財抔は半錢も無つたと申します。して見ると、今日五大洲の一つに數へらるゝ彼の大陸は、此夫人と、十六フランとで、買ふた樣なもので、實に驚くべき安直な大陸でございます、否や否や、夫人の熱血が露雨と成つて、立派な邦土を形つた、其形つたものが五大洲の一つとすれば、夫人の熱血は此上も無い高價なものです。

溶姫君

小川直子

前田家十三代加賀守齊泰卿の室、溶姫君と稱へけるは、徳川家十一代太政大臣家齊公の御女なりけり、此君見目かたち麗はしう、はた幼きよりいと賢くて糸竹の調はいふもさらにて、大和唐土の文の林にも深く分入り給ひ、敷島の道にもたど〳〵しからずおはしぬとなむ、されば齊泰卿との御中は、はやくさる御契ありけるのみにて、未だ御入輿もあらず、殿は金澤の城に住み給ひし夏の頃、五月雨の打續きて、晴間なくつれ〴〵なる日、なつかしうこまやかなる御消息ありて、奥に、

　君がわたり音信ゆかはほとゝぎす
　　まつにねぬよの物がたりせよ

と、御手もゆゑ〳〵しうほのかなる御墨つきのうすくこく、かきまぎらはし給へるを奉り給ひければ、殿もいたうめで給ひけるとか、かゝれば御入輿の後は、ます〳〵水もゝらさぬ御中らひにてめでたかりき、ひと日殿は御鷹狩より歸らせ給ひしをり、常は御玄關より入給ふに、此日殊更に奥庭へまはり給ひ、常の御ましの簀に腰うちかけて、洗足めしければ、姫君やがて出で迎へ給ひ、やをら砌の石に下りたち給ひて、御手づから御わらぐつの紐をとき、御足を滌めなどし給ひしさま、いとも懐くめでたくおはしましぬと、亡我父が親しく見奉りしを、いみじう感

じつゝ、常に物語れりき、まことや其頃徳川家は彌盛にて、草木も靡かぬはあるまじう時めき給ひたれば、其家の子どもはたけ〲しう、けはりつゝ、ともすればむらいのふるまひも見えつるを、此姫君は召連れ給ひける女房など、假初にてもさる振まひの見ゆる折は、いたう制し給ひしとぞ、あはれ世の人々よ、たとひ品高く生ひ出で、我さとより劣れる家に行きたりとも、ゆめ〲夫をかろしむるなどの、心おごりはあるまじきわざぞかし、露ばかりも高ぶる心のあらむには、いかに姿のうるはしう、手には如何なる能ありとも、見おとりせらるゝ習ひぞかし、誰も〲此姫君の如くこそあらまほしけれ。

隱れたる女子教育家

去る明治十七年以來滿二十二年の長日月を良妻賢母の養成に從事し、且つ身自らも逆境に在りし良人を扶け、能く一家の整理と子女の教育とを忘れず、良妻として賢母として、婦女子の龜鑑たる女子教育家田中鎌子女子(四十二)の事ども聞き得たれば、之を記さんに、女史は本所區二葉町二十七番地舊旗本池田松男氏の長女にて、舊福井藩士族田中信良氏に嫁し二人の間に長女いさ子(二十八)長男繁(十七)次男信雄(十五)をまうけ、いさ子は嫁して河崎歩兵大尉の夫人たり、繁は目下府立第四中學校に學び、信雄は陸軍中央幼年學校豫科第三年生なるが、良人信良氏は明治六年頃陸軍初代の會計監督を勤め、彼の有名なる山城屋和助事件に嫌疑を被りて、謹愼を表すること四年、遂に裁判の結果は氏のみ無罪となりて、身の潔白は立ちしも、其後感ずる所ありて退職歸鄕し、船越男其他の忠告により、再び出京して内務省の出納吏たりしも、奉職一年にして眼病を發し、爲に退官の止むなきに至りしなり、女史は幼少の頃より習ひ覺えし茶の湯生花、詩歌管絃の技を復習し、又一方には英國宣教師ワデル夫人に就きてミシン裁縫より編物全般の事どもを學び、明治十七年中自宅教授を開始して家計を立て、良人をして心置きなく治療せしめ、信良氏の眼病は九年の長きに亘りて、漸く治療せしも、爾來健康舊に復せず、加之家運を挽回せんとの焦慮より、手慣れぬ新聞事業や煙草製造に從事せし爲め、失敗又失敗愈々逆境に陷りしも、女史は不撓不屈良人を勵まして、一家の事は萬端身一つにて整理し、斯かる間にも子女の教育は怠らず、信良氏は去三十五年中六十六歲を一期として不歸の客となりしも、女史は私塾及び女子文藝學舍鐘紡工女學校等に教鞭を把りて、益々良妻賢母の養成に努め、二十餘年の久しき今に其熱心衰へず其薫陶を受けたる人々の中には、秋山定輔氏夫人、元警視廳第二部長(今の釜山理事)松井茂氏母堂姉妹、船越男爵令孃、桂伯爵令孃等ありと。

貞女のなみだ

病夫の看護に二年一日の如く事へ、而も女の細腕もて、精一杯にホワイトミシンの賃仕事に、若干の工銀を得て、根限りの療養に心を砕きしも、其の効なく、竟に去十七日午後八時と云ふに、亡き人の數に入れる夫の死骸を抱いて、天に叫び地に泣く哀れの貞女こそあれ。

△男の素性　福岡縣田川　津野村上田禎次(三十四)は、代々醫術を業とする家に生れ、去る卅二年三月中學校卒業の目的にて、上京し、東京慈恵醫院其他に就學せしも、或る情實の爲に、中途廢學するの止むを得ざるに至り、其後日本鐵道會社附屬運輸會社三立社員となり、相當の月俸を受け居たり。

△もと女學生　芝區三田松坂町卅八番地清水五左衛門方白石初太郎妹クメ子(二十五)とて、其の當時某女學校に通學中なりし、女學生こそ、貞婦とての近所合壁に謳め稱へらるゝ女にて、此の男女は今より四年前夫婦となり、一家を構へ面白をかしく過ごし居る中、禎次は一昨年の冬來激しき肺病に罹りて身動きもならず、重き枕に就きぬ。

△あゝ此の貞節　夫禎次病氣に罹りて後は厘毛の收入もなきに、取り敢す家を疊みて、神田區多町一丁目二番地石井留吉の二階六疊を借り、病夫を茲に移し、自分は裁縫ミシンの工場に通ひて、日々若干の工銀を得、これを藥の料となして、只管看護に憂身を窶せしも、捗々しき經過も見えず、病は次第に重くなりて、到底女の痩腕にては看護も出來ずなりたるより、此に家財道具は言ふに及ばず、四季をり〳〵の衣服など悉く典して、細き煙を立てながらも夫に仕ふる貞操は、更に以前と異る處なく、愈々倍々心を碎きて其の療養に身を任せたり。

△貞婦の决心　兎角する中、前記の初太郎を首め、日本橋小傳馬上町四番地白石長次などの實兄等は、斯くと聞きて何時まで那んな男の傍に居ても、何の役に立つものにあらず、却て身を亡ぼす原となる許り故、早く縁を切りて逃げ來る可しと、再三再四すゝむれど、クメは何時かな聽き入れず、氣をゆるして一旦夫と定めた上からは、肺病に罹らうが、癩病にならうが、妻は何處までも妻の義務を竭す可く夫の死水とらでは、此所一歩も離れじと、殊勝にも貞操を以つて、二人の兄を楯をつきたるにぞ、兄も然らばとてクメ子の言ふがまゝに爲し置きたり。

△良人の病死　斯くてクメ子の肝煎りも其效なく、去る十五六日ごろに到ては、夫は更に口さへ利けず。自分が三度の食事も忘れて、夜も一睡だにせず、看護に手を盡せし甲斐もなき人の數に入りしより、その死骸に縋りつきたるまゝ泣き崩れ居る葢一輪、色も褪せて聞くからに、あはれは一入まさりけり。

雜錄

歌人逸話

大川城山

一二　元政上人

元政は伏見深草瑞光寺の僧なり、其隨筆中の名高き壁書の一節に曰く

膝を容る、二枚敷、土鍋一つに埒あき、正月とも思はず、雜煮くはぬ身には、聞かれまいとも言はぬ鶯の初音、心よく聞き、夜着、蒲團持たぬ家には、見られまいともいはぬ依怙ひいきない窓の月を眺め、……盗せぬ身なれば、人も咎めず、極樂へ行て樂しみたいと思ふ慾なければ、地獄へ落つる恐れもなし、死ぬる迄生きやうと思へば、年のよるをも、へちまとも思はず、年を數へた事なければ、何歳になるやら知らず、覺えたこととなれば、忘れたこともなし。

あゝらくや人か人とも思はねば、
人を人とも思はさりけり。

松立てす注連かざりせす餅つかず、
かゝる家にも春は來にけり。

又辭世に、

深川の元政坊は死なれけり、
わか身ながらも哀れなりけり。

一三　下河邊長流

長流は隱士にして、もとより妻子なし。難波に居り静かに書を讀み、中にも歌を好み、萬葉集、古今集等に精通す。其學問自ら遠近にきこえ、弟子いと多し。性、世に諂らはぬ人がらにて、心の向かぬ折は富家の招きに應せず、訪ひ來るものにも物いはず、枕を高うして、或は眠り、或は書を讀み、悠々自適日を過しけり、德川光圀、其才を知り、紙筆を賜ひて、萬葉の註を乞ひしかども、心におもむきたる時は、一二首つゝ註して、又怠たりがちなりしかば、果さずして、貞享三年、身まかりぬ。

述懐

桂川心にかけし一枝も、

折られぬ水に身は沈みつゝ。
遂に我が着てもかへらぬ唐錦。
立田や何のふる里のやま。

これらの歌によりて、考ふれば、始は出世の希望ありしかど、其才を知る人なければ、思ひ棄てゝ、隱士に終りけるなるべし。契沖と交り深し、遺稿を晩華集と云ふ。

一四　戸田茂睡

茂睡は江戸淺草の人なり。或時

ちりの世と思ふ心のつもりては、
身のかくれ家の山となりけり。

此歌、天聽に入りて、叡感ありけるより、世の人、「かくれ家の茂睡」と呼びけるとぞ。金龍山、聖天祉に石碑を立て自詠を刻して曰く、

あはれとは夕こえて行く人もとへ
まつ乳の山にのこす言の葉

二五　荷田春滿

春滿は國學復興の祖にして、歌は主とする所にあらざれども、又凡ならず。

今朝みれは昨日の淵はあさか潟
しほのみちひぞ世の習ひなる

又、中世以後、淫靡、風をなせるを憤りて、生涯戀歌をよまず、其家集を見るに、當座によせ、戀の題を探りては、其物を雜になしよめり、假令ば、唐によする戀を雜によめるは。

仇むくう思ひ巴提使にたくへては、
唐もつたなきものとこそみれ。

日本紀、欽明の卷の故事によまれし、學者のしわざなり。

一六　僧澄月

澄月、年十三にて志を立て、叡山に登る、路錢悉く盡きて飢甚し、且つ知已なき故、寺門に紹介するものなし。されば、一宿すら許されず、大に歎息して、はや黄昏に及ふ。いよ〳〵窮して佇立す、一人の僕之を見るに忍びず、竊に泊せしめ、其親しき僧を賴み辛うして、滯留成る。かくて普く碩學高德を求む

るに、かねて思ひしに似ずして、絶て智識なかりしかば、本山の衰頽、宗門の末季なりと慨き、愁然として再ひ志を變じ、遂に風流に遁れ、武者小路實岳の門に入りて和歌を學び妙境に達す。

鼠

おこたりのひまを鼠のあながちに
過き行くものは月日なりけり

石

あすか川せにかはり行く淵の石の
しづみはてぬも世の中ぞかし

千鳥

和歌の浦の音は昔にかよへども
およばぬ波に千鳥なくなり

一七　岸本由豆流

由豆流は、古今集増註の著者なり。されど其半生の書は、皆、村田了阿と北愼言との助を借る。此故に小林元雄、由豆流を罵りて、狂歌、

でくの坊己れ動くと思ふなよ
左は屋根屋右はさせる屋

言愼は屋根屋三左衛門と云ひし、屋根葺を業とし、了阿は煙草屋村田某の次男なり。而して、由豆流は人形の胴をも使ふよしなれば、かく人形使の綠語もてつゞけたるなり。

自然と和歌

野村傳司

吾輩の信ずる所では、和歌は誰を師とし誰を宗とすると云ふ如きは、決して有るべからざることと思ふ只吾人の師に就て學ぶ所は言葉使ひ丈であつて、是だけはどうしても、先人の助けを借りなければ出來ぬと思ふ、其着想に至りては一意に自然を師とすべきである、實に自然に吾人が、幾百年幾千年聲をからし筆を禿して讃美した所で、其千分の一も歌ひ得ない程の好題目を有して居る。

ある人が景樹に古今集中どれが一番先生の氣に入つ

たかと尋ねたら、

いそのかみふるの社の榊葉は
　神の御前にしげり合ひにけり

といふのだと云つたそうだ。又然らば君の歌ではどれがと尋ねたら

筏おろす清瀧川の早き瀬に
　ながれて下る山吹の花

だと云つたさうだ、吾輩の考ふる所では兩首共惡い歌ではない、しかし之等を以て集中第一等とするのは首肯する事は出來ぬと思ふ、然らば何故に景樹は之等を殊にすぐれた歌としたゞらうか、外に一首もよき歌はない故であらうか、吾輩の推量する所によれば、必ずしも景樹は之等を以て第一等とはしなかつたらしい、只かゝる奇警な言を吐いたのは一意自然の尊ぶべきを敎へた者ではなからうか、實にこの二首は自然と云ふ側から是れは成程自然である、只自然で何のかざり氣もない、言ひ廻しの達者な所もない、然して其間に一種言ふ可らざるの妙味が有る景樹は世人が往々文字の末にのみ拘泥して、其の材料を天地人生の自然にとる事を忘るゝのを慨して言つた言葉ではなからうか、しかし之れは勿論吾輩の推察に過ぎないから、必らず左樣だと云ふのではない。

實に自然を寫すばかり人の心を動かす者はない、何でもない事でも自然を材料にした者は生氣があると思ふ、吾輩が始めて萬葉を讀むだ時、何卷だつたかは忘れたが、

足曳の山にすめばやみやびなみ
　我するわざをとがめたもふな

といふのが有つた、これはある田舍人の、朝廷に貢をする時に、献じた歌で、其意は何の事もない只、田舍人である以上、殿上人の如きみやび心もない者なれば、或は貢の品の中に氣に召さぬ所があるかはしれぬけれども、元が田舍人だから、そう／＼咎めて呉れるなと云ふにすぎない、然るに吾輩のこの一寸した歌に非常に感じた、人麿、赤人或は其他の大家

の歌をも、凌ぐ位に吾輩の心を動かした、自ら其何の故あれば、かくばかり引力を有するかと云ふ事を疑ふた、夫で吾輩はすぐその事を我師に申した所が、師もよい歌だと云はれた、然るに今になつて、考へて見ると、全く其歌が人間の自然を寫して居るからだと思ふ、實に田舍人の心は之に外ならぬと思ふ、この自然の心を僞らず、飾らず、只率直に言ひ出したる所、直に人の肺腑に徹するが如しだと思ふ、之は單に和歌のみに限る事ではない、有ゆる文學は勿論、美術、音樂の如きより、生花、茶の湯の如き娛樂に至るまで皆自然を元とせざれば、全く不自然に流れて、一文の價なき者となる、吾輩は茶の湯、生花の如きは全く門外漢だから、彼是云ふの權利はないけれども。如何樣に考へても、生花の如きは不自然なる者と云ふ、眞正の生花と云ふ者は全くあんな者だろうか、曲らぬ性質の草木迄も强いて曲らせるのが生花の眞正の目的だらうか、凡ての草木を皆一つ模型に入れた樣にするのが眞の生花だらうか、草木の自然の性質に逆かず、其間に無理をせずして人工は只其草木に具有する自然の美を發揮する丈に止むるのが生花の本旨ではなからうか、我輩は今の生花には非常に疑ひを抱いて居る、茶の湯に至つては全く世の中に仕事のない人がひまつぶしにする仕事で美術的眼孔を以て彼れこれ云ふの價値はないと思ふ、しかし、之は現今の茶の湯に就て云ふので、本當の茶人と云ふ者はそうでないかも知らぬ、

話がつい橫道には入つたが、又和歌の事になつて、世の滔々たる歌よみと云ふ者を觀察すると全く今の生花の如き弊に陷りて不自然極まる歌を詠んで得々たる者が多い、と思ふ其も意味が兎も角分明なる者は宜いが、間には語格を外し。前後矛盾した三十一文字を列ぶるに至りては言語同斷と言ふべきである、こんな種類の人が、何千人何萬人居た所で、明治年間の和歌の盛衰を卜するに足らぬ、かゝる似而非なる歌人を除いて、意味の通ずる歌を集めて見た所で其中に眞正に自然を寫して感歎の餘案を拍て快

哉を呼ばしむる者果して何首あるだらうか、考へて見れば明治の歌壇は心細い限りではないか、要するにかゝる事は人々が、自然をいかばかり重ずべきかと云ふ事を知ないのと和歌を以て生花茶の湯等に同じく一種消閑の具と思ふて居るからである、實に怪しからぬ事ではないか、自然のいかばかり重ずべきかと云ふ事を知らないのはひとり和歌ばかりではない、俳句なども其弊に陷つて居ると思ふ、其自然を重んじない證據は、自然以外につとめてある意味をつけたがる習慣のある事である、たとへば、

古池や蛙とびこむ水の音

の如き、只之丈自然を寫したので澤山なのに其外に色々な意味をこぢつけて居たとやら、又

世の中は三日見ぬ間の山櫻

の如き、俳句としては嫌味多き者を矢鱈に有難がつた事など、又和歌で云つて見たら有名な

ほの／＼と明石の浦の朝霧に
島かくれゆく舟をしぞおもふ

の如き、俗人は此歌に現はれた丈の意味及び此歌より自然に想像され得べき自然の景のいかに閑雅で、いかに舟が霧をへだてゝかくれ行く其處の處が詩的であるかと察せずして、其意味以外にある神秘的な意味をこぢつけ樣とするのは吾輩の與せぬ所である要するに今の歌人の頭に、自然の尊ぶべきを悟らしむるに非れば、歌運の成功は到底不可能の事だとおもふ。

第二　歌を消閑の具と心得て居る人は誠に言語同斷斯道の賊と云はぬければならぬ、元より凡ての歌人に專門家になれとは決して云はないが、しかし一首の歌を詠まんとする其瞬間は眞面目に研究して貰ひたい、眞面目に研究すれば決して其間に不自然も出なくなるだらうし又意味も通ずる樣になるだらうと思ふ、しかし意味は分つても、分らぬでも宜しい、自然に叶はぬでも關はない、只三十一文字並べさへすれば其で滿足だと云ふ輩は余輩の眼から見れば誠に好尙の低い、趣味のない、劣等の人として、少し

可哀想に思はれる、もしかゝる人が老人にありとすれば未だしもなれど、年の若い青年婦女にかゝる不心得の者が有りとすれば實に國家の米虫と云はなければならぬ、今更云ふ迄もないが、天地を動かし鬼神を泣かしむる歌がどうして、誠心誠意ならぬ又自然に頓着せぬ人の口から出やうや、要するに和歌のみならず、凡ての文藝は其基礎を自然におくが肝要である、自然に叶はざれば全く取るに足らぬ、其技術とか、熟練とか云ふ者も自然に合して後の事であると思ふ、技術の事に就ては又重ねて吾人の意見を申述べる事としやう、

婦人の手

外山港街

一口に婦人の手と云へば、人をして忽ち、其纖弱にして若木の新芽の如く、僅かの物にも重さに堪へず嫋々として他の憐みを受くべきものゝ如くに想はしむ、其の色白く、細長く、ふしなくして汚なく、麗にして、美はしく、粧ひあるは、また人をして其いたはるべきを想ひ出さしむ、

婦人の手は其の柔軟なることに於て、而してまた其の形のやさしきことに於て、其の曲線の配合とやら云ふべきものゝ工合に於て、此のむくつけき世の中に柔和の心を與へ美麗の感じを與へ、飾りなき世の裝ひの一部を司どるを見る、

婦人は其形容の美はしきが如くに、其の四肢の一たる手もまた美はしきを保たしめ、柔しきを勉めて、天地の間に柔性の美を發揚すべきものにてはあれども、由來『艶麗はいつはり、美色は呼吸の如し』と云はれたり、可憐なる柔性の手も其の操作の果は、單に呼吸の如く空しきものにてはあらざるべきを想はしむる理由あるを見る也、

柔さしきは婦女の特性也、慰めを與ふるとは婦女の特性也、然り而して其克く柔軟にして世に慰を與ふることも婦女の手の將さに負ふべき責務なるが如し

拾五圓の生活程度

面白く暮せる案　横山痩月

△豫算金額　は月初め或は各自の便宜の時（給料受取日）に於て、豫算表に據り之を區分し、費目及び豫算額を記したる紙製金袋へ夫々納れ置くべし、而して支出する毎に其袋に金額費途を逐次記載して殘額を示すべし、又一家の憲法として、彼是費目の流用を嚴禁し、豫算超過の爲め、決して他の金袋へ手を出さゞるものとす、抑々一定の收入あるものは、必ず亦一定の支出を要し、規律ある支出は規律ある生活にして、規律ある生活は則ち最も愉快なる生活にあらずや、

△食物　豫算額の範圍内に於て、自己の嗜好する材料に依りて、其季節に應じたる獻立表を作り、是に就きて賄を爲さしむれば大に便益あり、自炊生活又は普通の賄付下宿の如きは、理想的生活の要素に欠ぐ所ありて不可とす。

△衣服　毎月調製の必要なきものなれば、蓄積法により、所要の額に達するを待ちて之を調製すべし、而して平常着にはネル類を以て、曾て讀賣紙上に掲載ありし縫目なしの仕立方になすを要す、ネルは稍々高價なるが如きも寒暖共に着用に適し「且つ衛生上體温の保護は勿論洗濯容易にして、衣服を最も有利に活用する上に於て、余はネル萬能論を叫ばんとす、實用上給の如きは全く無用のものたり、又洋服の平常着としては、經濟並に便利の點に就て詰襟最も可なり。

△住所　屋賃の安き場末の地を選むべし、斯の如き處多くは閑靜の地にして、一日の勞苦を慰安すべき樂天地を求め得べし、居屋の外幾坪の地所を借り能はゞ最も妙にして、此處に草花を自ら栽培して娛樂と運動とを併せ得らるべし、或は交通不便ならば徒歩主義を採り、之がため空費したる時間は自ら運動の時間となるべし。

△娛樂　成るべく安價にして不健全ならざるものを求むべし、日曜一日の遠足、汽車旅行、其方法によりて妙なり、雨の夕は寄席また興あり、緣日もの・盆栽を机上に置きて讀書の眼を慰め、或は新聞雜誌へ投書するも亦樂しみとするに足るべく、詩歌俳諧等の風流韻事あれば最も妙にして、炎暑に苦しむの時若し夫れ一竿の風流あれば更に妙ならん。

△讀書　は毎朝夙起して、水浴又は冷水摩擦の後、食前に之を成すを可しとす、夜は遲くも就眠前一時間を限り、假令止め難き感興あるも斷じて割愛すべし、然らざれば終に不眠症に陷り易し、而して書物は或る特殊なる硏究書籍以外の新刊物及び雜誌等は貸本を讀むべし、これ日に幾何の借料を支拂ふべきものなること念頭にあるを以て熱心に通讀するものなり、貸本なければ共同購讀を可しとす、總て讀書の際は豫め机上に手帖を備へ、快心の章句等拔萃を力め他日の參考に資すべし。

嬰兒が初めて生れ、母の手に抱き擧げられしより、其の漸くにして人と成り、世に立ち働くに至るまで、柔知なる手は實に彼等の力たり、また其の慰めを與ふる泉たりし也、鬼をあざむく偉丈夫も軟き一肢の手には俟つ所あり、彼等の心乃ち之によりて躍り樂しみ且つ舞ふが如くに喜ぶを見る、箴言に云はずや『其の價は眞珠よりも貴し』と、彼女の夫の心はかれを頼み、その產業は之によりて將さに乏しきことあらざらんとはする也、賢き婦女の『存在の間は夫に善事をなして惡をせず』手もまた夫の爲に働きて、其の家に善を勸む、麻を採り、綿を紡ぎて衣を作り、遠き國より運ばれし布を裁ち之を縫ひもて溫暖を人の體に與ふるものは彼女の指の業にあらずや、夜のあけぬ先に起きて家人の爲に糧を作るも彼女の双手の業にあらずや、燈火は終夜消すことなく、獨り其の許にはたらき、ほころびたるを繕ひ、缺げたるを補ふも、また彼女の指手の業にあらずや、



婦女は其存在の位置の上より此の世の乏しきを補ふ如くに、其の手の業は人の乏しきを補ひ、また其の冷ゝ渡る人の心を溫む、家人は彼女の手業によりて樂み、世は彼女の業によりて美はしく飾らる、市に坐する夫の顏の誇りがなるも彼女の縫ひし衣の故にあらずや、官廳に坐する人の樂しき有様も、彼女の爲せし糧の故にあらずや、妻の作りし褥の溫かなるは我にとりては春の日の暖

かなるにも優りて心地よく、彼女の汲みし一椀の冷水も我にとりては甘露の如し、見よ產れ出たる嬰兒は、彼女の手により、力となりて起つにあらずや、彼女の指に導かれわづかに足を運ぶにあらずや、斯くて彼の女の手の業は春の花の美はしきが如くに兒を作り裝はしむるものあるにあらずや、

無邊なる天地の大も菫の一花以て克く之を飾るべし一塵の雲また克く之が陰影を作るなり、細くして軟かき婦人の雙手またよく人世の冷却を溫め、凄慘を慰め、且つ之を烈しき景色より逃れ出でしむ、大なる天地は細き一花の集まれるなり、廣き世間は狹き婦人の生活によりて蘇生へる、而も只だ其の一指の彈く力の强き故にあらずや、

秋の七草

奈良縣五條女子手藝學校　敎諭　今西桃里

秋の野に咲きたる花ををよびをり
かきかぞふれど七くさの花
萩が花尾花くず花瞿麥の花
女郎花また藤袴朝顏の花

これは山上憶良の歌ですが、實に多かる草花の中にも、あはれにやさしいのは此七草である、吹く風凉しい秋の一日、野邊を逍遙して、此七草の花束を作り、或は花を或は枝の形態を比較し、進んでは、歌や詩の料として、自然の妙と自然の美を愛せられんことを、私は諸孃に勸めたいのである、それでこゝに少し、七草のことを述べませう、

◎萩、胡枝子、荳の類、

萩の花は大方紫なれど、亦白きもあります、品類には宮城野萩、糸萩、山萩などですが、何れも愛すべきである、夜の垣などに造ゐいよろしく、なべて叢り植えたる方美はしいです、

秋の野にさける秋萩秋風に
なびけるうつに秋の露おけり（家持）

白萩や露一升に花一升

◎尾花又すゝき、芒、この類を禾本科といふ、
尾花は山野至る處に自生してゐます、花は美はしとにはあらねども、亦何んとなく秋の風情なるを覺ゆるのである、庭にはたかのはすゝき、しますゝきなど葉の綺麗なのが植えられてありますが、是もすゝきの變種であります、

君がうゑし一むらすゝき虫のねの
しげき野べとも成にけるかな　（有助）

◎葛荳の類
葛は蔓草である、和歌では葛の葉の裏見といひて、人の恨みに譬へて居ます、

たまさかにゆきあふ坂の眞葛原
まぢらう若しうらみはてしを

といふのが秀句として名高い、葛の塊根から葛粉を製する、其中吉野葛を上品とする、住古ふぢごろもと云ふのはこの葛の皮から織つたものであるさうです、

◎瞿麥、撫子、石竹の類
なでしことはよくも名づけたるかな、げに可憐の花である、花山天皇の御製に

思ふこと今はなきかななでしこの
花咲くばかりなりぬと思へば、

てふ御歌は御子の頼母しきを詠まれたのである、

◎女郎花、敗醬、をみなへしやをとこへしを敗醬の類と云ふ、
この花に似て白きを、をとこへしと云ふ、いづれもやさしき花ですが殊にをみなへしの方一層可憐である、

ひよろ〳〵となほ露けしや女郎花　芭蕉
男へし露にもぬれぬけしき哉　梧十

◎藤袴、藤草、菊の類
古來賞せらるゝは花よりも其香である、葉、枝を乾して之を簪につるしますと香氣久しく薫ります、この種にひよどりはな、さはひよどりなどありまして、一寸まぎらはしいですが後者は、香氣がありませぬ、

秋風はほころびぬらしふぢはかま
　つゞりさせてふきり／＼す鳴く（古今集）

◎朝顔、桔梗、桔梗やさはきゝやう、つりがねにんじんなどを桔梗の類と云ふ、

山上憶良が歌のあさがほ、はぎゝやうのことです、如上のさはきゝやうは、濕地に群生し、誠に綺麗ですが、其花をきゝやうと比較しますと、少し差ひます、即ち花の先端がいくつにも裂けて居ます、亦つりがねにんじんは、大方きゝやうに似て居ますが、しかしきゝやうよりは極く小さく、花も一枚に澤山ついて居ます、なべて桔梗の類は、所謂桔梗色が多いやうです、

きゝやうの花咲く時ボンといひそうな　千代

習慣的薄志弱行

黄離女史

李斯甞て小吏たる時、吏舍の厠に住める鼠が不淨物もて其腹を充たし、又しば／＼人影に恐るゝを見たるに、又ある日隣倉に入れば、此なる鼠は積みたる俵の米を食ひて、人影に恐るゝ色さへなかりければあゝ人の賢不肖は實に鼠の如きか、其居る處によりて定まるべしとて、大に志を起し、遂に荀卿に學び始皇に用ひられて、他日の成効を得たりとなむ、其人物と事業とは論外なれども、さばかりの人の着眼は眞に非凡なりと云ふべし、

人の薄志弱行は、實に其周圍の人に因りて習慣的に養成せらるゝこと、厠中の鼠にひとしかるべし、彼等は他人の篤志勵行を決して聞かざるに非ず、之を聞きて決して可とせざるには非ざれども、恰も耳遠き古人の傳記をよむらむ心地にも、我が之に傚はんことを勤めず、吾が志を立て、吾が責任を重んじ率先して好摸範を作らんなど云ふことは、露思はざらんやうに、はた一時は思ひ起すことありても、程すぎぬれば打ち忘れたるやうに何事をなすともなく其日を送る人多きは悼ましきことなるかな、

若しこの一人を拉し去りて、勤學篤行者の群に置かんか、天性下劣の人に非ざる限りは、必善化せらるべきを、不幸にしてかの前途有望の才を抱ける者が薄志弱行者の群中に投ぜらるれば、遂に厠中の鼠たらざるを得ず、何ぞ自ら脱する道を知らざる、何ぞ他人のかゝる不幸を憐む氣慨に乏しき、あゝ皆習慣の罪なり、この惡習慣を養成して、一時の安を貪りつゝ老成人となりたるものは、一點矯風の爲に勤めず、依然として惡習慣の傳習者たるに非ずや、故に壯年有志の人もいつしか利害を考ふる人となりて、曰く、道の爲に苦みて惡まれんよりは、寧ろ安逸にして上意を枉げざるに若かずと、止むを得ずして其轍を履まざれば、則ち平和を敗る虞あるなり、されば偶進取を好み、改革を企てんとする慷慨者あれば、反目嫉視恰も宿怨ある人を見る如くに之を斥けて、衝突妨害相次ぎて起る、是實に眞理の戰なり、かくして猶屈せざるものは、男女を論ぜず眞の勇士たるべきも、多くはこの極度の反抗に遭はゞ、其意外の甚しきに驚きて涙を飲みつゝ退かざるは非らず、妄りに人を優柔無能なりと咎むる勿れ、其多くは實に上なる人の身を以て下を率ゐず、却りて其活動の道を閉づるに非ずや、

さはいへど壯年者の無能亦決して恕すべからず、出來ざるまでも其志は高く、其學は廣く、其行は潔くして、ある希望の下に進まずんばあらざるに其多くは卒業免狀を得んが爲に學を勵み、其志は早く伉儷を得んが爲に悶へ、其行は男子は女子に、女子は男子に交際多きを譽とするもの幾何なるを知らず、畢竟學術は身を修むる基なる事を知らざるが故に勉めず、勉めざるが故に暇あり、暇あるが故に思を八面に馳せて、樂を外に求めんとするなり、かくて一旦其志の崩るゝに至らば、何を苦しみて學を勵み、行を潔くして、風を化せんと慮る遑あらんや、かゝる友にまつはりて起居寢食を共にせばいつしか鋭敏なる感覺を失ひて全く厠中の鼠たるのみ、豈大なる損失にあらずや、然れども人の感能

は尙知覺あるべし、惡を疾みて善を喜はざるもの殆んど無かるべし、然らば矯風の實擧らずといふ事なからむ、久しく習慣に因りて養はれたる薄志弱行者も、長者の敎導道に適はゞ、豈反省せずといはんや進取の氣象は死するまで養ふべく、改革は日に時に行ふべきものたり、年長けては冷靜となる抔いひて何事をも爲ひざるは片腹いたき僻事なれど、年若くて熱誠なるべき人の、智覺すらなきやうなるは何ぞや、總ての事物に就きて其善惡を觀察する丈の力は三歲の童兒すら之を備へたれば、まして相當の敎育あるものは、常に其觀察力を銳敏にして、我が周圍の人物に注意し、必薄志弱行者の群に投せず、必率先して習慣的弊風を改めんと勤ざるべからず、思ふ事その七八分は敗るゝものと定めても、猶其殘りは行はるべし、されば各自此精神にて世の矯風に勤めんと願はゞ幾度か妨げられ、幾度か失敗を招くことありとも遂には其効を見るべし、要は只精神の有無にあるのみ、

宮中の女鑑

典侍	從三位	高倉壽子（新樹）
典侍	從三位	柳澤愛子（早蕨）
權典侍	正四位	千種任子（花松）
同	正四位	小倉文子（緋櫻）
同	從四位	園祥子（小菊）
同	正五位	姉小路良子（藤袴）
同心得		四五辻正子
御用掛（掌侍上席）	從五位	壬生廣子（玉椿）
掌侍	從五位	小池道子（柳）
掌侍取扱	從五位	中山榮子
同	正五位	樹下範子（楝）
權掌侍	從五位	藪嘉根子（紅葉）
同	從五位	北島以登子
同	從五位	津守好子（若菜）
同	從五位	吉田鈺子
同	從五位	六角章子
同	從五位	山川操子
同		粟田口綾子
權掌侍取扱	正六位	香川志保子
同		日野西薫子
七等出仕（命婦上席）	從五位	堀川武子（菊）
命婦	正六位	西西子（萱）
權命婦	從六位	生源寺伊佐雄子（梢）
同	從六位	平田三枝子（蔦）
同	從六位	吉田愛子（薫）
同	從六位	樹下定江子
同	從六位	大東登代子
同	正七位	藤島竹子

婦女と書籍

殘夢逸人

學者シユーベルの言に、凡そ世の中に書物よりよき物はあらず、其仔細は、よき書物は、よき精神の發表、肖像、反響にして、其良き精神を寫したる書物なるが故に、恰も、よき精神の鏡も同樣なればなり、と云へり、實に善き書物を見れば、心氣を感憤せしめて、自ら壯快なり、之を物に譬ふれば、高尚なる心を以て、精神高き人と差向いて、談話するも同樣なり、又よき書は、徒然を慰むる爲の良き友なり、談話は人の心に入ること淺く、其考へ自ら浮き立つも、書物に讀みたることは、心に感觸すること最も深くして、永く記憶る殘るものなり、

然れば婦女子にも、書物を讀むことは、最も要用なり、凡て書物は、思想の地平を廣め、經驗の積むに隨ひて智識を增すものなり、就中、片田舍などに住む、見聞狹き婦女子に在りては、書を讀むの利益、最も多く、舊弊頑回の迷ひ失せて、無益の御弊擔等することなきに至るべし、故に此等のことにて、讀書を好む爲に生ずる利益を擧ぐれば、一部の書物となるほども有るべし、若し是まで書を讀む習慣なからん人は、速に其習慣を作り、其習慣ある人は、之を癈めぬやうに心掛くべきなり、

既に書物を讀むことの利益あるを知らば、先づ第一に心に起るは、如何なる書物を讀むがよいかとの問題なり、凡そ書を讀むに方りて、其種類を撰ぶことの最も要用なるは、論を俟たず、古人も、惡き書物を讀むは、讀まぬ方增しなりと云へり、されば婦人殊に幼少の婦人に在りては、兩親に相談し、又は目上の人に謀りて、書物を撰み、假にも德義を損ふ如き書物、亦は法式に違ふが如き書物を讀むべからず、書を讀むの初めに於て、惡き書物を讀みたらんには先入主となりて、其旨意、精神をなし、將來に於て、甚だ不爲なる播種をなし、清淨無垢の本心に、再び洗ひ落し難き汚點を附くるなり、之に反し、最初の

書物善良なる時は、後に豊饒となるべき植付をなして、一生の幸福、是より生ずるに至らん、
扨、其書物は、奈何なるもの、が最もよきやと云ふに至りては、直に明言するに苦むなり、何となれば、人の嗜好、塲合、閑暇の有無等に因りて、夫々撰方あればなり、併し乍ら、概して云はゞ、少女又は人の妻、あるは母たる者の本箱には、善良なる、眞面目なる、必要なる書物が、教科用の書物の外は、决して所藏すべからず、少女書を讀まんことを望まば、先づ歴史中の、最も簡單にして解し易きものを撰びて與ふべし、此種の書物は、少女の爲に、注意を惹くこと深く、加之も智識を益すこと多し、たとへば、歴史を讀みて、我が國の事柄を知るは、最も必要にして、國を愛するの念之なり起らん、少女が母の膝に在る頃より、愛國の心を養成することの、國民の義務たる事を忘るべからず、自國の歴史に續ぎて、近國の歴史に及ぶべし、我が國との關係日々深くなる所の近國の歴史を讀み、其國の成立、人情、風俗等を知り、古と今とを比べ、我が國と他の國とを參へ考ふるは、最も肝要のことなり、次に讀むべきは、大人君子の傳記なり、傳記は、我が心に模範を與へ教訓を捧く、旅行に關する書物も、亦大に利益あるものなり、人の旅行日記等を見れば、甚だ少き費用にて、自國を漫遊し、世界を經歴するの思あるなり、少女の教育は、文學の書に據らざれば、完全の成功を見ること難かるべし、左れは一家の家政を執る所の婦女は、こゝに注意し、其本箱には、恒に善良なる書物を充たさんことを怠たるべからず、
玆に尙一言ずべきは、想像の書物、即ち喩言、稗史、小說等の善惡なり、此種の書物は、老年少女に係はらず、一般に好みて見るを常とするが故に、予は此等の書物を、强ち良家の本箱から取り除けよとは云はず、是も亦要用なしと云ふべからず、或る小說家の言に、「小說的事故は、彼と共に德義を過たしむ」と云へり、思ふに、想像的書物は、識別の習慣、及び鑒定の嗜好、感觸の高尙等を發揮するの利益あるべし、

小說は、人の情慾を慰め、且つ感奮せしむ、然しながら、德を維持する所の堅固なる情性と、本原の嚴格とを取り除き、其靈魂を和らげ衰へしむる力あるが故に、少女は之を讀みて、漠然たる感情を起し、其心擾亂して、空想を激發し、德義の意志を消耗せしむること有り、德義の意志一度去らば、眞實の光輝は、虛妄の德の粲爛たる着色に因りて消え、假扮の美麗なる色の下に不德を彩りつゝ、良知を破壞するに至るべし、之を約言すれば、小說は、人の性行を破壞する虞れあるを以て、之を讀む婦女子は、自ら損はんとする域に近づくが如し、いとも危き業なり、此故に世の學者は、其慘毒を避けしめん爲に、別に有益無害の小說を作り、婦女子の讀むべき料とはすべきなり、これ所謂『正義小說』と呼ぶ所の、小年文學書なり、是等の書は、讀みて害なく、益多し、幼年の婦女が、時に或は睡魔を驅り、徒然を慰むる料に供ふるも可なり、凡そ讀みて益なき書は、讀ぬに劣れり、セビネー女史が何事も人を益すると無き書は、『精神に青白き色を與ふ』と云たるは、至言なり、凡そ書を讀むの要は、須らく先づ精神を落ち着け、これを讀みて、其書のよき所を見出し、又惡き所を知り、美を取り醜を斥くるに有り、若し之を知らす美醜の識別なくして讀まむには、千冊萬卷の書を讀むとも、將た何の益かあらん、

書物は、已れ一人之を讀まんよりは、人と共に讀むに如す、其仔細は、人と共に讀まんには、自然、互の眼を着くる所に違ひありて、我が感觸せし所を人に話し、人も亦、其感觸せし所を、我に話し、互に相談論して、益を得ること少からざるのみならず、讀書の面白味も、亦是れに倍するあらん、書物を讀みて人に語るは、學者顏して、其學識を誇るに似たれど、其實決して然らず、眷族朋友等にて、業務に忙はしく、書を讀むの暇なき者に之を語り、これに依りて、我が心に疑ある點を質すは、大いなる利益あるなり、よつて、讀む所の書物は、如何なる種類に係はらず、都て完全なりと思ふべからず、若し總て

の著者は、神聖の傑士にして、其著す所の書物、完全無缺なりと盲信する時は、大なる間違なるへし、書物を讀まば、先づ心により會得して、他の書物にて見たる所のもの、或は其事につき、既に我が心に會得したるものと引き合せ、道理に從ひて判斷を下すべし、次に書を讀まば、其書物の内にて、我心に感じたる事柄を書取ることの習慣を付くべし、若し書き取るへき手拙きときは、假に鉛筆を以て、我が心に感じたる要所に、圈點を打ち、又は線を引き、後日再讀するに便ならしむるやう注意しおくべし、普通に便益多く、座右に缺くべからざるは、完全の字書と傳記、歴史、地理書、及び地圖なり、此等の書は、書を讀むに當り、常に入用なれば、之を座右に缺ぐ時は、大に不便ありと知るへし、書物を讀むは徒然を慰め、時を過す爲に非らす、以て才智を磨かんが爲なり、

終りに何一言すべきは、若し書を讀むの時間多くなき人は、宜しく一時に少しつゝ篤と讀むへし、多く讀む時は、忘れ易く、疎漏に讀まば、心に入らぬものなり、

醜きもの

高橋五子

女の憤りたる面ばかり醜きはあらず、天性柔和なるものには、ふさはしからぬがゆゑなり、男も醜くからぬにはあらねど、元剛きを以て性とすなれば、女子ほどにはあらず、

かく醜きことゝ知りながら、一日のうち或は一時間の中に、幾回となくこの姿におちいり、終には猛き虎の如く、或は狂へる猪の如く、己を怒らしむるもの將た己を耻かしむるものを求めて、ありとあらゆる嘲笑罵詈を加へてあやしまざるは、いとゞ醜きを重ぬるものといふべし、

およそ人、故なくして憤るものにあらず、己の意を刺撃すること、己の心に不穏を興ふる原因のあるに因るものなれど、亦あながちに其の原因の惡しくて

のみ起るにも限らず、如何に吾を刺撃し、吾に不穏を與ふるものありとも、己れ冷かにしてこれに應せざらんには、如何で其の原因をなすべけんや、

火の燃ゆべき材料なき所には、火を投じたりとて、燃え上る理由なし、况んや冷かにして、水を灌ぎ置く所をや、さらば憤りは、人にせしめらるゝにはあらで、自ら招くといひても可なり、

謙遜にして、にこやかなる人に對ひて、誰か凌辱を敢てし、罵詈を加ふべき、驕傲任意のふるまひありてこそ、わしざまにも云はるれ、されば驕傲と任意とは、憤りのほむらを起すべき燃料と辨ふべし、この意を心得たらんには、愼しまれぬといふことなし、試に己の愛するもの、或は己の尊敬する人より、罵詈凌辱せらるゝときは、たとひ其の心には怒りてもそを面色あるは語氣、或は擧動には顯さゞるなり、かく或場合には忍耐せられて、或場合には忍耐せられぬとは、如何なる心にかゝはらむ、されば憤は心の置方一つにして、憤らずともすむことなるを、復讐

せざるを腑甲斐なきものゝやう心得、面色變るさへ醜きに、口を極めて嘲笑罵詈するは、忌はしきかぎりならずや、怒りて己を利すること一もあるなし、多く怒れば怒るほど損害も多かり、

まして女は、其の心優しく、其の貌のうるはしきを貴ぶものなるに、醜きふるまひをして、一時の勝利を得たりとて、何のほこるべき所かある、下賤の女なればこそ、いさゝかのことにつのめだちても見ゆれ教育あるものゝ、かりそめにもかゝるさまなすべきことかは、

されど、量せばき女の性として、陷り易きは此の罪なるを、いかにしてまし、故にもし己凌辱するものあらば、温和を以てこれに對ひ、罵詈するものあらば、沈默を以て對ふべし、多く言を弄して人を耻かしむるものは、強きに見えて強きにあらず、温和にして沈默を守るものこそ、弱きに見えて強きなれ、柔よく剛に勝とは所謂此ふるまひにして、女子に尤もふさはしきことなれば、いとも心得厚かるべし、

名譽の女教育家

泰宮内王親殿下御教育掛に新に命ぜられし女教育家あり、芝區西久保神谷十八番地照千三十と云ひ、福井縣武生の人長谷川幸成氏の長女なり、廿七年中郷里の高等女學校を卒業して、直に女子高等師範學校に入學し、卅一年全科卒業後母校なる福井女學校に教鞭を執り大垣女學校に轉じ、三十四年九月華族女學校教授に任ぜられ、去四月迄在職せしが、同校が學習院女學部となりしと同時に、廢官となりたり、高等師範學校を卒業せし年、東洋移民會社員迎兵衛氏と結婚したるも、同棲僅に一週間、鸞鷟步趨ならんとして風波相隔つ數千里、夫兵衛氏は社務を以って濠洲クヰンスランドに赴き、在留四年歸朝せし時は、女史も新に華族女學校に奉職せし折とて、西久保に家を構へ、漸くに家庭の人となるを得たり、然るに樂しき現實は悲かりし懷舊よりは短かくして、卅七年兵衛氏の名が一年志願兵の中尉として軍籍に在りし爲め、二月滿韓の風雲急ならんとする際、召されて韓國に渡り、轉戰十數ヶ月遂に奉天會戰の際敵彈に殪れ、勳五等功五級の名譽ある紀念、これ女史が遣る瀬なき涙の種とはなりしなり、去四月久々にて閑散の身となりしを幸ひ、亡き中尉の遺骨の地たる久米留を訪ひ、歸つて後は半生を清く行ひ澄し著述の業に身を委ねんか、又は遠く海外に教育の業を研鑽し、獻身的に斯道の爲めに盡さんかと頻りに考へ居る處へ、思ひ掛けず細川前校長より泰宮殿下の御教育掛たらずやとの身に餘る恩命あり、直に(九月二日)御避暑中なる箱根宮の下に離宮に拜謁し地理歷史國文美術圖畫習字の御教授を申上る事となりたり、

淺草の少女懇話會

十一日午前九時淺草區永住町新光明寺に於て又々少女懇話會あり、會するもの二百五十名許り、會主竹田光枝子と云ふ十五六歲ばかりの少女が、開會の辭に、次いで來賓大日本少女會主事大西林五郞氏及び同會長下田歌子代理松本某女史の演說あり、終つて會員美浪部慶子の慶中雄と云ふ若者が妖怪を退治したる勇壯なるお伽話、野田初美子の暴王が其の王女の姫が孝心に感じて、惡政を改めたりと云ふ有益多趣味なるお伽話あり、最後に鷲塚光子の落語に移りたるが何れも十二三歲の少女なるにいづれも落着きて巧妙に演じ得たり、就中鷲塚光子の落語の如きに至りては、或る處に鼻缺けの坊さんあり、馬に乘りて花見に行きたるに、馬子に惡口され打ち腹立て〻家に歸へりありし事ども妻君に物語りたれば、妻君は「お〻口惜しい」「お前は口をしいか私は鼻がほしい哩」等と云ふ珍妙なるものにて滿場ドッと許りに噴き出したり、其他來賓三四名の談話あり、斯くて琴、お伽芝居、活人畫、假裝行列等の餘興に移り散會したるが、琴演奏の際、紅白の幔幕を引き揚ぐるに拍子木を以てし、更に其の幔幕の引き揚がりたる中を見れば、「琴富貴いち馱、柳橋連、竹田光

枝さんへ』と書したる美羅ありたるが如き、何うやら女義太夫でも聞く樣の感がしたり、是より追々斯る會合が流行することならんが早くも美衣美裝を競ふが如き狀見ゆるは、切に父兄の一考を煩したきものなり、

工女の禮式講習

鐘ヶ淵紡績株式會社は、茲五六年前までは社中に如何はしき人物多かりし爲め、女工をして此世からなる地獄の苦しみあらしめしが、卅五年慶應義塾出身の藤正純氏が工塲長に就任するや、虎狼に等しき輩を根本より除去すると同時に、一般女工の風儀惡しきを憂ひ酒保を設けて冗費を省かしめ、一方社外よりの誘惑を避けしむる爲め、社內に學校を設立し小學全科の學習をなさしめ、本年初めて尋常小學卒業生を出したるが、教師は外人ワンハイド孃と田中鎌子女史を除くの外は、社の常雇にて、學校は女工の晝勤と夜勤とが、一週一度宛交替する際に通學せしむることとし、特志のものは毎日通學せしめ居れり、何分に女工と云へば、素性卑しき田舍出多く、禮儀作法を知れるは殆んど皆無にて、工塲長が來客の際手傳を命じても、客に對する禮は勿論言語不作法を極むるより、學科以外に禮儀作法を習はしめんとて、田中女史に依囑し、月に三回一回百五十名を三分して、五十名を見物人五十名を給仕殘五十名を客として先づ談話、食事の禮儀作法を敎ゆることゝなし、志願者を募りしに、應募者は千名計あり、今は其れが爲に、女工の風儀頓に改まれりとぞ、而して此等女工の中覺えよきは十六七のもの、覺え惡しきは十二三のものと、廿五歲前後のものにて、三十年以上なるは迚も望なしと自らあきらめしにや、志願者なく、通勤者は時間の都合上出席せず、今は本會席まで進みしが、是迄尤も手間取りしは、婚禮の式にて、之は社婚と云ひて、職工中品行善良なるものを選拔し、工塲長が媒酌となり、社費を以て式を擧ぐるが故に、其準備にも思ひて敎ゆるものなりとか、因みに同社にては職工の死亡者に對しては、社葬をなし、酒保は同じ人が永く營むときは、何かの弊害あるべきを憂ひ、日々交替に販賣をなさしめ、其當番の日は通常の如く日給を受くることになり居る、また乳母ありて社婚して產みたる子を、母の勞働中世話をしてやるよし也

◎二葉幼稚園遊嬉會

去二十四日午後三時半より四谷鮫が橋同園に新築落成式を兼ね、園兒遊嬉會あり、園主野口幽香女史の挨拶あり、終て園兒百二十名四組に分れ、遊戲數番をなし、次に小波氏の御伽話『太郎と金さん』拍手の中に了り、園兒は雜記帖二冊鉛筆二本菓子二袋を與へられ、いゝな〳〵と大喜び、先生私には持てませんなど云ふのもあり、喜びの餘り封を切りて見るもありて、式を終りたるは午後四時半頃なりし、

新刊紹介

女文早まなび

中村秋香監修
大野書店發行

女子書翰の規範と稱するもの、昔より續々發行されたれど、未だこれはと云ふべきものなし、一書のお世辭もその場合によりて、嬉しくも、又厭はしくも感ずるものなれば、一列一體に斯う書くものとすることは出來ぬ話なれば、實際役に立つものは少く、漸く近年一葉女史によつて著述せられしもの位が、やゝ女子書翰の規範たるを得しほど也、本書はそれ以來の好著ならんか、部門を賀儀、招待、哀悼、慰問、依頼、報知、誘引、謝禮、請求、紹介、音物の十一に分ち類題、類語、作例を載せ、之に對して記事文の欄あり、四季の紀遊、送迎、祝祭等の諸部門に分ち、同じく類題、類語、作例を載せて、消息文、及叙事文を作るの栞となれり、裝釘美、價壹圓

母の爲の教育學

羽田貞義
小澤政十郎合著
目黑書店發行

近時母となれる人に批難多し、時節柄極めて必用の著述なり、項目を緒論、胎教、小學校以前の家庭教育、小學校時代の家庭教育、小學校以後の家庭教育、餘論の六篇に分ち、更に幾多の章をつくりて母としての教育に遺憾なからしめたり、但し著述には不馴と見えて此種の文章に句頭なきこと、又文字の並べ放題なるは、たとへば一頁のうちにも

而て正しからざれば食はず、口に傲言を出さず、文王を生んで而して明聖なりなどに至つては噴出さゞるを得ず、これによつて見ると、割つて見て正しからぬものは食はぬといふ事になり、又大任が文王を生んで明聖になつたやうに聞える、兎に角に杜撰な話也、和裝美本にして定價五十錢也、

現代讀書法

四十餘大家講述
成功雜誌社發行

近來邪書続出、是非讀書法の必要あり、本書は成功雜誌の臨時增刊として發兌されたるものにて、近來得易からざる名說をあつむ、開卷第一の戸水氏の讀書法一節を抄錄せん、

讀書は恰も食餌の如きものである、食物を喰ふに當つて、獸肉鳥肉等の如きものは、丁寧に咀嚼して後に嚥下せざれば、眞の味を得ざるのみならず、滋養の効空しく、時としては胃腸を傷る虞がある、然るに蔬菜類に至つては太しく勞して噛むの必要はない、更にソップに至つては、たゞ吸ふべくして毫も齒牙に懸くるの要を見ざるものである、書物に於ても亦之に齊しく、充分に咀嚼玩味せねばならぬものあり、又さばかりには噛む必要を見ないものもあり、更にグツト吸去つて可なるものもある、學ぶ者茲に眼を注けて、此三者の間に截然たる別を立つることが最も必要である或は反覆熟讀し、或は深審精察し、且つ讀み、且つ思ひて、業を積して行くべき書を漫然讀下匆々過ぎ行かんは最も亦及ばざるものであらう云々

誌友倶樂部

◎想美會　今度私どもで想美會といふ會をたてました、副會長若槻木あい子樣です、それでどうぞ愛讀者の皆樣はいつて下さいませんか、御入會下さる方は、十月十日までに事務所まで申込んで下さい會費は初會七錢、あと毎月五錢、事務所は下谷區南稻荷町九十八番地若槻木方であります（淺草橫田信子）

◎畫の師匠　前略女鑑口繪寫眞版中、金子男爵令孃筆繪畫は、何といふ畫家に就て御習學にならせられ候や、畫風の參考にまで承り度候並に同孃の小歷等、次號に御掲載下され度願上候（四谷愛讀女）

◎繪葉書交換　和歌及書道の研究の爲、御自詠の和歌、御染筆の繪葉書交換いたし度候、なほ色紙短册なりとも同樣願ひ上候、着次第拙なけれども、腰をれ御目にかけ申すべく候、さかしげなる諸姉よ、速かに御贊成の榮を得させ給へかし（岡山縣久米郡鶴田村黑瀨さち子）

◎敷しまの道　秋の日のひよりつゞきのはてに雨よりさむく、はや成申し候、御社中の諸君御障りもなく御渡り遊ばし候や、御伺申上まゐらせ候、扨昨夕また勾當内侍を御贈り下され、一たびならで三たびまでも重ね〴〵たまはり、海山御禮申し上候、何卒御點者の御方樣へも厚く御禮のほど御傳言下され度願ひ上候、おのれはわがせこのなき身ゆゑ、毎日〳〵主人下女下男のわざをもつとめ、その折々の言の葉、とてもみやこ人にははづかしくと思ひ居り候處、歌の友より女鑑へ詠出せよとすゝめられて、はした女の口すさひ、つたなきはわが常なる言の葉、あしきをよきに御添削の上、御取重ね玉へかし、おのれは命ある限りは敷しまの道をたどりて、かへらぬ旅に立出づる時は歌袋を脊負ひ、六道の辻も死出の山路も歌を詠じながら越えんと思ひ居り候、閻魔には歌を詠じ、みゆるしうくる心、今より學び居り候（九月七日の朝、豐田冬子）

◎婚禮の盃　は男子より始むるが正しきか、又女子よりはじむるが正しきか（東京河北女史）

◎洋服などにつきたるシミ　及びペンキ等を落すには、如何にしてよろしきや

◎右の答　總て衣服等につきたるシミを拔くには、奇麗水といふ水藥、ドライグリングを買ひ、其瓶の口に附き居る、刷毛にてよく磨るべし、シミは存外によく落ちるもの、又ぺんき類を溶すには石炭油をつけてよく磨るべし、羅紗にても、絹物にても用ひて差支なし、且つ石炭油は暫らく置けば、揮發してしまふものなれど、若し早く臭を去らんとなれば、紙をしいて火のしをかくべし、直ちに臭失するなり（社内秋雨生）

◎婦人雜誌　東京にて發行する婦人雜誌は幾つありますか、うかゞひたいものです（麻布くりや女）

◎果物標本の教師　先日の新聞雜誌に、よか〳〵飴屋の妻君が、果物標本をつくるに妙を得たるとかにて、さる女學校の教師に聘せられ、その女教師がまた給料の爲に、他校に轉じたとのことである、そのやうな品性の教師を、いかに技藝が出來ればとて、直ちに生徒の前に教鞭を執らしめてよろしきものにや（淺草小金井つる）

◎想美會の初會　十月十四日下谷南稻荷町九十八番地若櫻木方にて想美會の初會を開き、當日は會員にて種々なる餘興があります、

會の規則

△本會の會員たるものは、禮儀作法をわきまへ、少しにても無作法のふるまひなきやうに心掛くべし

△本會の會員は十二歳以上二十歳以下の女子に限る

△本會の會員は姉妹の如く親しく、信義を以て交ること

△本會に入會をのぞむ方は十月十日までは事務所若櫻木方へ申込まるべし

役員は、會長交渉中、副會長若櫻木あい子、事務所取締永田まつ子幹事秋野百合子、横田のぶ子、風間ふゆ子、今井てい子の諸氏であります（下谷女鑑愛讀生）

◎無模樣　老年の婦人も、表だちたる禮服に、無模樣なきものは着用せぬこと〻聞及びたるが、全く左樣に候や（大阪音爾女史）

◎右の答　然り、模樣なき紋付を禮式に着用するは、未亡人に限ることなり、夫ある婦人はいかほど老年の人も、衣服には必ず模樣つきの禮服を着用すべきものなり、是故に凶服には何人も皆無模樣を用ひ、近親には無紋をさへ着用するなり（社内秋雨生）

◎講習會　よく何々講習會など〻、半月かそこらで立派に或學科が講習されるやう、よく新聞などに廣告が出ますが、そんなに早く講習が出來るものでせうか（本鄕井上よし子）

◎話の材料　家庭にて小供などに、日々色々の話をしますが、毎日となると兎角種切になつて困りますが、伊蘇普物語の如きもので、何か話のよき種本はありませぬか（千葉若井田鶴子）

◎右の答　それには小川直子刀自の進話錄などがよからうと思ひます、この進話錄は、刀自が高輪御殿で兩内親王殿下に進話したものでありますから、其材料に至つても極めて精選したものであります（社内愛氷生）

◎疳癖の療法　たとへば右といへば左といひて、中々むつかしきことおびたゞしく、云ふことは聞かぬを、強いて云へば、疳をたて〻泣きむづかり、餘りに叱れば引きつけたり、熱が出たりするのは、どういたして、よきものにや、それでも猶叱りて、我儘をたむべきか又はそれなりにして、病の起らぬやうにのみ注意すべきか、御教示を願ひたし（芝山内小河よし子）

◎右の答　小兒の疳の強きは、必ず心體の虚弱なるなり、先づ第一に其手當をして、強健の兒たらしむべし、然れども天賓大病にして疳癖なれ、、治療も能く速かに効を奏せざるが如くならんには、其兒の東西を辨へ、寒暑を知る程に及ばゞ、漸次よく／＼物の道理を説き聞かしめて、やう／＼にその我儘を撓むべし、凡そ強性我儘などは、増長せしむればどこまでも増長して、安らかならぬものにて、長すれば長するほど、身體にも障るものなれば、毋及びそれを助けそれに代る人は能く親切に教へさとして、彼の心から成ほどと思ふやうにしむること肝要なり、其援助は、一朝能く筆の盡すべきにあらねば、巨細に説明すること能はずと雖も、育兒家庭教育等に就ての各種有益なる書物等を繙かれなば、思ひ半に過ぐることあるべし（社内秋雨生）



師弟の情誼

文學士　棚橋一郎

小石川の久堅町に杉浦重剛氏の稱好塾といふのがある、此塾にいつも、寄宿生が四五十名あつて、其創立は明治十六年、本年にて二十年になる、そこで先日二十年の紀念會があつて、來賓が官吏のみでも四五十名もあり、先の遞信次官淺田德則氏も來られ懷舊談が始まり、氏は我々の書生時代、卽ち文久年間の男書生は、隨分粗暴野蠻であつたが、今の書生の到底及ばぬ事は、師弟の情誼の厚かつた事で、先生はそれ等の亂暴書生を視る事子の如く、弟子は先生を見ること父母の如しといふ有樣であつた、今日の學校教育は之を缺ぐ故、人情浮薄になつて行くと談られると、其のあとへ田中舘氏が出て、今の教育は何にも成らぬ、師弟の關係は勿論なれど、智育も無効にて、形の如き教育であるとて、德育の缺點と云ふことを大に論ぜられ、道德の元といへば人情の厚薄が其本源である、然して其人情の厚いのは、古の書生であると云はれた、結局兩氏とも同一論であると見なして聞いて居たのである、

此稱好塾は明治十三四年頃より、杉浦氏が書生の氣風を維持したいといふので計畫せられ、同十六年より實行せられたのである、故に此塾より出た人は塾を見ること我家の如く、實に奥床しい所がある、昨今は人情よりいつても、義理よりいつても、師弟の關係が一番うすいから困る、一面から考へると、古と今とは教育の方法が異り、學期乃至卒業といふことが、今の方法になつて居るが、昔は只自分の力ですゝみ、先生よりもう宜いと云はれる迄勉强するから、早きは五六年、晩きは二十年卅年もかゝつた

程で、其人が師とする人は、多くは一生に一人であつた、

今日ではよし四年五年かゝつても、まるで旅のやうなものであつて、或人は『生徒は宿屋の御客樣也』と評したことがある、それ故生徒には一人の先生に就て、前進發達しやうといふ考はなし、敎へる方も二三年にてかはるし、一科々々を專門で多くの手にて敎ふるのであるから、生徒にはどの先生が自分の先生かわからぬ、よし先生に對し、多少愛敬の情ありとするも、これを五人六人の先生に分けねばならぬ有樣である、昔は一人に對して盡す故いかにしても厚からざるを得ないが、今は數人に之を分つが故に、昔の如き情を保つ事はむつかしい、これは敎育制度のやむなき結果である、併し此等の事は打捨てておいてよいかと云ふに、そういふ譯にはゆかぬ、これに代るべきものをつくつて、情誼だけはつながねばならぬ、直接に先生でなくとも、學校をその代りに見ねばならぬ、一人の先生に對しては、分たれた愛情でも、其先生方を固めた學校、其自身を以て一人の先生とすれば、昔と同じことゝなる、夫をなすに何が大切かといふに、近來殆んど其設けのないのはない位になつて居る校友會、といふやうなものが必要である、第一學校に敬愛の情をもつには、其學校に對する朋友に、其情をもつて行かねばならぬ、共に學び共に遊びし感覺をいつまでゝも有てば其友と共に棲息せし學校を思ふやうになる、兄弟でも不和なれば、其家を嫌ふことがある代り、朋友の間親密なれば、其出でし學校を思ふやうになるが人情である、遠い親類より近い隣家、といふ古語もあつて、親兄弟に告げられぬ事も、朋友間にはいはれるといふ程、親友間の情交は非常に厚いものである

私にも多くの友人があるが、それが不幸に陷つた時、親戚が世話したか、友人が世話したとかいふに友人の世話した方が多い、實に艱難辛苦を共にした感情はいふにいはれぬものである、其朋友を永久に失はぬやうにすると同時に、學校の事もそれによつ

て思ひ出すことが出來る、吾々は大學出にて相互の間には大學の事をわるくいふこともあるけれど、他の無關係の人より惡るくいはるれば之に對して議論するといふやうなもので、自分の出た學校はよく思へるものである、學校を思ひ出すと、自然舊友を思ひ出し舊友を思ふと、自然に學校を思ふといふやうな譯で、其間には自然の連絡あり、いづれより考へても、舊き書生時代の情誼が保つて行く事が出來ると思ふ。

女子教育に就て

戸板裁縫女學校長　戸板關子

斯樣な問題を掲げましては、實は嗚呼がましく、又第一自分にそれ程の修業も鍛練もないのですから、女子教育に就ては、彼是と喙を容れる資格もないのです、されば定めし可笑しく思召す方もお有でせうが、併し我は學者也、故に世間の女子に教へて遣るといふ御見識の方は、それこそ世間で謂ふ所の大家先生、德も高し學識もある、三百年に一度出るとか五百年に一度出るとかいふ、尊い方でなければなりますまい、私のは自分が未熟で、不充分で、不自由で、時としては世間へ顏を出すも耻かしく思ふことがありますから、其所で女子教育の必要を、自分の經驗から少しく申上げて見たいのであります、耻を云はねば、理が分らぬとやら、實を申せば私は和漢の學もほんの門口、詩作は無論敷島の道も心得ず、俳諧と發句の區別も分らず、外國語といへば、僅かに英語の臭を嗅いだばかり、其他の技藝としては、裁縫の道をいさゝか知覺えたまでのこと、點茶挿花の嗜みもなく、絲竹の術を辨へぬのみか、頓と其趣味無ければ聽いても其妙味を感せぬといふ、無學、文盲、無骨無風流の者でありますから、大方の女子諸君に向つては、どうか學問も一通は出來、又遊藝も多少心得た不偏屈ならぬ人物と成つて戴きたいと思ふのであります、其愚見を今茲に少し述べた

いと思ひます、

昔時とは違ひ、唯今は女子教育も非常な進歩でありまして、學校と名が付けば、普通學を授くる所も、或特種の技藝を教うる所も、皆滿員の盛況を呈して居ります、高等女學校までも、此數年間に殖えたことは、全國を通じ、其數實に夥しいことでありませう、之はマア何より結構なことで、支那の留學生が一萬人になつたの、貿易が順況になつて輸出が超過したといふよりも、最もめでたい喜ばしいことであります、

でありますが、まだ〳〵私ばかりではない、一般に女子の讀書といふものはあはれなものであります、成程中流以上の生活をして居る、何のなにがしと稱はるゝ方の子女は、高等女學校にも入れますが、其は比較的實に少數で數ふるにも足りません、二十世紀の今日になりましても高等小學を終らざる女子が全國に幾人ありませうか、尋常科をさへ卒る能はざる女子が何程ありませうか、其は案外で、數限りもありません、明治六年に小學令が布かれてから十數年の後に生れた者で、而も相當の財産ある者の子女で、年始の文や寒暑見舞の手紙を書くにさへ苦むものが、天空の星ほど多いでは

秋七題



其（七）七草

ありませんか、此間も或老人が其娘の學問自慢をしますから、何學校を卒業なさつたかと問へば、村の高等小學校なりと答ふ、無邪氣と云はうか、暢氣と云はうか、實に抱腹の至りでありますが、聞いて見ますと、其土地で高等小學を卒業するものは、幾んどないとの事でありますから、其人の自慢も強ち無理ではないと思ひました、斯んな事では兎ても仕方がない、たとへ二十人三十人の判任官を二千萬の女子の中から出しても、二人三人の婦人が淸國や暹羅の敎育顧問に聘せられても、數十百の女番頭が會社商店で簿記や算盤の上に腕を鳴らしても、それで日本の女子に多大の光彩を添へたとも、婦人の位置が高まつたとも云へますまい、もそつと女子が高等敎育を受くる樣にならねば、我が日本は進歩したとか開化したとか謂はれません、

昔時と云つても近いこと、私の母の幼少の時代には女には學問は無用、學問すると增長する、嫁入しても不柔順で、舅姑や其夫に逆ふのみならず、終には輕蔑する樣な事になる、女子は敎ふべからずとした者であります、されば其敎へ方も甚だ簡單な者で、物の本の一二冊も讀ませて、手習の少しもさせれば宜いとしてあつた、此の如く女子の發育を抑へ、女子を愚にする社會の惡風は、數百十年の久しき遺傳性となつて、女子の頭腦は男子よりも幾らか劣るやうに生付けられて居ると思はれます、其頃女子が心身を處する聖經とした女大學の初筆に『夫れ女子は成長して他人の家に行き、舅姑に事へ』と、一番大切な夫を後にして、行なり舅姑に從ふことを強うるのであります、然るに男子が學ぶ所の大學は、其の最初の一行に『大學の道は明德を明らかにするにあり、民を親にするに在り』と、直ちに天下國家を舞臺として、志を立つること、經世濟民の法を吹込むのでありますが男女其力の差等は幾何なりやは能く分りませぬが、其敎へ方の相違は實に驚くべき者であります、當今は女子も男子と同じく袴を穿いて學校へ通ひますから、智識の進歩は著しいものであ

りますが、まだ女子は馬鹿にされて居りますから、一寸書いた物を見ても、之は旨い、女子にしては能く出來た、などの評語を下す者が間々あります、我我婦人として聞捨にならぬ言葉ではありませんか、併し男子の無禮の咎め立をするよりは、夫子自らが切磋琢磨の功を積んで、終には男子をして、女子を敬はせるやうにせねばなりません、幾ら男女同權を論じても、男尊女卑を攻擊しても、歐米の美風を吹込んで見ても、女子に其の氣位がなければむだなこと、女子に其價値さへあれば、自然とその相場は高くなる、社會は取も直さず株式市場であります、

さて女子敎育といふことには、明治の今日、どんな頑愚な者でも、苟も日本の戶籍に其名を署してあるものは、よもや不同意を唱ふるものはありますまい併し何を幾ら敎へてよいか、といふ其種類と程度問題は、有識者の中にも往々議論があるやうです、が

私は良妻賢母主義を以て、出來る丈高等敎育を授けたいといふのであります、或人は賢母良妻主義を非難して、あれは本當の敎育の精神でない、敎育は人物を造るのであつて、其造られた人が、母となれば、賢母、妻となれば良妻となるので、初めから人の母となる準備、妻となる用意と云ふと、自然下品となる、高尙な所がなくなると斯う言ふのでありますが、全體此世に女子として生れた以上は、夫に嫁ぐと云ふは自然の大法にして、人類の始祖の時より今日に至るまで定められたる約束であります、既に男女といへは夫婦のあるは當然です、たまさか高等敎育を受けたる婦人にして、獨身生活を爲すものもありますが、それは信する宗旨の爲とか、或社會事業の爲に、妻となり母となりては、到底自由の活動が出來ぬと云ふ所より、凡ての情と慾とを制して一身を之に委ねたのでありますから、是等の人はそつと側に片付けて置くがよし、又中には難かしい條件のみ持出して、遂に嫁に行きはぐれた人もありますが、之は格別多いのではありません、之は番外として措て論せず、何にせよ婚禮をせぬと云ふのは、變

則です、破格です、又或は不幸です、私は何處までも賢母良妻とするが女の道、而も最良の道と思ひます、

前に申しました通り、或皮想論者は、賢母良妻主義を嫌ひ、之を卑めますが、之は飛んだ間違と思ひます、女子は善良なる家庭に育てられ、高等なる敎育を受けなければ、家を齊へ、兒童を敎育し、我夫を助けて、後顧の憂なきやうにさする賢母良妻とはなれませぬ、我子の育てやうも知らず、家を治むることも出來ぬのは、之は愚母愚妻である、之を造るには勿論高等も下等も、何の敎育も要りませぬ、若し男子のみ高等の敎育を受けて、女子は劣等の敎育を受くるならば　夫婦となつてから、談話の問題が違ひ、趣味が異り、主義も理想も相合はず、丸て兩方の權衡が取れません、夫婦とは名のみ、雙方に愛も信も無いのであります、それが爲に大學卒業者が其妻を離別し、又は養子先を出でたる者は實に其數は少くありません、之は悲慘なことではありますが、其事情を酌んで見ますと、提灯に釣鐘、釣合はぬは不緣の基、亦是非も無い所もあります、されば立派なる夫の立派なる妻は立派な敎育を受けなければなりません、之は動かない論理であります、故に私は女子として學ぶべきものは、和漢洋の學問と數學一と通りを第一として、次に家政、料理、裁縫から挿花、茶の湯、又其上に何か高尚なる遊藝の一つ位は即ちピアノとかヴァイオリンとかの心得がなくてはならぬと思ひます、男子もそうでありますが、女の子は極めて趣味多き淑女、お轉婆ならず、陰氣ならず、人中に出でゝも怖めず臆せず、落着いて誰とも談話を交うることの出來る人物とならなければなりません、學者の妻となつても、外交官の妻となつても、實業家の妻となつても、差支へのない、徽くして順良しき婦人となるのが專一であります、

私は唯今裁縫學校を管理して居りますが、どうか世間年少の諸孃達は、皆悉く將來の賢母良妻となつていたゞきたいのであります、誠に下らぬことを

申し上げてすみませぬ、

新歸朝の女子教育家

去二十五年十月文部省留學生として家政學研究の爲め英國倫敦に留まること約四年、目出度く業を卒り去七月十八日住馴し英國を出帆して、米國へ立寄り八月二十八日恙なく歸朝し、女子高等師範學校の教諭となりたる宮川壽美子(三十)は、長崎市十善寺町に生る、五歳の折家人と共に上京し、芝區巴小學校を十四歳にて卒業の上、東洋英和女學校に入り、去二十七年卒業後は、同校の助教師となり、三十年四月中女子高等師範學校に入學し、三十四年三月卒業して、後沖繩縣女子師範學校に教鞭を執り居たるが試驗を受けて文部省の留學生となり、英國に赴き、家政女學校とも云ふべきもの丶家政師範科に入り、料理法、洗濯、裁縫、應用化學、衛生看護、急救法等の教授法を約二年の日子にて研究したるが、女史の談を聞くに趣味ありて、而も當世の婦女子を大に戒るに足るものあれば、左に之を記さんに、

▽家政女學校も世の人と知る如く、英國は社會の上下を通じ、一般に富の程度頗る高きが故に、二三十年前迄は家政に屬する前記の料理、洗濯、裁縫其他の仕事は何れも下婢に任せるか、さもなくば外に出してやり一家の主婦や娘などは、一切これに關係せぬ有樣にて、家政に就ては英國の婦人が殆ど零なりしも、婦人は家に在りて、内助の効を擧ぐること東洋の如くでなければならぬと云ふ意見を唱導する人出で、十五六年前より漸く家政に注目する事となり遂に家政女學校の勃興を見るに至れり、然るに舊習は容易に守舊主義の英國社會全部を動かさず、高位高官の夫人や、令孃達の此學校に入學する人稀なるを以て、此種の學校は何れも中流以下の人の住む邊鄙の所に在るなり、此の如く富の程度一般に高きが故に、授業料や聽講料や食費等は頗る高く、文部省より仕送る學費一個年千八百圓にては、なか〳〵足

らざることあり、
▽授業料　一學年と云つても、眞に授業するは八個月位にして、其授業料は三百圓位なるが、女史が拂ひたる聽講料の最も高かりしは、衛生會長が衛生法令を講じたる折、十二時間にて五十五圓を徵收されたる時なりと、又た寄宿舍の食費の如きも、一週間で二十二圓、夏期講習會は一週間で二十圓なりと云へば、日本の學費の如きは實に可笑き程なり
▽實際主義　次に英國は一般に理論よりは實際を重ずる風あるが故に、家政女學校の如きも、特に此點に重きを置き、料理科は云ふに及ばず、洗濯科抔は家庭より通學生は總て父母兄弟小供なんどの着物を學校に運び來り洗濯をなし、且つ講義を聽くと云ふやうになり居るなり、而して此所の卒業生は、市立の貧民女學校或は小學校の家政敎師に雇はるゝ者尤も多く、また上流社會の下婢となる者も少からず小學校に奉職する者は、規定に依りて最初は八十圓の俸給なれど、年功と成績とにて、百二十圓迄は增俸さるゝとの事なり、かくて女史は女子大學に移り公衆衛生を專攻し、卒業證書を握りたるがそも〳〵此學校は、
▽女子衛生檢查員　の養成所とも云ふべき所にて、各衛生組合には、必ず女子檢查員を要すると云ふ考より、此の如き學校の必要を認めたる譯にて、個人衛生に注意するには、是非家庭の情實に精通せる婦人を檢查員として家庭に於ける衛生は勿論、育兒に關する衛生を監視せしめんが爲め、ミス、ハルバートを校長として此女學校は設置されたる譯なりと
▽日本女學生　近頃日本の女學生に、ハイカラ風とやらが流行し、一も西洋二も西洋にて、テニスや其他舶來遊戲の盛なるはよけれど、英國にても旣に家庭に就ては、家政に堪ふる婦人少なき弊害あり、されば全く西洋にかぶれず、家政に就て勝つて居る日本、古來の美風を失はず、長所をとりて短所を棄つると云ふ鹽梅に、西洋を眞似て貰ひたきものなり云々と、如何にも然らん、女史の穩健なる此意見は、

是非當今の女學生に煎じて飲せたきものなり

選抜せられし女學生の洋行

麹町區五番町女子英學塾長津田梅子女史が、去四月中より各地の高等女學校に廣告して、女史が經營の餘に成れる、米國婦人有志者の奬學金を受け、米國に留學すべき第四回候補者を募り居りし由は當時の本誌に記載せしが、由來引込思案勝の我國婦人界の事とて、之れに應ずる者極めて少なく去る四月中より七月十一日までに、申込みたる者僅かに七名に過ぎず、此の志望者中より、七月十二、十三兩日嚴密なる試験の上、遂に同塾卒業生にして、目下靜岡市英和女學校敎師なる星野愛子(二十三)と呼べる、才色兼備の淑女を選定せり、嬢は元群馬縣利根郡沼田町星野宗七氏の三女にて、令兄星野健氏(二十九)は、本年六月コロンビヤ大學を卒業して、目下尚彼地にあるあり、令姉高杉幸子は、弘前女學校敎頭を奉職し、長兄德二氏(三十三)も亦同志社の出身にて桑港の商業學校を卒業し、目下横濱の某商館に敏腕を奮はる尚次兄光多氏は一昨年大陸を漫遊し、爾後淺草區西三筋町に住みて、牧師の聖職に居らるゝあり、恁る才子才媛を兄姉とせる嬢は、少くして既に群叢中に芝蘭の香深く、小學卒業の後は前記光多氏の補助によりて、横濱フイールス女學校を卒業し、一昨年九月試験の上、英學塾第二年級に入學し、本年四月同塾卒業と共に、塾長の推薦によりて、靜岡英和女學校に、令姉と同じく敎鞭を取る事となりたるが、素より海外留學の志望絶ゆる時なく、何とかして島國婦人の惰眠を覺しくれんと、專ら洋行策に苦心したりといへば、今回當選の喜びは察するに餘りあり、尚嬢は來る五日横濱出帆の便船加賀丸に搭じて出發する筈なるが、着米の後は、二箇年間を豫備學校に入り、受驗準備として獨佛語の修養をなし、文學專攻の目的にて、前三回の留學生と等しく、ブリンマー大學に入學する筈なり、因みに從來三回の留學生は、小遣に多少の不便ありし爲、國元より毎月十圓

内外の補助を仰ぎ居りたれ共、之も此度津田梅子女史と在米委員との交渉によりて、一切奨學金より支出する事となりたれば、暑中休暇の如き支拂多き時と雖も、何等の不自由を感ずる事なく、渡米の旅費のみ自辨するに過ぎずと云へば、世の才媛達、宜しく奮起して第五回の當選を期しては如何

頼もしき少女の苦學

齡もやう〳〵三五の纖弱き少女の身に、往復八里の道程ものかはと、朝まだ暗く星の光のなほ天に瞬くほどに家を出で、雨の降る日も雪の日も三年の間たゞ一日の缺勤さへなく、學びの校に通ひつめ、試驗の度毎には何時も優等の成績にて主席を占めし、長野縣下伊那高等女學校生徒熊谷榮子が、世に珍らしき苦學の評判一たび同地の新聞紙によりて傳へらるゝや、其將來に少なからぬ望みを屬して『われ申受けて立派なる學び舍へ通はせんず』と、同情の言葉を寄せたる人々多かりし中に、早稻田大學英文科の講師にて、本郷區丸山新町廿に住む増田藤之助氏（四十二）が、切なる懇望は、同女學校長波多市松氏と本人の父兄とが心を太くも動かせしものと見え、『養女に貰はう』『あげませう』の約束も芽出度く調ひ、榮子は去月廿五日兄なる人に伴はれて、上京したり、増田氏の人に向ひて語られたるは『此少女の家族は、父三四郎（四十五）母お友（四十四）祖母お志亭（六十五）長男永助（二十三）次男翁太郎（二十二）三男叟次郎（二十一）四男信行（四つ）長女お直（二十四）二女お廣（十八）三女榮（十五）四女伊佐美（十三）五女今枝（十一）六女千代枝（八つ）七女粥枝（六つ）の十四人と云ふ多人數、尤も此長男の永助氏は先年行衞不明となり、長女は他家へ嫁し、次男の翁太郎氏は士官學校に在學中ですから、實際の處は十一人暮しですがこれ丈けでも大變です、所謂赤貧洗ふが如しと云ふのは、最も適當な形容詞で、本人の榮子は往復八里の遠路を通學するのを少しも苦としないばかりでなく、日曜とか祭日とかの休暇日には、山や野に薪を

探りに行つて之を賣り、貯蓄して置いて、月謝や其他の費用に宛てゝ居たさうです、勿論私は本人も知らなければ、彼の學校の校長も知己ではありませんが、新聞の記事によつて、何となう床しく思ひ、殊には本人の意思の鞏固な處を最も賴もしく思ひました、それに私は自分にも苦學もして來た覺えがありますので、自然深い同情を寄せるやうになつたのです、此少女が今後の方針と申しては、まだ確たる考へも懷ては居りませんが、兎に角普通教育を施した上、本人の希望によつて何れとも定めやうと思つて居ります、今の處では差し當り麻布の第三高等女學校へ轉校させる都合に運ばせて置きましたが、云々』と次に榮子より、氏に宛てゝ送り來りしと云ふ手紙を見るに、

手紙を以て御願ひ申上候、さて此度は當校長先生へ宛て、いとも／＼御深切なるお手紙を下され、先生の深き御志の程あり難く御禮申上候

御承知下され候通り、私は不便なる田舎に生れ、豊ならざる家庭に生ひ立ち、たゞ父母の深き愛と、容易ならざる骨折りとに由り幸に高等女學校に通學いたし居るものに御座候

實にこの度は、先生の御深切なるお手紙を拜見いたし、家内一同何とも云はれぬ感にうたれて皆々感涙にむせび申候、精しき事は校長先生より、御きゝ下されしことゝ存じ候へども、この後は萬事先生の御世話に相成り度き考へに候まゝ、何分にもよろしく御願ひ申上候

先は御禮かたぐ＼御願ひまで、かしこ

と文句さへ水莖の痕さへいと美しく書かれたるこそ返す／＼も床しき少女なりかし、因に增田氏は老母瀧子（八十二）夫人通子長女節子（四つ）の四人にて、從來いと樂しき家庭を作り居れりと云ふ

◎扶桑女學校　同校は曾て本誌に寄稿せられし岸田松太郎氏の經營に成れる實用的女學校にて、高等小學卒業程度の女子を收容し、二ケ年を以て家庭の主腦者たるに適切なる智能を授け、女德の修養を與へ、又女教員檢定、女子師範入學の準備教育ともなるを得せしむよし、校長には文學士小林一郎氏を擧げ、顧問寺田勇吉氏外教員諸氏熱心に教鞭を執らるゝ筈

詞藻



文學士 男爵 千秋季隆君選

秋月

天

月かげにさはらぬ雲はなか〳〵に
　見どころのある心地こそすれ
伊豆 西川すゞ子

地

久かたの月のかつらを我宿の
　軒ばの松にかけてこそみれ
東京 森田幸子

人

ゆたかなるとしのみのりを刈揚し
　たづらにうつる月のさやけさ
秋田 長田せつ子

選外秀逸

○○
なか〳〵に心のちりもはらふべく
　みがきあげたるあきの夜の月
東京 青木たま子

○○
まじらなく深山のあきを身にしめて
　夜ふかきそらの月をみる哉
新潟 岩本芳子

○○
むらさめのあらひきよめし大庭に
　みがきいでたる月のさやけさ
東京 高野元子

○ 佐賀 尾方やゑ子
はてもなくこがれなみうつ田の面をくまなくてらす秋のよの月
○ 佐賀 尾方綾子
たくふへきものこそなけれ秋のよの高ねにすめる月のひかりは
愛媛 廣田政美子
なつかしき友がすまゐをさながらにみするもうれし秋の夜の月
愛媛 廣田せき子
あくかれて今宵はこゝに小萩はらおもはす月に夜をふかしけり
秋田 佐藤かつ子
なり〳〵は足ときくもにみかゝれてすみこそまされ秋のよの月
群馬 石井とく子
ひとり見てたれにかつけんあらいその波まをてらす秋の夜の月
群馬 石井寛子

いつ見ても清きひかりはかはられと いと〻くまなき秋の夜の月
〻〻〻 兵庫 横田春枝子

柿のみのかすもよまる〻月夜かな 眞萩かつゆもたもとひかりて
〻〻〻 秋田 古瀬りく子

となりにもふけてかたらふ聲すなり こよひの月にねぬ人やたれ
〻〻 秋田 古瀬惟子

月みんとひとりやとをは出しかと おもへはさして行かたもなし
○ 長野 岡田千穗子

をちかたの峯のかすさへあきらかに みゆるもきよき秋のよの月
〻〻○ 常陸 岡田萬子

すみまさる秋のもなかの月見れは こ〻ろにか〻るうき雲もなし
〻○ 愛媛 高橋茂子

ふる里のち〻は〻いかにかりかねの聲するそらに月すみわたる
○ 肥後 友永常子

いねむとて ともし火消せはひわれ戸のひまより清く月そ洩來る
〻○ 東京 西村直子

なかむれは 千里のそらの雲晴れてちりもくもらぬ秋のよのつき
〻〻〻 大和 栗山俊子

さ〻なみやしかの みつうみ風たちてゆれてうつれる秋のよの月
〻○ 大和 栗山たか子

桐のはのひと葉ふた葉とちる影も さやかにみゆる秋のよのつき
〻○ 秋田 細矢はる子

夢にゆめむすへとあまる長きよも月みるみにはみちか〻りけり
〻〻〻 東京 美矢竹光子

よもすから虫の音しけき山さとの 柴の戸もりてやとるなかつき
〻〻 群馬 南澤靜子

かなしみのいろもて見むかよろこひて 眺めむものか秋の夜の月
○ 東京 高橋珍子

歌にゑにこ〻ろをよせてつとひくる 人まつしまの秋の夜のつき
〻○ 靜岡 竹内光子

ふけてなくからすの聲におきいて〻 晴しもなかの月を見るかな
○ 東京 河合象子

やたか〻みかけしと見えて山松の こすゑはなる〻月のさやけさ
○ 東京 松本まつ子

夕はえのもみちもくれし山のはに か〻みとみえていつる月かけ
〻〻○ 東京 山口琴子

秋のよのたへなる月は艸のはの はことのつゆのはなかとそみる
○ 東京 綿貫とく子

秋のよの月のひかりのくまなきに こ〻ろひかれてさよ更にけり
○ 清國 中村時子

みやこにて馴にし月はかはられと 親にわかれて見るそかなしき
〻○ 東京 吉岡龜子

このまもるひかり見しより秋のよの いをねぬ友となれし月かな
○ 東京 神田けい子

あかしかた須磨の浦わの秋の夜を こ〻ろに見せて澄める月かな
〻〻〻 東京 美矢竹靜子

す〻虫のやとりにせりな萩のはを みよとや出つるあきのよの月
○ 東京 碓井のぶ子

さやかなるみそらの月にとぶかりの かすもよまる〻秋の夜半哉
○ 東京 加藤延子

このさと〻誰か詠じけん北嵯峨の 男鹿なきよるあきのよのつき
○ 薩摩 松原岑子

なく虫の音もあはれなる秋の野の 千くさにやとる月のさやけさ
〻○ 長野 北澤千枝子

いにしへもかはらぬ月ときくからに なほ忍はる〻秋の夜半かな
〻○ 鎌倉 中島茂子

山越ゆるかりのつはさのみゆるまて 月すみわたるあきの夜半哉
〻○ 大阪 木村春江子

夜もすから月にうかれて秋の夜の ふかきあわれを空にしるかな ヽ〇 甲府 加藤千代子

さま〳〵の虫もよすからうたふなり 今宵の月にたれかいをねむ 〇 山梨 風間千代子

おほ空にひかりみちたる月かけは きつなき玉のこゝちこそすれ 〇 甲府 名取正代子

こよひまた月をめてゝのわさならむ をちの笛の音つま擊のこゑ ヽ〇 能登 栗倉 すみれ子

ひな歌の聲さへすみてきこゆなり きぬたのさとの秋の夜のつき 〇 北海 牧 淑 子

棹さして誰かあて人のあそふらん 月すみわたる須磨のうらなみ 〇 東京 土田八重子

小夜ふけて雲井はるかにくる雁の かそへらるまてすめる月かな 〇 松山 田村多豆子

やみの夜をてらす鏡ないつの世に 月となつけてあふきそめけむ 〇 山口 村上 操 子

月といふつきはあれとも月といふ 月こそ秋のものにはありけれ ヽヽヽ 松山 上原のふ子

てる月の かつらの枝もゝみちすと誰かはそらに言ひはしめけむ 〇 岡山 小山松枝子

八千くさの露さへ玉と見ゆるまで さやかにすめるあきの夜の月 ヽヽヽ 群馬 竹のふし子

なゝ草のいろさへみえてすみのほる 月そ今宵のすかたなるらん 〇 愛知 永井さい子

つもりゆく老もわすれて秋ことに むかふは月のかゝみなりけり ヽヽヽ 東京 永井ふさ子

眺めつる人のこゝろやいかならむ くも間にかくる秋の夜のつき ヽ〇 下野 井上 needs子

秋のよをわかものかほに山いほの かけひのみつに宿るつきかな

思ひわびしほるなみたの袖のうへに なくさめ顔にすめる月かな 〇 岩代 長沼ます子

ふるさとの母きみいかにおはすらん 月にむかしを忍ふ夜半かな 〇 越後 山田 波 子

如何なれは秋はひかりのまさるらむ おなし空ゆくありあけの月 〇 東京 鬮津うめ子

須磨の浦や波のゆらきも見ゆるまて みるめ晴たるあきの夜の月 ヽ〇 東京 吉田つれ子

なかむれとあかぬなりけり山のはを さやかにいつる秋の夜の月 〇 東京 毛田 宮 子

ひさ方の月のひかりはかはられと あはれふかきは秋のそらかな 〇 東京 毛田みや子

はしゐして みれともみれとあかぬ哉 くまなくさゆる秋のよの月 ヽ〇 茨城 術見てる子

わか庭のすゝきにふれてあきの夜を いよ〳〵高くすめる月かな 〇 岩代 菅野 和 子

いかなれはあきは物うく見ゆるらん 月の光りはいよゝすめとも 〇 名古屋 不破きみ子

すみのほる月のひかりをうれしとも かなしとも見る人こゝろ哉 ヽ〇 東京 林 艷 子

限もなくてる月かけはきすのなき 玉見ることきこゝちこそすれ 〇 東京 林 環 子

いそ山の松の葉すゑに 月見えてそらすみわたるあきのゆふくれ ヽ〇 東京 山田菊子

中々にたのしかりけりをさな子の ゑかほもみゆる秋の夜のつき 〇 大阪 福原菫子

白つゆのたまのかす〳〵數へても つきぬなかめや秋のよの月 〇 東京 數島うた子

ヽヽ〇 東京 原 三 幸 子

としことにしる人まれになりゆけと　かはらぬ友は秋のよのつき　長崎　秋山とら子

久かたのあくるひかりもわかぬまで　月にうかるゝ秋の夜半かな　備後　石井妙子

けにやけに月の光りしきよけれは　草葉のつゆの珠とこそ見ゆれ　備後　石井千鶴子

そでさむみ更け行くまゝに秋の夜の月のみやこは霜やさゆらむ　備後　杉原衣子

秋の夜は板戸なさしそゆめ路さへ　くまなくすめる月はてらさん　埼玉　横田秋子

いさこよひ月に手むけて月にみん　尾はなくつはな秋はきのはな　埼玉　横田政子

虫の音もたかく聞えてつきかけも　つゆもはてなきむさし野の原　岐阜　山田ふさ子

はき尾はな秋はこほろゝしらつゆの　光りさやけくみゆる月かな　岐阜　豐田冬子

れもやらて秋のよふかくちさとまで　すむらむ月の影を見なから　宮城　前田河千年子

一むらの雲たにもなくそらはれて　ひかりさやけきあきの夜の月　宮城　前田河みさを子

秋の夜の月の光りのさえかへりうつるすかたのはつかしきまて　新潟　牧はぎ子

つく〳〵となかむる山のはさまより　ものいひ顔に月そのほれる　上毛　大竹しげ子

ますかゝみかけしはかりにあらはれて　曇りもあらぬ秋の夜の月　大阪　池田英子

萩すゝき　さきみたれたる野の面にさやけくすめるあきの夜の月　東京　吉井りう子

石ふみも千草も木々もすみのほり　ひろかとまかふあきの夜の月

たゝひとり門邊に立ちてつく〳〵と今宵の月をなかめつるかな　新潟　牧しげ子

花れむりむしの音たえしあきの野をまもり顔にもすめる月かな　山梨　標武子

いさよひの月も出てけり川柳の　しつ枝のつゆもさやにゆらきて　和歌山　植木操子

紅葉

天

八幡山雨よふ鳩の聲すなり　あすは紅葉の色やますらん　信濃　長谷川糸子

地

吹く風も折らまくほしく通ふらん　はじの立枝にそむるもみぢ葉　東京　曾我ゑい子

人

唐にしきおりかけたりと見ゆるまで　もみぢにゝほふ賤はたの山　東京　松本まつ子

選外秀逸

ときはなる松の色さへ染めしかと　長野　北澤千枝子

見るはかりなる峰のもみぢ葉

〇〇　山梨　風間千代子

もみぢ葉はまだ淺けれど秋の色を
ふかくもこめてにほひそめけり

〇〇　東京　高野元子

くる人もなき艸のやの柴のとを
そめてとぢたるつたかつらかな

〇〇　靜岡　竹内光子

立ならふ岸のもみぢのかげみえて
くれなゐふかく染かはのみづ

、、〇　備後　杉原衣子

ましらさへ秋はもみぢのにしき着て時得顔にもかへるたにの戸

、、、　愛媛　高橋茂子

やみてふすまくら邊近くもみぢ葉の ちりくる秋の夕ぐれのまと

、、〇　肥後　友永常子

夕やけのくもにつゝきて一しほの もみぢいろそふかとのはし原

〇　大和　栗山俊子

たそかれのそらにあかれの色見えて 夕日か岡ににほふもみちは

〇　秋田　細矢はる子

いかたしのかさすもみちは筏橋の 邊りになりしにしきならまし

〇　秋田　長田せつ子

山姫のそめしもみちのからにしき きてもみるらん雲のうへひと

〇　東京　美矢竹光子

山姫の秋やうれしとそめにける もみちのにしききてながめむ

〇　大和　栗山たか子

村しぐれかゝりし梢いろみえて よは葉はあさくはつもみちせり

〇　群馬　南澤靜子

秋といへばさびしきものを輕井澤 もみちしにけり人つどひけり

、、　大阪　福原薫子

銃もちてかへる人かけそめにけり てらす夕日ももみちしつらん

、、、　東京　土田八重子

たつ田姫染めしにしきは甘谷に さらせしそれにいやまさるらん

、〇　東京　數島うた子

ましらなく遠山の端のまつか枝に かゝるにしきや紅葉なるらん

、、、　岩代　菅野和子

愛らしき手をばひらきて何こはむ 秋はなべてのくれなゐにして

〇　名古屋　不破きみ子

秋風のふくもいとはしもみち葉は ちりての後もにしきなりけり

〇　松山　上原のふ子

さはかりはうつろはてちるもみち葉は 花よりも猶をしまるゝ哉

、、、　山口　村上操子

山ざとの庭のもみちのいろこきは ひとめの外のしぐれふりけむ

、〇　愛知　永井さい子

ちりやすき枝としりつゝ色こきを 折て見たきはもみちなりけり

〇　群馬　竹のふし子

野にやまにかざるにしきは秋姫か こゝろのまゝにそめし色かも

〇　東京　山田菊子

ながむればをちのやま〱紅葉して 木々の梢はにしきまとへる

、、、　東京　永井ふさ子

もみちばにきよきおもひの歌かきて たつたの川の水にながしぬ

〇　下野　井上肉子

白河のせきのもみちにしぐれして むかしゝのへのちしほ色こき

○　東京　岩垣貞子
くれなゐのふちとなるまでたきの川　染てながるゝ秋のもみち葉

ヽ○　越後　山田淑子
ふく風のさそふまに〳〵もみち葉の　にしきをりなす庭の面かな

ヽヽヽ　越後　山田涙子
いさぎよき益荒猛雄にゝたらずや　にしきゝてちる庭のもみち葉

ヽヽヽ　東京　毛田みや子
秋さらば紅葉のにしきちりそめて　たつたの川はあけにそまりつ

○　茨城　倚見てる子
にしきにもおとらぬ色に見ゆるなり　ゆふひにうつる木々の紅葉

ヽ○　東京　青木たま子
しきしまの大和にしきと見るまでに　そめつくしけり木々の紅葉

○　山梨　標文子
常盤なる松にかゝれるつたもみち　かくてそ色ははえまさるらむ

ヽ○　神奈川　中島茂子
紅葉はのこきとうすいの嶺越えて　見てこそゆかめ秋のにしきを

ヽ○　大阪　木村春江子
露にだに紅葉しにけりしぐれては　猶いくしほのいろやそふらむ

○　甲府　加藤千代子
つゆ霜のおく山はいさはつもみち　いま一しほとおもふいろかな

ヽ○　甲府　名取正代子
瀧の川たきの糸さへそめつくし　いまそもみちのさかりなりける

○　能登　栗倉菫子
たかためにかざるなるらむわか庭も　もみちの錦よそほひにけり

ヽヽヽ　小樽　牧淑子
しぐれ待つ庭のこずゑとおもふまに　小倉の山はにしきかざれる

ヽ○　岡山　小山松枝子
村しくれすぎし紅葉のうすくこく　にしき色どるゆふ日かげかな

ヽ○　東京　原三幸子
うつしとる筆もおよはしうすくこく　あしまが崎に染るもみちは

ヽヽ○　清國　中村時子
唐にしき見るにつけてもしのふかな　やまとの國の紅葉いかにと

ヽ○　東京　河合泉子
立ならぶ庭のもみちのくれなゐに　苔のみとりもしたてりにけり

ヽ○　東京　山口琴子
たくひなきちしほの谷にもみ出て　こずゑまはゆき夕ひかげかな

○　東京　吉岡龜子
ゐたくみの筆もおよはしもみちして　にしきと見ゆる高はたの山

ヽ○　東京　綿貫とく子
霜のたて露のぬきなるこずゑには　やしほのにしき染つくしたり

ヽ○　東京　高橋珍子
もみちせぬ梢そ秋はなかりけるしづがかきねもにしきかさりて

○　東京　美矢竹靜子
秋ふかく立田のやまのもみちはは　あるしかほなる色をみすらむ

○　東京　碓井のぶ子
夕日さす木々の梢のもみちばは　げにぞにしきのながめなりけれ

ヽヽヽ　東京　加藤廷子
おく深き紅葉のみやにしらはとの　鳴きてしつけき秋の夕ぐれ

○　薩摩　松原峯子
春めでし花にもまさるながめかな　いろづきそめし山のもみぢば

ヽヽヽ　長崎　秋山虎子
吹く風に四方の山邊はいろつきて　にしき綾なすさまとなりけり

ヽヽ○　備後　石井千鶴子
天津乙女おれるにしきの中絶えて　かゝるそ峰のもみちなるらん

○　埼玉　横田政子
山ふかき谷間かくれのはじもみち　いろそめわたし秋くれんとす

ヽ○　埼玉　横田秋子
山土産に手折りてかへるえたみれば　高雄のもみち秋ふけにけり

ヽヽ○　埼玉　横田やな子
小倉やま岩のもみちはたづれみん今ひとたひのしぐれまち得て

○　埼玉　横田須磨子
下そめもましろ手入の村もみち　けしきのもりはあきふけにけり

ヽヽ○　備後　石井妙子
峰に尾にあまろ紅葉の綾にしき　くも井よりこそ織りかけつらめ

○　岐阜　山田ふさ子
秋もはやくれむとすらむ〔欲〕初しくれ　そめし紅葉そいまさかりなる

○　岐阜　豊田ふゆ子
そばのはなさく信濃路の夕きりの　ひまよりぬれて匂ふもみちは

○　宮城　前田河みさを子
何時のまにいつこのたくみくれなゐに　染いたしけん木々の梢を

○　宮城　前田河千年子
おりひめのおりなせろかと思ふまて　もみちしにけり木々の梢は

○　新潟　牧しげ子
なんとなくゆかしかりけり紅葉の　くれなゐ染めし野路の一つ家

○　佐賀　尾方八重子
人もこぬわかやまさとの初もみち　みやこのともに一葉おくらん

ヽ○　佐賀　尾方綾子
からにしきかゝろとみしは山かけの　時雨にそめろ紅葉なりけり

○　愛媛　廣田政美子
朝な夕なふみよむかけとたのみこし　杵はいつかもみちしてけり

○　愛媛　廣田せき子
薄くこく染めし紅葉の色はへて　げにうつくしきにしきなりけり

ヽ○　秋田　佐藤かつ子
いなり山あけのとりゐもこのころは　みまかふまてに紅葉しに幾

ヽヽヽ　群馬　石井とく子
高尾山峰のもみち葉来て見れば　ころものそてもくれなゐに見ゆ

ヽヽヽ　群馬　石井寛子
深山路の紅葉にこゝろうばゝれて　くろゝもしらす立くらしけり

ヽヽヽ　群馬　吉田露子
さなきたに秋はあはれのおほかろを　なをもなけゝとちろか紅葉

○　兵庫　横田春枝子
としわかき尼君ひとりくさむしろ　みてらの庭にもみちちろなり

○　秋田　古瀬りく子
ときは山みれもこのまももみちして　松はまばらになりにける哉

ヽヽ○　秋田　古瀬惟子
夕ひさすたつたのやまを見渡せは　もみちの奥ももみちなりけり

ヽヽ○　長野　岡田千穂子
しつ枝までこゝろのまゝにそめいてゝ　のころいろなき庭の紅葉

ヽヽ○　常陸　岡田萬子
枝折りて酒あたゝめつ焚く畜士の　ほの灰いなかにちろ紅葉かな

ヽヽ○　新潟　岩本芳子
老松のこけのころもの上にまた　もみちのにしきたれかきせけむ

○　東京　白井芳子
村しくれ染めしみ山のもみち葉は　紳の手おりのにしきなろらん

○　福井　岩橋花子
露しくれ色ともなきをもみちばの　などうすくこく染め出ろらん

○　和歌山　植木なみ子
たつ田山いかにそめけん我か庭の　木の葉いろつく頃となりにき

○　埼玉　安部とみ子
いつの間にしぐれの雨や染めつらむ　にしき織なす岡のもみち葉

○　大阪　池田ひて子
小夜ふけて夕日の影ののこれると　見えしは峰のもみちなりけり

ヽヽヽ　山梨　標武子
うすくこく色づく山の初もみち　しくろゝ空やこひしかるらむ

短文

人賞

川邊の逍遙　　群馬　吉田露子

何處よりか、妙なる笛の餘韻をのせ來る夕風、いと涼しさに、妾は野川の邊をさまよへば、岸に囁く水清く、小魚の躍るともなく緩やかなる流れ、野守が娘の粧の鏡か美しや、未だ二ッ三ッ蕾殘れる晝顏の、よわ〳〵と蔓を流しつゝ、河に漂ふもいと憐れ

選外秀逸

○殘暑　　肥後　友永常子

涼しかるべき秋ぞと思ふ心のゆるびよりか。垣根の湖もまだ穗に出かねて昨日今日の暑さ。夏よりも猶たへがたし。されど何によりてひとり秋を知りたりけむ。桐の一葉二葉あはれ庭にこぼれぬ。

○砧の音　　東京　土田八重子

つゞれさせてふ蟲の聲にもよほされてや、夜もすがら月に澄みゆく砧の音、夜風と共に身にしみて哀れ深し、そも此の音の悲しきは、夜ふけて里の淋しき爲か、將たうつ折の憂きか故か、非す、聞く其の人の心わびしければなり、

○故鄕の秋　　下野　井上倘子

故鄕白河の關に秋風のさむきを覺え、青き月光を浴びて立てる此處古城跡、物見樓の石垣は崩れて草生ひ、露にむせぶ蟲の音は十五萬石の名殘を歌ふ如く、御濠の水は白蛇の狂ふ如し、古松に宿る月の巳れ主顏なる、げに露けき秋の夜哉

○豫想外　　松山　田村多豆子

何事も世の中は豫想に違へるものゝみ、大きなりと思へるはちいさく、美しと想へるは醜く、長きは短く、直きは曲れり、されば、來て見ればさほどにもなし富士の山釋迦も孔子もかくやあるらむ、とよみしは、實に〳〵とうべなはれて、

評　近き頃何か豫想の外の事に遭遇せられしにはあらざるか

○夕がほ　　群馬　竹のふし子

千草にすだく虫の音のみなる我庭に徽けき音立てゝ咲きいでし夕顏の月に笑める姿の實にも優しき、此眞白き花の顏のあはれを誦ふ虫の音に傾く時、眸に宿る露の白玉、床しとも床し、さはれ胃

し難きは清く氣高き其花の色。

○蒸饅頭　越後　大石わつ子

花嫁の披露とて贈り來されし蒸饅頭、白紅の十う五つ他家の歟恋見ゐにつけ數へ出さるゝ死兒の齢、我娘も無事に在つたらと老の身の涙もろく、我にもあらで一雫、ほろり落ちて、蒸箱の蒔繪の松の上に、人知れぬ露は宿りぬ。

○我家の眺め　東京　永井ふさ子

紅鮮なりし夕陽は、業の雲に隠れ、四方の影色やうく淡れ行きぬ、吹く冷風に青波を立つる、稲葉のそよぎ心ゆくばかりなるに遙彼方の海原を、消ゑ殘る眞帆、片帆の影、三つ四つ二つ波にゆられて行交ふ様、さながら花葉の漂ふに似たり。

、、、秋の夜長　東京　岩垣貞子

秋の夜の長きをかこつにはの面に、哀れたつぐる虫の音、夕よりも一たんたかく、をりしも聞ゆる箏の音、曲は何か？、みたれの一曲に思はすもうつとりと、見渡す空に月をかすめて雁かれ一ツ月はいよくすみて箏の音高し、

○夕雲　能登　粟倉すみれ子

女神のしとれとも燃ゆるが如き、業淡き一逕の夕雲は、今し彼方にそびへ立つ蓬萊山の松の林を横ぎりつ、靜かにく南の方へ流れゆく、吁かれ雲の行く處、そも詩人や識人かある？

、、、錣虫　東京　神田けい子

ちゝよくと鳴く聲の聞え初めしは、秋風の音を知りてか、待てよと云ひて逃げ去にし親を思出てか、鬼の生みければと云ふも、葉より鈴虫の聲音も胡蝶の姿も持たれば、其聲に耳を止むる人もなく在所尋れん人もなし。月さへ踈き草陰に鳴く虫あにれ

○秋の色　兵庫　横田春枝子

雁のおとづれ、昨日と過れば、稲穂は黄金に、蕎麥の花白う、棚の葡萄背戸の柿の實、ともに我色見せて麗はしく、桔梗女郎花は云はでもがな、秋海棠の、うす紅さしたるは、またなく哀れにて小女の裾に袖口に、赤き色見ゆるも艶なり。

、、此頃　東京　碓井のぶ子

わかき女子のひとりあるきは、世間いとやかまし、親の命とはいへ、夕つ方の使いとつらし、幸に甥を右手に引き連れ、門を出づれば辻車夫は奥さん参りませうと、まづこゝろ落つきて命をはたしぬ、

、、、月の夜　若櫻木愛子

月はこうくとしてすみわたり、あたりは恰も晝の如し、はるかかなたに電車のべるの音かすかにひゞく、なまり景色の美しさに庭になり出づれば、泉水のほとりにとぶ螢の二ツ三ツさびしげに光をはなつもあはれ、またかたへには蛙のこゑきこゆ

新體詩

地賞

雪月花　東京　鶴淵絹子

あふげば高き月かげの
あたり隈なき影さよく
濁れる池のこゝろにも
共にすまんと映るかな

○

ふれくみ雪野に山に
眞白ききぬを纏ひたる

天つゝかひに擬ふまで　清きすがたに積りみよ
あしたの嵐夜半のあめ　なくともわする櫻ばな
咲てかをりて散行くも　神のみむねの外ならし

○

人賞

秋思　神戸　足立あさ子

誓ひし人の今來むと　思ひも長き秋の夜を
明しかねつゝまつ虫の　鳴音淋しき草まくら
かり寢の夢をみち奥の　しのぶにたへぬ露の冷
秋も來にけり葛城や　高間の山の峯の雲
余所には見まし紅葉の　いろに染み行く人心

評　濃艶の詩、よく秋思を描出せり。

選外秀逸

◎虫賣　肥後　友永常子

並木のやなぎ二葉三葉　ちるより外にうき秋の
あはれを知らぬ人々よ　めして御庭に放ちませ
籠乍のきにかゝげても　鳴音を聞けば秋の野に
はる〴〵行し心ちすと　虫籠をあまた荷ひつゝ
みやこ大路を賤の女が　聲ふりたてゝ鈴むしや
はたおりこほろぎ轡虫　ふれ行聲のひまごとに
よぶ人誰かとまつ虫の　鳴音もあはれかごの中

評　この歌を聲うつくしき虫の韻に合せて聞かまほし

狂女　群馬　吉田露子

流れて早き年月を　早や一とせの其の間
仇けなき子を脊に負て　我村里をさ迷へる
まだうら若き狂ひ女は　よしある人の果ときく
むら雲かゝる月の眉　口元かたく引締り
賤しからざる面さしは　嵐にもまれし花の如
亂れて散れる黑髪の　かけに淋しく散り殘る
身に纏ひたる古小袖　いたく千切て影さへも
薄く殘れる裾模様　いにし昔のかけとみん
昨日の榮え引かへて　世はうたかたの飛鳥川
うつり行こそ是非なけれ　父母兄弟はあらざるか
夫なる人は如何にせし　噫哀れなる狂ひ女よ
定めなき事口はしり　燃るばかりの炎天を
泣きつ笑ひつ狂へども　我子の愛は知りつるか
持つや片手に破團扇　脊なる稚子に送る風

如何なる心でもるらん　鳥ねくらに歸るころ
村の情につくられし　藁小屋さして歸るさに
夕風颯と吹き下し　襤褸の袂ひるかへす
世のうきふしもしら糸の　それより細き身の運命
知るやしらずや幼子の　狂ひし母が手枕に。
罪なき寝顔いちらしや　草のしとねに石まくら
晝の勞れに眠る狂母　如何なる夢や結ぶらん
噫哀れなる母と子よ

評　「狂女の我子をいとほしむくだり、いとあはれ深し、

○○冬の夜　大和　栗山高子

小夜更わたる大そらに　月はいよ／＼影さむく
枯葉の上におくしもを　うらもの凄く照すとき
やれに破にし山まとの　板の庇やさせる戸を
折々たゝく音すなり　たか振延てとひしぞと
おゝと應へて出ければ　身にしむばかり風荒て
色もあせたる紅葉の　ちり行影の見ゆるのみ

評　冬の夜のさびしさ、終の二句にてのこるかたなし

○秋の蝶　常陸　岡田萬子

花にうかれて舞ひ狂ひ　長き日影を香に醉ひて
過ぎしは春の夢なれや　露の若葉に目を覺し
身の行末をかこつうち　早秋風のつれなさに
いろふ翅の白粉も　剝てやつれて地に落て
屍に集ふ蟻の群　魂は何處に迷ふらん
あはれはかなき蝶の運命

評　人の運命もこれに似たるものあるなり

○五月雨　東京　井上石子

宮居の君に捧げんと、
　錦のみ袖かゝへ上げ、
珠を展べたるみ腕を、
　そと觸れぬれば瑞花の、
露やこぼれて香に匂ふ。
剪りし瑞花天地人、
　振分け生くる大床の
七寶の甕きらゝかに、
　姫の瞳を射りにしが、
手元狂ふてそをうちぬ。
　甕は微妙の韻きして
永久のひゞをば殘しけん、

日毎に姫の悲しみの
涙と甕の水合ふて、
　下界に寂しう五月雨る〵。

評　奇想奇句と相俟ちて、末の一章殊におもしろし

○秋眺　　筑前　恒屋こま子

名のみは千賀の鹽竈や　運べば遠しみち奥の
みち來る汐を汲わけて　からき浮世をしら波の
よるべいづこぞ海士小舟　霧の籬の島かくれ
惜まぬ秋は稍くれて　浦さびしくも見え渡る

評　謠曲の妙句を取あつめたるにはあらざるか、兎にも角にもおもしろく誦せらる

○小萩原　　東京　岩垣貞子

憂愁の思ひにたへず　小萩咲く野べにさまよふ
濃紫の輝く落葉　秋妃が惱のみ胸
染め出せし木々の紅　世のちりに汚がれぬ乙女
美しの唇のこと　さき染めし萩のつほみよ
ひらきなはうろはしからん　花咲けば散る世のならひ
月みてはかくろ世のさだめ　いのちありつほみの花に
希望ありみたさざる月に　戰よ吹く風をただにいたみ
とこはてふことの葉のごと　いつまでもかはらであれな

○遊　　東京　永井ふさ子

不淨の水に生ひ立ちて　濁りにしまぬはなはちす
清く氣高き花の色　露なけがしそ塵の風
葉に置きそひし白露は　月を夜毎に宿すなり
月なき夜半は銀色の　星の光をうつすなり
あはれ佛の坐し給ふ　蓮のうてなぞ清らなる
罪に汚れし人の身を　佛とならば此花の
うてなの上に坐するなり。

○うつる影　　下野　井上倚子

人はほゝゑむ花のころ　あすをと思ふあた櫻
夜半の嵐ともろ共に　母にわかれてたゞ一人
ふりし故郷にさ迷へば　秋かぜうたて胸にしむ。
たとりたとりて古城跡　あれて丈なる草におく
露よりしげき雨の袖　千くさにすだく虫の音に
寂しき身には兩手もて　耳打ち蔽ひ壁高く
はゝをしのぶの歎を誦す　松のしづ枝にみを支へ
のぞむあやしき髑髏の　れむりし如き水の上に
うつる月かげ星のかげ　やつれし頬にみだれ髮
はらゝかゝりし吾すがた。

○朝　　能登　粟倉すみれ子

夢に目覺めて起き出でゝ　欄に立寄り眺むれば
あけゆく空のをち方に　殘んの月の影淡き
やがて光のうするとき　眞紅に染めしひんがしの
ゆらぐの見えし雲の戸を　靜かに出づる朝日影。

〵〵亡き友を思ふ　　小樽　牧淑子

花のくちびる美はしく　おく露さへも重たげに
朝なく〵に咲かはる　やさしき垣の朝顔の
花見る度に去年去にし　親しき友を思ふなり

嗚呼人の世は此花の
いともはかなき物ぞかし
唱歌うたひて睦じく
池の汀の夏草は
したしき友は今いづこ
御なげきをばよそにして
眞如の月の淸き影
又の世こそは姉妹と
花のえまひのうるはしく
夢か現かなつかしく
昇る日かげを恨みつゝ

ヽヽヽ落日に向ひて

日は西山にしづみゆく
秘みつを語る折ならん
天つ女神のあやぎぬの
無音のくもの望みある
もだえをいだく我胸を
西のみそらに沈みたや

○花のかず〳〵

紅ひ深し花の色
熱き血と湧く胸の火も
赤き心の彩どりと
綵りを偲ぶ栞の
靑草もえし陽炎の
汝が文使ひ揚雲雀
日の輪慕ひし日廻りや
栄の花咲きぬ日は高く
霞に狂ふ姫胡蝶
日影を待たぬ其如く
思ひまはせば其むかし
手に手をとりて遊びにし
去年よりいとゞ茂れども
たらちね君や妹君の
天つ御國に只一人
眺め給ふも恨めしや
なりて生れんやよ君よ
あらはれ給ふはまぼろしか
とはんとすれば朝がほの
靜かに凋むあはれさよ

兵庫　横田春枝子

たそがれ時や世の神の
はへある靈の彩りは
裟裾の色があらざるか
さとしの傳へなりもせば
とりて包みて靈にいり
とこ闇永き世を捨てゝ

三重　吉田芳江子

御園に燃えし人の子の
淸き天地に生れては
露は宿りぬ世の戀に
野に咲く花の藍兒よ
閑けき中に聊々し
諧ふに似たり若き愛
嫦娥に手向く月見草
黄金の波の搖らぐ時
世の子の靑春も斯くやらん
人氣はなれし深山には
稀れの姿見ろが如
深間の淸水我友と

ヽヽヽ宮の主

寂寞の色崇嚴の風
太古ぶりなるみ社の
やをら乙女のかよわき手に
剛の者は今出でぬ
かれがかれがやさの手を
野菊の花散り〳〵て
乙女はやがて小き目を
ゆるしませあゝ父君
剛の者は又も泣きぬ
母の病は疾くいへぬ
孝の子はたえゝられつ
捧げたる桔梗の散りて
宮の主惡も深き
村人は敬ひ慕ふ
剛の者は主の惡に

○旅行の前夜

千代田袋に母上が
のこすくまなく調へて
うれしきあすを松虫の
淸くもすめる月影に
ふるひいでたる鈴虫の
合圖のりんのそれかとも
夜も更けぬらし夢うつゝ
心も駒に打ちのりて
世の塵うけぬ百合の花
眞白の面をうなだれて
高き理想に醉ひぬ

長野　關谷己子

あな奇しのこの森よ
杉津々と茂る哉
捧げられにし野菊一輪
剛の手は今やがて
いともつよう握りぬ
涙の瀧は落ちにける
やさしう開いていひけらく
み病いやさんとかくはしつ
いみじ涙の流れ〳〵て
父は喜び又泣きぬ
うれしくも宮に參る
杉の老木只生ひ茂る
うき病いやし給ふ
あゝ主よ情の主よ
くれて〳〵泣きあかしつ

群馬　竹のふし子

心盡しの數々を
僅か一日の旅なれど
聲なきゝつゝ打ちふしぬ
いれんとすれど目はさゆる
やさしき音にも胸おどり
思ひまどへる可笑しさよ
聞くもうれしき轡虫
いつか夢路にさまよひぬ

○夕散歩

東京　山田菊子

川ぞひに咲く糸萩の
空にのぼれる月影の
出づるともなくたゞ一人
おぼえず野邊にきて見れば
初穂ながらに打ふして
あはれ何處にやどるらん
ふけゆく里にひな歌の
ふくろふの聲さびしくも
はや家路にやいそがんと
たとりて歸る畔道を
花もちりしく夕まぐれ
清きすがたにあこがれて
そゞろあるきの淋しきも
秋風誘ふ萩原の
すだく虫さへたえ〴〵に
聲もいつしかきえはてゝ
身にしむばかりあはれなり
露おく草をふみしだき
月は清くもてらしけり

短歌

天賞

秋初風　群馬　江崎さく子

身にしみて吹くらん末はしらねども
まづめづらしき秋のはつかせ

地賞

庭萩　東京　山田喜久子

咲あまる萩は垣根を越ゆれども
道のをしへ折る人もなし

人賞

○

秋川　薩摩　松原岑子

ひとすぢのにしきの帶と見ゆるかな
もみぢ散りしく秋のやま川

○田家初秋　肥後　友永常子
あき來ぬとほにあらはれてこの朝け引板の音こそ聞えそめけれ

○海邊初秋　神戸　足立あさ子
かぎりなきあつさもけふのうらなみに消えて涼しき秋のはつ風

ゝゝゝ初雁　東京　土田八重子
秋はまだ木くさのいろもかへぬまにかりの涙はおちそめにけり

○雁　越後　山田波子
ふるさとの空なつかしみ見あぐれは月をかすめて渡るかりかね

ゝ○松蟲　京都　足利八重子
住すてゝとしふるさとのかや原にたれまつ虫のなきしきるらん

ゝゝゝ同　岡山　八田琴子
三日月をながむる宵のかりまくら はつまつむしを聞くぞ嬉しき

ゝゝゝ同　越後　山田淑子
つく〴〵と月にむかしをしのぶれは こたふる如きまつ虫のこゑ

ゝゝゝ同　筑前　恒屋こま子
津の國の安陪野の原を過ぎ行けは あはれや我をまつむしぞ鳴く

ゝゝゝ同　東京　若槻木あい子
たそかれにたちいてみれは松虫のこゑもあはれに聞えけるかな

ゝ○女郎花　神戸　足立ゑい子
世の中は口さか野なるをみなへし 秋なうしとなひとにかたりそ

ゝゝゝ同　京都　旭のり子
わか父のおくつきところこのとしも 咲く女郎花こころありてか

ゝゝゝ同　常陸　吉江萬子
ゆふ露もこゝろおくらん女郎花 あはれさまさるやさすかたかな

ヽヽヽ尾花　群馬　石井とく子
つゆの玉ちるも淋しき秋の夜は　尾はなかそてもしほれやすらん

ヽヽヽ萩　岩代　長澤ます子
おほろよにたれまねくらん萩の花　吹くとし見えぬ風のまに〱

ヽヽヽ萩　岐阜　山田ふさ子
よもすから萩ふくかせに驚覚して　ひとりねるよは夢もむすはす

ヽ〇花野　松山　岩崎きよ子
糸すゝきなひくはな野にともし火の　洩れてやつれし女立ちけり

ヽ〇擣衣　常陸　岡田萬子
さらてたに物のあはれもふかき夜に　ころも擣つなり淺茅生の宿

ヽヽ〇深夜擣衣　下野　井上倫子
ころもうつ音のたへまにさをしかの　なくねさひしき山里の夜半

ヽヽヽ月　東京　碓井のふ子
夜もすからひかりさやけき月みれは　世のうき事は忘られにけり

〇都秋月　東京　高橋珍子
いなつまのくろまもたえし都路を　さやかにてらす秋のよのつき

〇獨對月　能登　栗倉すみれ子
たゝひとり月に向ひてよもすから　けさ立ちましゝ君をしそ思ふ

ヽ〇深夜月　大坂　木村春江子
夜を寒みまとろむ夢はさめつれと　とさすに惜しき月のかけかな

ヽヽヽ同　大阪　池田英子
わか竹のつゆにやとれる月の影　めつるひまなく夜そ更けにけり

〇閑庭露　松山　上原のふ子
とふひとのなき庭にこそしらつゆの　玉は月をもかゝやかしけれ

ヽヽヽ秋の夕暮　能登　栗紆菫子
さらぬたにさひしき秋のゆふくれを　われひとりなり萩の花その

ヽ〇同　大阪　福原菫子
なるこひく音もさひしくきこえけり　田つらの庵のあきのゆふくれ

〇同　新潟　牧しけ子
あきの日の暮れ行く空をなかむれは　思ひ出おほき雲を見るかな

〇同　東京　瀬津梅子
なく鹿のこゑもほのかにきこえつゝ　月もほのめくあきのゆふ暮

ヽ〇秋風　東京　永井ふさ子
秋かせよこゝろして吹けわかにはの　千くさの花に露のむすへる

〇深山秋　兵庫　横田春子
猪のふしたるあとのくさかれて　たにのはきはらかせものすこき

ヽ〇晩秋　大和　栗山たか子
色あせしこすゑのもみちかつちりて　時雨のくものさわき初たる

〇落葉　岐阜　豊田ふゆ子
柿のみをかくす木のはも色つきて　おのつからちる音のしつけさ

〇納涼　和歌山　植木操子
吹く風にやなきの糸もうちみたれ　あつさわするゝ川つらのやと

ヽヽヽ蟬　東京　豊田とよ子
清水流る水の下陰にやすらへは　たひ路にうれしはつせみのこゑ

ヽヽヽ夏草　埼玉　桜田やな子
ふみなれし野への近みち夏くれは　とほくなりゆく草たかくして

〇水邊夏　埼玉　横田秋子
すみの江の濱へに御祓きてみれは　まつのおち葉なかた代にして

ヽ〇折にふれて　東京　敷島うた子
紫のこくもうすくもおもはすは　おもひそめたる甲斐やなからむ

ヽヽヽ同　愛知　榊原きく子
あれはてゝ松のみのこる城あとに　夜な〱むせふこほろきの聲

ヽヽ同　三重　吉田芳江子
夜半の鐘なみたにきゝてうらわかき　胸の緒みたす秋かせさむき

〇庵　東京　山田菊子
やれかきになく虫の音を友として　草のいほりにすめるつきかけ

ヽヽヽ山家の夕暮　群馬　竹のふし子
たそかれて山路をたどり行く馬車の　笛の音ほそう耳にひゝきて

ゝゝ○病の床をはらひて　備後　杉原衣子
夜あらしに消ぬへく見えし露の身の　起かはりたる今日そ嬉しき

ゝ○稲の穂のいてたるを見て　長野　岡田千鶴子
とよ年のしるしのいほは千町田の一穂にあらはれて見ゆる秋かな

○去年の秋母のやみにし折を思ひて　愛媛　高橋廣子
思ひいつるこその今ころみとりして　夜すから袖の露けかりしを

ゝゝゝ高架鐵道　埼玉　横田すま子
人とよむみやこ大路をしたにみて　ちまたやちまた行くくるま哉

ゝゝゝ富士登山　東京　美矢竹光子
いにしへは夢にのみ見しふしのねも　今はをみなのひとよ旅とは

ゝゝ○嬰發御前　備後　石井妙子
暗の夜を迷ふあらしにちる露の　たまのひかりは今もかゝやく

俳句

地賞

月

やぶれたる障子はづかし月の宿　上野　吉田うの子

人賞

秋

世の中を秋にして散る桐一葉　松山　上原のぶ子

○學童が軍歌で通る萩の道　熊本　沖たつ子

ゝゝ萩風やどこやら聞ゆ虫が
ゝゝ鬼灯を十ばかり賜ふ隣居かな　熊本　西　青子
ゝゝ三文の鬼灯得たる少女哉
○夕立の虹美はしき女男と松　熊本　沖たみ子
ゝゝ馬追の一寸來て鳴く渦殿かな
○種瓜のあかきに殘る暑かな　東京　永瀬しげ子
ゝゝ○釣たるゝ川の廣さや秋の風
○釣人の笠にとまれる蜻蛉哉
ゝゝ○芒野の地藏倒れし野分哉
ゝゝ芙蓉咲く小學校の花壇哉
ゝ○一本の柳久しう散りにけり　神戸　足立ゑい子
○鶏頭やほつれた儘の掛簾
○盲の葉に申す迄なり初月夜
ゝゝ散る日から盛りになるや萩の花
ゝゝ○雨の日は錦織りけり立田姫　神戸　足立あさ子
○瀧よりも上へに道ある紅葉哉
ゝゝ秋風や水の上だけ白う吹く
○露の音物嶽はしき夜なりけり
○月影に家は見えれど小夜砧
ゝゝ柚味噌燒く佛師が家の灯哉　東京　山本久子
ゝゝ美しき小坊主たちや草紅葉
ゝゝ松笠の月に打ちあたる夜寒かな
○打ち水に暑さ洗して夕餉哉　京都　高丘治子
ゝゝ虫の聲病婦の咳の頻りなり　横須賀　高橋つれ子
○稲妻や江口渡しを出たる船
ゝゝゝ鬼灯やまた振袖の仇姿
ゝゝゝ永き夜や小吏が妻の針仕事
○客よりも月に耻かし古疊
○一と森を領ずる百舌の高音かな　横濱　中御園かしは

ヽヽヽ白萩のこぼるゝ月の芝生哉
○初雁や去年より早き事十日　東京　本横つや子
ヽ○釣糸を輕う吹くなり秋の風
ヽヽヽ笛の音や月澄み昇る森の上
○ゆく秋を烏の鳴いて黄昏るゝ
ヽヽヽ山里や紅葉且つ散る朝しめり　東京　淺野眞子
○嫁そしる婆のかごとや夜の長き
○鳩鳴くや木曾へ三里の蕎麥畑
ヽヽ更科のかりねの宿やけふの月　群馬　石井とく子
ヽヽヽ虫の音を打けす宮の太鼓哉　群馬　天田あさ音子
ヽヽヽ霧晴や馬士のをしゆる左富士　群馬　石井寛子
○名もしらぬ花ばかりなる秋野哉　松山　上原のふ子
○字にかけば人こゝちする女郎花
ヽ○古びたる矢の根の銹や土用干　東京　永井ふさ子
○虫籠や草入れかへてまつ夜哉
○峯雲に月のかくるゝ夏の夜半
○野分する廣野を狐通りけり　下野　一少女
ヽ○夜も更けてまゝ手に重き砧哉
○講談の聲おとろへる夜長哉
ヽ○昨通る僧の衣に野分かな
○新貰ひし人の川越す里の秋　東京　加藤廷子
ヽヽヽたくはつの物乞ふ門や白芙蓉
○月さしてそよき嬉しや今年竹　長崎　秋山溪月女
○つまと二人語る今年の青田かな
ヽヽヽなれて見れば片山里も都かな
ヽヽヽ初秋や座靜かにお茶の客
○飴賣りのつゞれをも吹く秋の風　東京　稲田たけ子
○秋風や灯ともる村の人通り
○明月や堂朽ちはてゝ草の宿

ヽヽヽ繪馬堂に子供集ひぬ散紅葉　新潟　牧しげ子
ヽヽヽ盆踊り昔をしのぶ今宵哉
ヽヽヽ初秋の風吹き渡る草の上
ヽヽヽ砧打つ指白う見ゆる月夜かな　兵庫　横田春枝子
ヽ○乳母の孫はじめて見たる彼岸哉
○柿の實やねらふ小兒を蜂がさし
ヽヽ○輜重車の續く花野や雁の聲　松山　岩崎きよ子
○衣干す糸瓜の寺や秋日和
○村十月皆煙草干す日和かな
○臺所の釜が光るや今朝の秋
○芒野に虫すだくなり月今宵
ヽヽヽ新竹の五尺に伸びて銀河かな　松山　首藤さと子
○七夕や女ばかりの化粧の間
○七夕や俳句なんども覺束な
○七夕や君が紀念の繪短册
ヽヽヽ天の川筏の眞上の二つ星
ヽヽ結ひよせて株の小さき芒かな　筑前　恒屋こま子
○草市やいづれ露けき物ばかり
ヽヽ霧を出て霧に隱るゝ小舟哉
○何に夜を更す燈しぞ露の家
○白露や骨冷かの古戰場　常陸　岡田萬子
○うねり行く野川に萩の盛り哉
○鬼灯を垣に爭ふ姉妹哉
ヽ○秋の蝶無縁の墓を飛び回る
○白露の大事に覗くや蜘蛛のあみ
○秋晴や草を刈る人美しき　東京　新城濱子
ヽ○秋晴の富士の裾野や馬士の唄
○乘物を出で立ち給ふ花野哉
○小さき子のとんぼ追行く大草履

菊の宿

山川 溪子

しづかに松を吹く風に
なびくけむりのあとゝめて
みやまの秋をたづねつゝ
われたゞ一人こえくれば

かへり花咲く小春日の
めぐみの光りうれしとや
むなしき森に羽をやすめ
鳥ものどかにさへづれり

さゝ栗ひろふ里の子が
やさしき獣のあとおひて
しづかにたどる深山路の
落葉につゞく竹の垣

おほしそだてし老翁の
なさけのこゝろ嬉げに
菊こそかをれ園のうち
にほひこぼるゝ垣のそと

ひと枝こひて歸り來て
家の小瓶にさしはさみ
起ふし飽かずながむれば
ひとへに深き色に香に

なぐさめられぬ朝夕を
あさ茅に霜のふかき朝
いかにしてけむたちまちに
あはれその花しぼみけり

あはれその花しぼみけり

しら露

古澤えう子

下駄の音寒く月冴えて
柳さびしき廣小路
終りの馬車の影遠く
牛はとざす町の家

天の川原に流れゆく
按摩の笛の一こゑは
湯島のかたに跡たえて
今はた夢か夜のそら

窓のとぼしび心あてに
戀の辻うらめしませと
少女あはれや幼きに
戀ならずともいざ買はん

かぼそき影を地に踏みつ
うらむか聲の末ながら
忍が岡に露おちて
星も涙の眼をぬぐふ

あやにく多き髮の毛の
つめたき風にほつるゝよ
元結にかける紙こより
むすぶは心ばかりかは

長屋の窓に秋たけし
山茶花咲きし夕べより
いたづき重きたらちねは
光りも薄き床のうち

藥のしろと賣あるく
その辻占の紙よりも
薄きなさけのつれなさを
琴すむ軒に知りしとや

結ぶ島田のくづほれて
窓にかゝれるうたひ女の
戀か情かしらなくに
妹に似けるとはかりを

怪むなかれ少女子よ
あした我世のしら露の
雲井にちかき森よりも
野の草花になどしげき

さらば急ぎぬ鐘のなる
夢うちさましたらちねは
やれし障子の月の影
わが子の歸りを待つらんに

豫告

▽天長節號　次號は昨年よりの例にならひて、天長節當日に發行し、いさゝか祝意を表する爲、口繪などもめでたきものゝみをあつめ、記事も平常のとは大に面目を新たにすべし、

▽臨時增刊　十一月十五日を以て、女鑑の臨時增刊をなすべし、其の內實は科學の家事應用、諸大家の家事實驗等、悉く實用的文字を以て、直ちに家事に活用し得べきもののみを輯め、家庭に於て此上なき重寶のものたらしむべし、併も其の口繪插畫の如きは、本社獨特の印刷によつて、其材料の珍と相俟つて、大に讀者諸嬢の目を喜ばしむるものあるべし詳細は天長節に於て發表すべし、

要するに第二の家事節用にして、しかもこれ以上實用的也、女鑑の購讀者諸嬢は、是非この增刊雜誌をも購讀せられたく、もし月極の方に御不用の向もあらば、本月中に本社營業部宛に御沙汰ありたし、

定價（全國無逓送料）

一册	前金弐拾錢
三册	前金五拾七錢
六册	前金壹圓拾錢
拾弐册	前金弐圓拾錢

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁　三十二行	金八圓
一頁　六十四行	金拾弐圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地弐丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年九月廿八日印刷
明治三十九年十月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　株式會社國光社
東京市京橋區築地二丁目二十番地
右代表者　橋本忠次郎
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷人　河本龜之助

發行所　株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

女學及家庭書類

島田佳矣・野口駿尾共著　◎女子技藝 編物模様圖案　全五冊　定價（松ノ巻四十錢 竹ノ巻五十錢 蘭ノ巻五十錢 菊ノ巻五十五錢 梅ノ巻五十五錢）郵稅各二錢

棚橋絢子著　◎女道叢話　全　定價金三十錢　郵稅金四錢

三輪田眞佐子著　◎女子之本分　全　定價金二十五錢　郵稅金四錢

三輪田眞佐子著　◎女子處世論　全　定價金二十錢　郵稅金四錢

磯部武者五郎著　◎家計簿記法　全　定價金十五錢　郵稅金二錢

藤野天城著　◎女子小觀　全　定價金二十錢　郵稅金四錢

堀内新泉著　◎女樂師　全　定價金卅五錢　郵稅金六錢

松川霓州著　◎結婚と家庭　全　定價金十五錢　郵稅金四錢

堀内新泉著　◎家庭の鑑　全　定價金十八錢　郵稅金四錢

女鑑編輯局編　◎新編ひめかゞみ　全　定價金二十五錢　郵稅金四錢

著者	書名	冊數	定價・郵税
梅澤精一著	◎清少納言と紫式部	全	定價金卅五錢 郵税金六錢
澁谷愛著	◎萬國女子風俗	全	定價金二十五錢 郵税金四錢
堀內新泉著	◎少女讀本	全三冊	定價各金十八錢 郵税各金四錢
大町桂月著	◎常盤御前	全	定價金十三錢 郵税金二錢
小林雨搭著	◎勾當の內侍	全	定價金十三錢 郵税金二錢
澁田廉著	◎袈裟御前	全	定價金十三錢 郵税金二錢
國府犀東著	◎靜御前	全	定價金十三錢 郵税金二錢
長田偶得著	◎顏世御前	全	定價金十三錢 郵税金二錢
杉谷正隆著	◎家庭訓歌 修身百首	全	定價金二十錢 郵税金四錢
高瀨眞卿著	◎學校家庭 修身一夕話	全	定價特六十錢 並三十八錢 郵税八錢 六錢
指原乙子著	◎女子文章軌範	全	定價金三十錢 郵税金四錢

女鑑

明治三十九年十月一日發行
毎月一回一日發行
第拾六年第十一號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可



東京築地株式會社國文社印刷